

魔法少女リリカルなのは00

リボーンズガンダム

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔法少女まどか☆マジカの世界を救った、少年は次は魔法少女リリカルなのはの世界へと転生する。神により知らされた、この世界の滅亡を救えるのか？

※この物語の序章は自分が更新していた、魔法少女まどか☆マジカ00の番外編4に乗っていますのでぜひ確認をよろしくお願いします。

※一部修正を行っています

目次

原作前

第0話 再び転生 1

第1話 遭遇 5

設定 9

第2話 翠屋 12

第3話 自己紹介 16

第4話 学校 20

第5話 誘拐事件 25

第6話 締結 30

無印編

第7話 出会い 34

第8話 セットアップ 39

第9話 新たな敵 43

第10話 修行 48

第11話 ストレージデバイス 52

第12話 エヴァの力 56

第13話 話し合い 61

第14話 管理局登場 67

第15話 協力 72

第16話 1ガンダム 76

第17話 救援そして戦闘 82

第18話 最初で最後の全力全開の勝負 なのはVS 82

フェイト 89

第19話 突入！時の庭園 94

	第20話	B E Y O N D	T H E	T I M E	101
	第21話	名前を呼んで			108
	第22話	局員として			113
A's編	第23話	魔法家族ヴォルケンはやて			117
	第24話	はやての病気の真実			122
	第25話	再会			128
	第26話	敗北			133
	第27話	敗北の朝			138
	第28話	リベンジと鍋			143
	第29話	予兆と図書館			148
	第30話	プレゼントの用意とクリスマス			153
	第31話	決着と闇の書の闇			158
	第32話	話し合いとブラストカラミティと脱出			163
	第33話	決戦!!ナハトヴァール そしてトランザムライザー			169
	第34話	ガンダムVSガンダム	ラウ・ル・クルーゼと齊藤優人		174
	第35話	戦いの後			179
	第36話	その後の話			184
GOD編	第37話	始動と任務と歌姫			188
	第38話	出会い			194
	特別番外編その1				199
	特別番外編その2				206

第39話	話とまた出会い	215
第40話	新たな敵と来訪者	220
第41話	思いと破壊	225
特別番外編その3	クリスマス	230
第42話	絆と仲間	236
第43話	希望へと繋がる決戦	252
第44話	戦いの後とそれから	263
フロントムグリード編		
第45話	新たな始まり	268

原作前

第0話 再び転生

〃〃優人の家〃〃

〃〃優人 side〃〃

どうも、斉藤優人だ。前の世界では二度？かな世界を救った。といっても周りの人たちがいなくなったら無理だったが…さてと、おれは今、神が用意してくれた家に住んでいる。後で隣の人にご挨拶しなければ…さてまずは俺の家の説明をしよう。まず一階はリビング、トイレ、風呂場などとなっている。そして二階には部屋がいくつかあり、その内一つはヴェーダと繋がっているパソコンがあり、さらにそこはメンテナンスルームとなっている。ちなみにこの家には地下もあり、地下には模擬戦ができる闘技場があり、そこにはレベルを設定してそのレベルにあったジnkクスと戦う事ができる。さてと

「隣の人に挨拶するか…」

俺はソファから立ち引つ越し蕎麦を持って外にでた。

〃〃隣の家の玄関前〃〃

〃〃優人 side〃〃

さてと俺はこの家のチャイムを押した。そして少し経ってドアが開いた。

「はい？どちら様ですか？」

「あ、隣に引つ越ししてきた斉藤です。これからお願いします。あ、これ引つ越し蕎麦です。どうぞ。」

「あ、おおきにな。えと八神です。よろしゅうな。」

「ああ、えと親御さんは？」

「うちの両親は…」

「すまない。俺も一人なんでね。そうだ、俺の下の名前は優人。斉藤優人だ。よろしく。」

「私は八神はやてって言います。よろしゅうな優人君。」

「ああ、八神さん。」

「優人君、できればはやてって呼んでくれへんかな？」

「わかった、はやて。そういえば足、平気か？」

「ううん、車イスやから私。」

「はやてお邪魔していいか？」

「うん、ええよ。ほなあがってな。」

「ああ、お邪魔するよ。車イス押すよ。」

「おおきにな。さ、あがってな。」

「ああ。」

俺は車イスを押ししてお邪魔した。

〃〃数時間後〃〃

〃〃公園〃〃

〃〃優人side〃〃

「はやてのお茶うまかったな。」

俺ははやての家にお邪魔して、お茶を頂いてそしてメアドを交換して帰った。そして公園に来てブラブラしていたら、ブランコですごいしよげている女の子が一人いた。俺はそれが気になり、そこに向かった。

「なあ。」

そう言ったら女の子はビクツとしていた。

「いきなり呼んで悪かったな。どうしたんだ？」

そう聞いた。

「貴方には関係ないの。」

「まあ、そうだけどな。そうだ、少し待ってろよ。」

俺はそう言っただけで家にダッシュした。

〃〃女の子side〃〃

私は今、お父さんが怪我をして、皆が忙しくなったから私はいいい子でないといけない…そう思っていたら男の子がきて、話し掛けてきて、そしたらいなくなったと思っただけで直ぐに帰ってきたの。しかもバイオリンを持って。で男の子が私に近づいてきて、

「これを聞けば元気になるよ。」

そう言って演奏したの。

※優人が弾いている曲は機動戦士ガンダム00の「t r u s t
o u」です。

くく数分後くく

くく優人 s i d e くく

バイオリンで曲を弾いたら色々な子が集まってきて、更に曲を演奏した。そして演奏し終わったら沢山の拍手がきた。うれしかったな。

「どうだった?」

俺はさつき、暗かった女の子に聞いた。

「とても、良かったの!」

そう言って笑っていた。

「良かった。で、いきなりなんだけどき。どうしたんだ? さつき、あんなにびっくり暗かったからさ。」

「うん、実はねお父さんが怪我をして、皆が忙しくなって、私は…いい子で…ひつく…いなきや…ぐす…いなきやつ

…」

「そうか…」

俺はポケットからハンカチを出して女の子の涙を拭いた。

「それなら自分の思いを伝えればいい。」

「でも…それじゃ…要らない子って…」

「でもな思っているだけじゃ伝わらない。例えどんなに思っている相手にも相手に伝わらないと意味はないんだよ。だから君の思っている事を全て親に伝えるといい。」

「うん、やってみるの!!」

「泣き止むの早いな。だがその調子だ。俺が家の前まで送って挙げるよ。」

「ありがとうなの!」

「さっ行こう。」

俺は女の子と女の子の家の家に向かった。そして着いたら俺は別れて家に戻った。

〃〃優人の家〃〃

〃〃優人 side 〃〃

「暇だな。」

いま、はやては病院に行ってるってメールをくれたし。さて、散歩に行くか。俺はこの街の山へと向かった。

第1話

遭遇

前回の纏め

もう一度転生した斉藤優人は、まず隣の八神はやてに挨拶をする。そしてその後公園に行き、暗かった女の子を励ます為にバイオリンで曲を弾く。そして女の子は元気になった。その後、優人は山へと向かったのだった。

〳〳山の雑木林の中〳〳

〳〳優人 side 〳〳

俺は今、山の雑木林を散策中だ。

「んーつと空気がいいね。」

見滝原な所もいいがこういう所もいいね。ふう〜

『マスター』

「どうした? :CB」

こいつは前の世界でも相棒だった俺のデバイス、ソレスタルビーイングだ。名称はCBだ。

『はい、ここら辺に弱体化していますが魔力反応が。』

「そうか…場所は?」

『はい、この奥です。』

俺はCBの言うとおりに進んだ。そこには山猫が一匹倒れていた。

「こいつは…」

『この魔力から推察するに元使い魔だったと』

『どうすればいい!?!』

『マスター、まずはこの山猫に魔力を送って下さい。そうすればいいですよ。』

「わかった…ハッ!!」

そう言っただ俺は山猫に魔力を送った。そして送り終わって

「とにかく家に戻ろう。」

『それがいいです。』

〳〳優人の家〳〳

〜〜優人side〜

俺はソファで山猫を寝かせている。

「ふうこれで一先ずはいいな。」

俺は二階に上がりメンテナンスルームへと入ってヴェーダとリンクしているパソコンを弄った。

※ヴェーダと繋がっているパソコンは「劇場版機動戦士ガンダム00」のエピローグのイオリアが使っていた沢山モニターがあるパソコンです。

『優人。』

「ひさしぶりだな。リジエネ。」

『ああ、ひさしぶりだな。』

「ここ画面に映っているのはリジエネ・レジエツタ俺が外宇宙に行った時も助けて貰った大切な友人だ。」

『優人はこの世界の概要は聞いているか?』

「まあ、一様な。」

『わかった。もし、死ぬ人が近いときは助ける方法のデータを送る。後、このメンテナンスルームには外宇宙航行艦ソレスタルビーイングに行ける転移魔法があるぞ。ちなみにソレスタルビーイングは光学迷彩で隠されているよ。』

「了解だ。一度きるよ。」

『ああ、またな。』

そう言っリジエネは落ちた。俺は下に向かった。

〜〜一階〜

〜〜優人side〜

……………すまない。今、ありのままのことを報告しよう。山猫が寝ていた筈なのに、今、そこには起きた獣耳の女性が立っていた。少し考えていたらその獣耳の女性が

「貴方が私を助けてくれたのですね。ありがとうございます。」

「ああ、もう大丈夫なのか?」

「ええ、大丈夫です。貴方は、私の新しい主ですね。」

「へっ?ああ、君は使い魔なのか。」

「はい、私はリニスと言います。貴方は？」

「俺は斉藤優人だ。よろしくリニス。」

「はい、優人。」

「所で何であそこに倒れていたんだ？」

「それが記憶が一部封印されていて、よく覚えていないんです。」

「そうか。まあ、いいや。リニそそういうえば食材を買ってないんだよ。」

「一緒に行こう？ちなみにちゃんと耳と尻尾は隠してくれよ。ここで

は使い魔なんて認知されてないからさ。」

「分かりました。」

そう言つてリニスは耳と尻尾を隠した。

「じゃあ、行こうか。」

「はい。」

俺たちはスーパ―に向かった。

　　スーパ―

　　優人 side

「優人。今日は何を作るのですか？」

「ああ、ハンバーグを作ろうと思う。」

「その体で大丈夫ですか？」

「そういえば俺は五歳児だったな。」

「大丈夫。その時はリニスに助けて貰うよ。」

「分かりました。」

えくとあ、このひき肉安いな。この豚肉も安いな明日に使うか…

　　数分後

　　優人 side

俺たちはスーパ―をでた。

「この後は？」

「少し小腹が空いたから翠屋つていう、店に行こうと思う。」

「分かりました。あつ荷物持ちますよ。」

「少しお願い。」

俺たちは翠屋へと向かった。

　　翠屋

くく優人sideくく

さて、翠屋に着いたな。俺たちは適当な席に座り、メニューを広げて

「どうしますか、優人どれも美味しそうです。」

「好きなもの頼んでいいよ。その代わり残すなよ。」

「分かっています。」

俺はコーヒーとシユークリーム、リニスには紅茶とショートケーキを頼んだ。

「お待たせしました。どうぞ。」

「どうも、あっ…。」

「あっ…。」

俺は頼んだ物を持ってきたウェイトレスを見て驚いた。

設定

斉藤優人

容姿 刹那・F・セイエイ

年齢（現時点） 9歳

身長（現時点） フェイトよりも少し上

魔力量 EX+

この物語の主人公。前の世界では二度？世界を救った。前の世界の最終決戦により、半身を失いELSと融合して生き延びる。しかし、再転生の時は全身が前の世界では銀色だったのに、元の肌の色に戻っている。がELSみたいに相手を取り込む事もできる。ちなみに魔力がEX+なのはELSと融合して、更に間を置いてさらにELSが馴染んでいることにより、ELSがこの世に存在するかぎり、魔力が切れる事は一生ないだろう。ちなみに彼の性格は「戦う時には戦う戦わない時には戦わない」、それを基準にしている。困っている人にはてをさしのべ救おうとしている性格でもある。だからその事もあり、男女両方に好かれている。ちなみに料理の腕前は相変わらず上手である。ちなみに前の世界であったのに鈍感である。

デバイス ソレスタルビーイング

名称 CB

神により与えられたデバイス。前の世界では0ガンダム、ダブルオーライザー、ガンダムハルトを失っていたが神によりそれらは復活する。そして優人が倒してきた、リボーンズガンダムかガンダムスローネ系統も扱えるようになった。ちなみにこのデバイスにはヴェーダの小型ターミナルユニットが搭載されており、その事もあつてか独自にモビルスーツを2機まで動かす事ができる。性格はマスター思いでマスターが危険となればほぼ無理矢理にGNフィールド

を形成する。

人物

リジエネ・レジエツタ

魔力量 S+

容姿や中身は「機動戦士ガンダム00」と変わらないが、場所的にはティエリアポジション。ヴェーダで眠っていた為に一緒にこの世界に来ることになった。が神曰く「前の世界では大切な相棒だったと思うのでどのみち連れて来ました。」だったとか。ちなみに肉体をまたつくり、ラファエルガンダムに乗って戦う事もできる。ちなみにまだ世界の料理の食べ歩きは飽きてないとか。

ELS

「劇場版機動戦士ガンダム00」と変わらないが斉藤優人と融合していることにより、彼が喚ぶと次元を越えてやってくる。ちなみに彼のを変形させて他のELSと合体して大型の武器を作る事も可能。ちなみに斉藤優人と融合している事により、彼のデバイスが持つ全てのガンダムのデータを入手ができた。それにより、ガンダムに擬態することが可能。ちなみに小型、中型、大型とあるが大型は花となっている。大型は基本前の世界にいるが斉藤優人の号令一つで次元を越えてやってくる。

神

魔法少女リリカルなのはの世界へと転生させた本人。精神面は豆腐から木へと変わった。だから例え文句を言われようとも一回は我慢

できる。これは斉藤優人の勇気の凄さを見て、自分もこうしなきゃと
思ったからである。ちなみにまだロンギヌスの槍とそのレプリカと
カシウスの槍は持っているがいずれか斉藤優人に渡すらしい。

※この世界のモビルスーツについて

アイアンマンみたいなパワードスーツ型であり手足の用に動かせる。
がモビルスーツを纏ったとき自分の体は別次元へと移されるため
モビルスーツの手や足等を斬られたり撃たれて破壊されたとしても
自分の体にダメージがそのまま反映されることはないが、モビル
スーツとは意識が繋がっている為手や足等を破壊された場合実際に
手や足を失うような感覚を受けることになる。そして一定以上のダ
メージを受けすぎるか一気に一定以上のダメージを受けると体に反
映されることもある。

第2話

翠屋

前回の纏め

山の中を歩いていた斉藤優人。そして山の中で一匹の山猫を見つける。そして優人はその山猫に魔力を送って命をすくう。家に山猫を持ち帰り、リジエネと話した後、山猫が一人の女性になっていた。女性の名はリニスであった。そして優人はリニスと買い物に行き、翠屋へ行く。そして注文した物を運んで来たのは見たことがある女の子だった。

　　～～翠屋～～

　　～～優人 side～～

さて、リニスを助ける前に助けた女の子がいた。その女の子はこの翠屋にいた。なんて偶然？

「優人？知り合いですか？」

「えと、知り合いというかさつき、逢った女の子なんだよ。リニス。」

「そうですか。」

女の子は少しきよんとしていた。

「えと、これが注文した物になります。」

「ありがとう。そういえばちゃんと思いを伝えたか？」

「うん！ありがとうなの！」

そう言っただけの子は走って行った。さてと

「俺たちも溶けない内に頂こうか。」

「ええ。」

俺たちは注文した物を食べた。おっ旨いな。これは凄いな。

　　～～優人の家～～

　　～～優人 side～～

さてと買った食材も冷蔵庫に入れたしもう完璧かな。

「そうだ。リニス。」

「はい、なんですか？」

「リニスに説明しとかないとね。着いてきて。」

「はい。」

俺たちは階段を昇って二階に向かった。

くく二階くく

くく優人 side くく

さてと今、俺はあのメンテナンスルームに居る。

「着いたな。」

「なんですか？この嚴重な扉は？」

「あるとは思えないがこれを見た人間が欲してデータ等を奪わない用
にな。」

「そうですか。」

俺はまず手を平べったい所に置いてDNAを解析させて

「完了。」

扉が開いた。

「凄いですね。」

「まあな。ちなみにリニスのも登録しとかないとね。」

俺はリニス手を取り、登録する所に置いて登録をした。その時リニ
スは顔が赤かった。

「?どうした?リニス。」

「いえ、何でも。」

「そうか、それじゃ説明をするよ。まずここら辺がデバイスを等を整
備、開発等を行う所な。で、つぎはこれがパソコンな。これはほぼ演
算とかはする必要がないからやりやすい筈だよ。で最後に俺のデバ
イスの自己紹介を。CB」

『はい、マスター。こんにちは、斉藤優人のデバイスのソレスタルビー
イングです。長いのでCBとお呼びください。』

「はい、リニスです。よろしくお願いします。CB。」

『はい、リニス。』

「さてと一様ここの説明は完了かな。あと、地下は闘技場となってい
るし、さらに練習場としても使えるから時間があったら使ってくれ。
質問は?」

「ないです。」

「じゃあよろごはんにしよう。そういえば隣に住んでいる八神はやてっていう女の子がいるんだ？彼女を呼ぼうとおもうんだがどう思う？」

「いいのでは？」

「わかった。じゃあ呼んでくる。」

俺ははやての家に向かった。

　　はやての家の前

　　優人 side

俺はチャイムを押した。

『はい。』

「えと、はやてか？」

『優人君かいな？』

「ああ、よろごはん一緒にどうかかなと思ってね。」

『ええの？そんなら行かせて貰おつか。』

「わかった。扉開けて運んであげるよ。」

『おおきにな。』

そう言っただけで切れた。そして扉が開いた。俺はそこに向かい、はやての車イスを俺の家まで運んだ。

　　優人の家

　　はやて side

今日、引越してきた斉藤優人君は私を家に招待してさらに夕飯まで呼んでくれたんや、とてもうれしいな。

「はい、はやてお待たせ。」

『おおきに。』

「じゃあ食べるか。」

「いただきます。」

私は優人君が出してくれた、天ぷらを食べた。

「美味しい。」

「そうか…良かった…」

「これ、どうやって作ったん？」

「それはな…」

優人君は天ぷらの作り方を丁寧に教えてくれはった。そうだ

「その女性誰なん？」

「ああ、紹介してなかったね。彼女はリニス。俺の新しい家族さ。」

優人君がそう言いはるとリニスさんは立ち上がって。

「どうも、リニスです。よろしくお願いします。」

「あっこちらこそ。」

「なあはやて。聞いていいか？」

優人が恐る恐る聞いてきなはった。

「別にええよ。」

「わかった。君に差し支えがなければ君の家と俺の家を繋げたいんだ。」

「え？そんなこと可能なん？」

「まあな。これはリニスにも話を通しているんだ。」

「ええ、まったくくなんたる無茶ぶりですか…」

「ごめんごめん、で返答は？」

「お、お願いな。でも何でここまでしてくれるん？」

「それはな、もう俺たちは家族みたいな物だからさ。」

「優人君…おおきにな。」

「どういたしまして。さ、たべようか。」

私達はその後、夕飯を美味しくいただいたんや。美味しかったな。

〳〳数時間後〳〳

〳〳優人side〳〳

はやては結局ここに泊まる事になり、今、寝ている。さてと明日はどうしようかな。俺はそう考えながら眠りについた。

第3話

自己紹介

前回の纏め

翠屋で食事をとった斉藤優人は家に帰り、リニスにメンテナンスルームの説明などを行った。そして優人は八神はやてを家に呼び、一緒に夕飯をとるのだった…。

〓〓次の日〓〓

〓〓優人の家〓〓

〓〓優人 side〓〓

さて、今、俺の家とはやての家を繋げる工事が行われている。リニスははやてはリニスの服を買いに行っている。じゃあ俺は

「はやてとリニスの為に翠屋のシュークリーム、買ってくるか。」

俺は玄関に来て、

「鍵よし、あれ、財布は…あ、あったあった。行くか。」

家のドアに鍵を掛けて翠屋に向かった。

〓〓翠屋〓〓

〓〓優人 side〓〓

さて、着いたな。と言つてもメイクアウトだけだが。

「えーと、シュークリームを六つと、モンブランとショートケーキを二つ下さい。」

「はい。」

その時奥からあの女の子が来た。

「お母さん。何か、手伝う？あつ」

「あつ」

「お知り合い？なのは。」

「えーと、私に勇気を押ししてくれた人なの。」

「そうなの。ありがとうね。上がってくれないかしら。」

「いや、でも」

「来てくれないの?」

女の子が上目遣いで聞いてきた。うっこれじゃ

「分かりました。お邪魔させて貰います。」
「どうぞ♪」

俺は女の子の家に入った。

　　〳〳女の子の家〳〳

　　〳〳優人 side〳〳

なんだこの状況は、女の子の家族に囲まれてるんだがしかも皆頭を下げてお礼をしてきたし、

「だから、いいですよ。」

「いや、しかし君のお陰でなのはは救われたんだよ。だからありがとう。」

「いえ、暗い女の子を無視するほどの勇氣は俺にはないですから。」

まあ、その後もありがとう、大丈夫ですよ、の繰り返しとなった。

　　〳〳数分後〳〳

　　〳〳優人 side〳〳

あのお礼合戦が終わり、自己紹介をした。まず、一番下がなのはで次の女性は美由希でその二人の兄貴が恭也だとか。で母親が桃子だと。というか母親若くね？

「俺は斉藤優人です。よろしくお願いします。」

「よろしくね。」

「よろしくな。」

「よろしく♪」

「よろしくなの。」

「ねえ斉藤君。私の事をなのははって呼んで、優人君って呼ぶから。」

「わかった。よろしくな、なのは。」

「うん！」

なのはは笑っていた。なんか恭也さんの顔が少し怖いんだけど。その後俺はお茶をいただいた。ちなみにちゃんとシユークリームとショートケーキとモンブランは買ったぞ？

　　〳〳なのはの部屋〳〳

「…なのはside」

私を救ってくれた男の子の名前が今日わかったの。名前は斉藤優人君。とても優しかったなく。それにかっこ良かった!!また、会えるかな。私はそう考えながら一回眠りについた…。

「…優人の家」

「…優人side」

さて、ちょうど工事も終わっている事だしいいな。俺は玄関で靴を脱いでリビングに入った。

「ただいま。」

「あ、お帰りなさい。」

「ただいま、リニス。あれはやては？」

「今は寝ていますよ。」

「そつか。これ、後で食べてくれ。」

「いいんですか?」

「いいよ。」

「ありがとうございます。」

「俺は夕飯の支度をするから。待ってて。」

「あっ手伝いますよ。」

「ありがとうございます。」

俺とリニスは今日の夕飯の準備にかかった。

「…ヴェーダ内」

「…リジエネside」

僕は今、新しい補佐のイノベイドを制作している。一応、イノベイドも繁殖が可能となっているんだ。ちなみにタイプは女性だ。名前は

「セシア・アウエア…と」

入力完了。後は肉体の構築だけか。

「…優人の家」

「…優人side」

今、俺たちは夕食を食べ終わり、今、通路の説明をした。比較的結構幅が小さかったから工事がしやすかったとか。

「……つと質問は？」

俺ははやてとりニスに聞いた。

「ないで。」

「ありません。」

「そうか、じゃあ皆で今日買ったシュークリーム食べようか。」

「あつ優人紅茶だしますね。」

「ああ。」

そう言っつてリニスは台所に向かった。そしてはやてが

「なあ、優人君。」

「どうした？はやて。」

「今日はおおきに。ほんまに助かった。」

「なんで？」

「初めて、買い物、他人と行ったからや。だからとても楽しかったんや。だからほんまにおおきに。」

「そうか、どういたしまして。」

「紅茶、入りましたよ。」

「わかった。はやてそこで待っててくれ。シュークリーム取ってくる。」

「うん、待つとる。」

俺たちはシュークリームを食べてその後は寝た。この世界は守つて見せるさ。必ず。

第4話

学校

前回の纏め

翠屋に行き、高町なのはの家族にお礼を言われる斉藤優人。数分はお礼合戦が続いた。そして自己紹介をして、優人は帰った。家に帰り優人はリニス、八神はやたと夕食を食べる。そしてその後、シユークリームを食べたのだった。一方ヴェーダでは新しい人格が生まれるのだった。

〓〓一年後〓〓

〓〓優人の家〓〓

〓〓優人 side〓〓

遂に小学校一年生か…。しかも聖祥大学付属小学校か…。ちなみに受験して、受かったぞ。俺は制服を着て、リビングに行った。

「どうかな？はやて、リニス。」

「似合ってますよ。」

「うんうん、似合つとるで、優人君。」

「ありがとうな、さて行くか。」

「あつ、はやたと一緒にいきますよ。」

「うん、気をつけてな。」

「ああ、先に行ってるな。」

俺は聖祥大学付属小学校へと向かった。

〓〓教室〓〓

〓〓優人 side〓〓

さて、着いたな。周りを見渡したらなのはがいた。なのはも気づいたらしく、こっちに近付いて来た。

「優人君！一緒にクラスだね。よろしくね。」

「ああ。よろしくな。なのは。」

「うん！」

俺は席についた。

※ちなみにこの後は更に時が進んでいますが、まだ一年生です。

くく更に時は進みくく

くく放課後くく

くく優人sideくく

俺は今、帰る用意をしていた。その時奥の席で何かがあった。彼女等は月村すずかとアリサバニングスか。バニングスさんが月村さんのカチューシヤを取り上げた。貸して欲しかったとか。

「返してよ!!」

「いいじゃない!!」

その瞬間ビンタの音が響いた。ビンタしたのがまさかののほだったよ。なのはが

「痛い?でも大切な物を取られた人はもつと痛いんだよ。」

そうなのはが言った後喧嘩が始まった。止めるか。俺は彼女等の所に行つて、二人とも拳をグーにしていたから俺は二人の拳を掴んだ。

「そこまでだ。これ以上はいけない。」

「優人君…。」

「何よ!!正義の…味方でも気取ってるの!?!」

「気取ってねーよ。だがこれ以上の喧嘩は禁止だ。せめて屋上で話し合いをしろ。」

俺は無理やり二人を引っ張り屋上に連れてつたがその前に

「月村さんだっけ?君も来るといい。」

俺はそう言った。なんかすごい無茶ぶりだな。

くく屋上くく

くく優人sideくく

着いたな。俺は二人の手を離した。

「いいで、話すといい。」

俺は屋上のフェンスに寄りかかった。二人は話し合いを始めた。

そして月村さんも呼んで結局は仲直りをしていた。なんか早いな。笑っているな…じゃあ俺は帰るか。そう思った時なのはが

「優人君、こっちに来てく。」

「どうした？」

俺はなのは達に寄った。

「んで、何かようか？」

「うん、ありがとうね。助かったの。」

「いや、俺は余計な事をしたただけだよ。」

「そうよ!!」

「でも、それのお陰で仲直りができたから良かったよ。」

「そうかな。」

「優人君、自己紹介は？」

「ああ、斉藤優人だ。よろしくな。」

「私、月村すずか。よろしくね。すずかって呼んでね。優人君って呼ぶから。」

「あたしはアリスバニングス。優人って呼ぶからアリスって呼びなさい!!」

「ああ、よろしくな。アリス、すずか。」

俺たちは屋上から教室に戻り、この五人で帰った。

〃〃優人の家〃〃

〃〃優人 side〃〃

「……………ということがあったんだよ。」

「それはなんというか凄いですね。」

「そのなのはちゃんっていう子。凄いな。」

「だろ？」

俺は佃煮を掴んで食べた。

「これははやてが作ったのか？」

「うん、どうかな？」

「とても旨いよ。毎日食べていたい位だよ。」

「そ…それって…。」

はやてが顔を赤く染めていた。リニスの顔が少ししかめていた。なんで？

「いや、美味しいからさただ食べていたいなと思ったただだよ。」

「な…なんや…。」

はやてが少し残念な顔をしていた。夕飯は美味しくたべた。

～～メンテナンスルーム～～

～～優人side～～

夕飯を食べ終わりメンテナンスルームに入り、パソコンを弄っていたらヴェーダからのメッセージで

『今から転移である人物を送るよ。』

なんだろうと思ったら後ろが光った。後ろを見たら、髪は銀髪っぽくて瞳は緑の女性が出てきた。

「えーと、貴方は？」

「私はセシア・アウエアです。よろしくお願いします。」

「セシア？」

「はい、セシアと呼んで下さい。優人。」

「ああ。」

しかし、どうしようか。どうやって説明しようか。ううむ。まあ、なんとかするか。

「セシア、下に行こう。皆に紹介するよ。」

「はい。」

俺とセシアは一階に降りた。

～～リビング～～

～～優人side～～

「さて、この女性の事、説明してもらおか。」

はやてが般若に見えた。リニスもそうだ。

「教えて下さい。誰ですか？その女性は。」

「彼女はセシア・アウエアだ。えーと、こうなんというか…。」

「さあ、説明せえ。」

「まあ、なんだ、とある所から来た人かな。ちなみに何処からかは何時

か話すよ。」

「そうですか。今はそれで納得しときます。」

「そうやな。」

「じゃあセシア、自己紹介を」

「セシア・アウエアです。よろしくお願いしますね。」

「八神はやってって言います。よろしゅうな。」

「リニスです。お願いしますね。」

「はい。」

「こんなところで悪いがシユークリーム、食べよっか。」

俺達は紅茶を飲みながらシユークリームを食べた。

第5話

誘拐事件

前回の纏め

遂に聖祥大学付属小学校に入学した斉藤優人。その後、月村すずかはアリサ・バニングスにカチューシャを取られたら高町なのはがアリサにビンタをした。そして喧嘩が始まったが優人が仲裁に入り、仲直りをした。そして皆は自己紹介をした。優人は夕飯でその話をした。そしてメンテナンスルームに行き、パソコンを弄っていたらある人物が転移された。彼女の名前はセシア・アウエアだった。

〓〓一年後〓〓

〓〓放課後〓〓

〓〓外〓〓

〓〓優人 side〓〓

一年生の時は色々な事が沢山あったな。すずかの家は猫ばかりでそれに対してアリサの家は犬ばかりで。俺は今、一人で帰ろうとしたがそうもいかないな。あれは…

「いや!!離して!!」

「はなしなさいよ!!」

アリサとすずかが車に連れ込まれていた。俺はそれをみてその車に発信器を引っ付けた。そして車はそれに気付かずにでた。おれも行くか…。携帯を出してセシアに連絡した。

「もしもし、セシア?今から送る座標に急いで来てくれ。すずかとアリサが拐われた。急いで来てくれよ。ああ、じゃあな。」

俺は携帯を閉じて走りながら

「CB、座標は?」

『はい、ここの廃ビルです。近いですね。』

「それをセシアに送ってくれ。」

『了解。』

俺はCBが教えてくれた座標に急いでむかった。

〃〃廃ビル前〃〃

〃〃優人side〃〃

着いたな…

「優人ー。」

セシアが来たか。

「すいません。少し遅れました。」

「いや、構わないよ。セシア、すずかとアリサが捕まっていたら助けてくれないか。俺はこういうことをした犯人を倒す。」

「しかし、」

「大丈夫だよ。さ、行こう。」

俺とセシアは廃ビルに突入した。

〃〃すずかの家〃〃

〃〃恭也side〃〃

俺と忍は今、緊迫している。すずかちゃんとアリサちゃんが拐われたのだから。忍は焦っていた。今回の犯人が、わかってきたとか。

「どうしましょう、恭也。」

「とにかく突入しよう。万が一の時の為にすずかに発信器入りの携帯を持たせているんだろ？」

まあ、確かに買った携帯に細工をしたんだけど。

「そうだけど。」

「なら行こう。美由希も呼んだ。俺たちは用意をしよう。」

「そうね。」

俺たちは用意をした。

〃〃廃ビル〃〃

〃〃優人side〃〃

俺は右手にGNビームピストルを持ち、歩いている。
「いた。」

俺は犯人のグループの一人を殴って気絶させた。

「よし。この服を着てはれないように行くか。」

俺は犯人のグループの一人の服を剥いで着た。

「これでよし。というかブカブカだな。まずは順番に犯人グループを潰すか。」

俺は進んだ。そしてその道中にいた犯人のグループを銃を鈍器にして殴ったり、男の場合、股間を銃で殴ったりした。そして着いたな。俺は服を脱いだ。

「これで楽だな。」

俺はGNビームピストルを構えて犯人達の所に突入した。

　　〳〳廃ビル最上階〳〳

　　〳〳優人side〳〳

「そこまでだ。」

俺は前に出た。

「優人君…。」

「優人。」

「なんだ君はヒーロー気取りか？」

「違う俺は二人を助けに来ただけだ。だから忠告をする今すぐ降伏をしろ。出なければここで、死ぬぞ。」

「ふん、そんな子供騙しに引っ掛かるかよ。いけ、お前ら」

その時主犯と思われる男の周りから人が沢山出てきた。俺はGNビームピストルを前に向けて何人いるかみた

(15人か…。)

俺はGNビームピストルで五人の足を撃ち抜いた。そして走って一人を捕まえて背負い投げするふりをしてもう一人に向かって投げた。そして一人の顔を掴んで膝で蹴りあげた。そして倒れ掛けた人を踏み台にして腹部分に蹴りを入れて顔を思いつきり地面に叩きつけた。

「凄いな君。だがな、この紫の髪の子の秘密を知っているかな？」

「やめて!!」

「こいつはな…。」

「お願い!!やめて!!」

「夜の一族っていう吸血鬼なんだよ!!」

そう、男が言った瞬間、すずかは泣いていた。その時アリサが

「そんなの関係ないわよ!!すずかは私の大切な友達よ!!」

「アリサちゃん…。」

「よく言ったなアリサ。すずか後で伝える…先に俺は奴等をほこす。」

俺は走って残りの連中を殴っては蹴り、殴っては蹴りの繰り返しによつて男以外は全滅した。そして

「後はお前だけだ。」

「くっ…貴様!!」

その時後ろから足音が聞こえた。

〃〃忍side〃〃

私と恭也と美由希ちゃんがついたとき一人の少年が残りの一人を残して倒していたわ。

「これは…。」

「来たんだね、忍!!僕のモノになる決心でもついたんだね!!」

「貴方は!!そんな事ですずかを誘拐したのね!!」

「そうだよ。君があのととき僕のモノになっていれば良かったんだ。なに君とききたら何の価値もない男と付き合っさ。だから僕は家の金などを駆使して君の妹を拐ったのさ。なんで、そいつなんだよ!!そいつより僕の方がいいだろ!!君が僕のモノにならないなら君の妹をいただく!!」

「ひっ…!」

すずかは震えていたわ。

「貴方は…!」

私が怒りで震え上がる瞬間そいつは少年に吹き飛ばされた。

「もういいか?戦闘中におしゃべりなんていい度胸をしている。」

〃〃優人side〃〃

「貴様…よくも…!」

「これでお仕舞いだ。」

俺は落ちていた銃を鈍器にして思いっきり殴った。そして男は気絶した。

「これで終わりか…セシア！」

「大丈夫ですよ。彼女達は無事です。」

セシアがすずかとアリサを連れてきた。

「無事だな…良かった。」

「優人君、ありがとう。」

「いや、構わないよ。アリサもよく頑張ったな。」

「ふん、当たり前よ。」

「少しいいかしら？」

その時犯人と話していた女の人が見てきた。横にいた男女は見たことがある。あれは…

「恭也さん、美由希さん？」

「君は…優人君か…。」

「はい、そうです。」

そう答えた時、女の人が

「では場所を移しましょうか。」

そう言ったから俺たちはこの廃ビルから離れた。

第6話

締結

前回の纏め

犯人グループに拐われた月村すずかとアリサ・バニングス。斉藤優人はすずかとアリサを拐った車に発信器をつけて、セシア・アウエアに連絡して犯人グループが向かった所へむかった。一方月村忍達も向かう準備をしていた。そして突入した、斉藤優人。主犯の男以外を倒した後、すずかの秘密を知るがアリサはそれでも大切な友達だと答えた。そして斉藤優人は戦闘に専念した。忍達も到着して男と話をしたがその後優人が男を蹴り飛ばしてその後銃を鈍器にして殴って気絶させた。

〳〳月村家〳〳

〳〳優人 side〳〳

さて、今俺とアリサとセシアはすずかの秘密を改めて知った。吸血鬼か：それがもし化け物だと言うなら俺は何だろうな…。でもアリサはそれでも大切な友達だともう一度答えた。すずかはそれが嬉しくて泣いていた。

「さて、斉藤優人君だったかしら？貴方はどう思うの？」

「俺は例えすずかがどんな存在でもすずかはすずかだと思う。それに俺はあのときすずかと出会った事を後悔はしていない。」

「優人君…。」

「そう、なら締結ね。」

「締結？」

「そうよ。この秘密を知った者は秘密を知った部分だけの記憶を消されて生きるか。それとも私達と盟友になるかよ。」

「盟友だな。いつまでもすずかと居たいからな。」

「優人君…。」

すずかは顔を赤く染めていた。アリサはなんか不機嫌な顔をしていた。女の人は驚いてそして面白そうに見ていた。

「ふふ、面白いわね。私の自己紹介してなかったわね。私は月村忍。」

「さすがの姉で恭也の彼女よ♪」

「そうなんですか？恭也さん。」

「まあな。それより、君の力驚いたよ。あれは何かしら習っていたのかい？」

「いえ、我流ですよ。けどそのお陰で剣とか銃とかなんでも扱えるようになってきました。」

「ほお、なら今度勝負をしよう。」

「分かりました。では今度。」

「ああ。」

「さて、帰るかな。」

俺はランドセルを背負って帰ろうとした

「優人君。」

「さすがとアリサが寄ってきた。」

「どうした？」

「今日は助けてくれてありがとう。」

「そうね。あ、ありがとう。」

「ああ。セシア帰ろう。」

「はい。」

俺とセシアは帰った。

〳〳数十分後〳〳

〳〳忍side〳〳

「恭也、面白かったわね。優人君。」

「ああ。あの時の彼の目は完全に人を殺した事がある目だった。」

「あら、そうなの？」

「ああ、だからこそかな。一回戦ってみたものだ。」

「たく癖がでてるわね。」

〳〳斉藤家〳〳

〳〳優人side〳〳

俺は今、リニス、はやて、セシア達と夕飯を食べている。そして何

があつたかを話している。

「……………と言うわけだ。」

「そうですか。」

「だから遅かったんやな。心配したんやで？」

「すまないな。はやて。」

俺ははやての頭を撫でた。はやては嬉しそうに目を細めていた。リニスは少し不機嫌な顔をしていた。

「リニスもありがとうな。今度心配させたからさ、何処かに出掛けないか？」

「え？ほんとですか？」

「ああ。」

「あ、ずるいでー！私も連れてってほしいなー。」

「ああ、今度はやてもいこうな。」

「うん!!」

俺たちは美味しく夕飯を食べた。

～～～寝室～～～

～～～優人side～～～

俺は今、メンテナンスルームでセシアと話した事を思い出していた。

～～～数時間前～～～

～～～メンテナンスルーム～～～

『それはほんとか？』

『はい。今、ヴェーダや、リジエネさんが新しいガンダムの開発を行っています。』

『新しいガンダム…。』

『はい。それはエンジンはGNドライブですが機体の所々には発光するものがあります。』

『機体の名は決まっているのか？』

『ええ、その名はエクストリームガンダムです。』

〃〃現在〃〃

〃〃優人side〃〃

「エクストリームガンダム…。」

俺は少しどんな機体かなと胸を踊らせて寝た。

〃〃???
〃〃〃〃

今、とある場所では謎の会合が行われていた。

「いいのですか？大佐。」

「構わないよ。我々は更に軍備増強もできた。後は、決行するだけだ。それに頼もしい仲間もいる。」

「そうですね。」

「それは僕の事か？」

「そうだ。この私自ら期待をしている頼むぞ？ビサイド・ペイン君。」

「ええ、この僕ならば彼、斉藤優人を倒せるでしょう。大佐。」

無印編

第7話

出会い

前回の纏め

月村家と盟友になった、斉藤優人。その夜、優人はメンテナンスルームでの話を思い出していた。新たなガンダムの名はエクストリームガンダム。一方とある所では遂に何かが起ころうとしていた…。

〃〃一年後〃〃

〃〃バス停〃〃

〃〃優人 side 〃〃

この空白の一年は色々あったな。まあ、いいか。

「優人くん!」

なのはが来た、

「おはよう、なのは。」

「おはようなの!」

「元気だな。なのは」

「うん、バス来たよ。」

俺となのははバスに乗った、そして後ろの席にいたアリサとすずかの所に行った。

「おはよう、アリサすずか。」

「おはよう、優人君、なのはちゃん。」

「ほら、早く座りなさいよ。」

「ああ。」

「うん。」

俺となのはは席に座った。

〃〃授業中〃〃

〃〃優人 side 〃〃

さて、今先生が将来の夢について語っている。将来の夢か…前の世

界だと世界を救うのに一生懸命すぎたから覚えてないや。ちなみに俺の席は窓際だ。

〃〃放課後〃〃

〃〃池付近〃〃

〃〃優人side〃〃

俺達は今、池に行つてボートのスワンを漕ごうということになって池にきたが、そのスワンがあるところは所々、穴だらけになっていた。警察も来ていた。アリサが警察に

「あの、何かあつたんですか？」

「ああ、何者かが

この場所をボロボロにしたんだよ。この辺りは危ないから帰りなさい。」

そう言っていた。その時

『助けて…』

この声は…なのはが反応をしていた。

「なのはちゃん、どうしたの？」

「すずかちゃん、今何か聞こえなかった？」

「んー何か？」

なのはは片手を縦に上げて

「ちよつとごめん!!」

そう言つて走つた。まったくすずかとアリサは顔を見合せてなのはの後を追いかけた。俺もその後続いた。

〃〃なのはside〃〃

さつき、声が聞こえて私はその声がするところに向かったの。私はこの池の近くにある雑木林に入つて走つたらフェレットが倒れていたの。そのフェレットは私を見たの

「あつ…。」

〃〃動物病院〃〃

〃〃優人side〃〃

なのはがフェレットを連れてきて俺達は動物病院に向かった。先生の話によると怪我自体はそんなに深くなくてもそのぶん衰弱しきってるとか。なのはがお礼を言っていた。アリサとすずかもそれに続いた。アリサが

「先生、これってフェレットですよ。何処かのペットなんでしょうか？」

先生は手を顎につけて

「フェレットなのかな？変わった種類だけど…」

すずか、アリサ、なのはは、きになったらしくフェレットを見た。先生が

「まあ、しばらく安静にしておいた方がいいから取り敢えず明日まで預かっとうておこうか？」

それがいいな。アリサ、すずか、なのははすこし喜んだ顔をして三人で

「二「お願いします！二」

〃〃斉藤家〃〃

〃〃優人side〃〃

暇だな。俺は今、リビングにいる。そして暇をもて遊ぼうとしたとき、

『聞こえますか？僕の声が聞こえますか？』

これは…念話か…

『聞いてください。僕の声が聞こえる方…お願いです！力を貸して下さい！お願い…。』

たく俺はリニス達に

「少し出掛けてくるよ。」

「ん？優人君、何処に行くん？」

「少しな。直ぐに帰ってくるよ。リニス…」

「分かりました。気を付けて。」

「ああ。」

俺は出掛けた。

くく動物病院前くく

くくなのはsideくく

私は声がするところに走ったの。そしたら雑音が聞こえて

「またこれなの。」

そしたら何かに包まれたの。周りを見渡したら誰もいなくてびつくりしたの。私はもう一度見渡したら謎の化け物がフェレットを追いかけていたの。フェレットは回避したけど最後爆風で飛ばされたの。私は走ってそのフェレットを掴んだの！そしたら化け物が突っ込んできたの！

「きゃあー！」

私は避けたの。そしたら化け物は抜けなくなったの

「な、なに!?!一体何?」

そしたらフェレットが

「来て…くれたの?」

喋ったの！

「きゃああー！」

驚いたの、私はフェレットを持ったままたって

「えーと、あの、何なの?何が起きてるの?」

「あの、お願いがあるんです。僕に少しだけ力を貸して！」

その瞬間化け物が襲ってきたの！けどその瞬間化け物は吹き飛ばされたの！

「え?」

私とフェレットは呆然としたの、そしたら目の前に緑色のロボットがいたの。

「間に合ったな。無事かなのは、フェレット。」

「その声は、優人君?」

「ああ。俺だ。細かい話は後だ。まずは奴を倒す事だけを考えよう。」

優人君はピストルを左手に持って構えたの。

「俺が囮になる。君達はどうかにかする方法を考えてくれ。」

「分かりました。いきましよう。」

フェレットがそう答えたから私は

「優人君、頑張って！」

「ああ。任せろ。」

そう言ったの。その言葉は自然と安心できるものだったの。私は走ったの。

第8話

セツトアップ

前回の纏め

三年生になった斉藤優人。いつものように授業を受けて放課後になり池にきたが池のボートの貸し出し場所はボロボロとなっていた。そして謎の声を聞いた高町なのははその声のする方向にむかい、フェレットを見つける。そしてその夜、優人となのははもう一度あの声を聞く。そしてなのはは動物病院に向かった。がそこでは化け物がフェレットを追っていた。なのははフェレットを助けるが化け物に襲われかける。その時優人が助けに来たのだった

〃〃動物病院前〃〃

〃〃優人side〃〃

なのはは行ったな…というか久しぶりだな。ガンダムになるの。しかもデユナメスだしな。さて久しぶりに行くかCB。

『はい。すべてはマスターの為に。』

俺は化け物にGNビームピistolを撃った。ほぼノータイムで撃っている。俺は距離を取って化け物にGNミサイルを撃ち込み内部から破壊した。だが

「ちつ…再生か…厄介な。」

俺はGNビームピistolを締まってGNスナイパーライフルを構えて加速して距離を取ってバイザーを下ろしてカメラを出して化け物を遠距離射撃した。その時ピンクの光がはしった。

「なのははデバイスを起動したのか。ならそのぶんの時間稼ぎはしてやるか！」

俺は加速してまず化け物に近距離でGNミサイルを撃ち込みその後腰にマウントされているGNビームサーベルを掴み三等分にしてGNビームピistolを掴み真ん中に誘導した。

「これならば…なのはー！」

そして化け物はピンクの光に包まれた。そしてそこには青い宝石だけがあつた。

「これで一先ずはいいな。といふかなのはのあれ凄いな。」
『同感です。』

俺はその青い宝石が三つあったから三つとも掴みなのはの所に向かった。

くくビルの屋上くく

くく優人 side くく

「なのは無事か？CB解除だ。」

『了解。』

ガンダムは解除された。それと同時に俺は地面に着いた。

「うん、大丈夫なの。」

「それは良かった。まずはここから離れよう。」

「うん。」

「フェレットも来い。」

「あ、はい。」

フェレットは俺の肩に乗った。そして俺となのはそこから離れた

くく公園くく

くく優人 side くく

「なのは、お前ちゃんとお前の親たちに出掛けると行ったのか？」

「あ、あー！ー！忘れてたのー！」

「やっぱりな。仕方ない、俺も言い訳を少し考えてやる。だがそこまでは自分でどうにかしろ。そうだ、フェレット、名前は？」

「はい、ユーノ・スクライアです。」

「俺は斉藤優人。よろしくな。」

「私は高町なのは！よろしくね、ユーノ君。」

「うん、よろしく、なのは、優人。」

「ユーノ、お前はなのはの家か俺の家に来るかどっちにする？」

「うーん、優人の家にお邪魔するよ。」

「わかった。なのは、お前言い訳考えたか？行くぞ。」

「え、ちよつと待つてよー！」

「一緒に行くから言い訳考えとけよ?」

「うん、ありがとうなの!!」

俺となのはとユーノはなのはの家に向かった。

～～帰り道～～

～～優人side～～

「あー大変だった。」

「あ、あはははは。」

高町家に行ったらユーノは美由希さんに取られるわ、一度泊まってけと言われるし、帰るってリニス達に伝えたからどのみち帰らなきやいけなかったし。

「ユーノ、あれが俺の家だ。」

「へえ、大きいね。」

「だろ?同居者が三人いるんだ。紹介するよ。ただいま。」

俺とユーノは家に入った。

～～寝室～～

～～優人side～～

帰ったら皆寝てたし。まあ明日紹介すればいいか。おれはシャワーを浴びて寝室に行き、今ユーノから話を聞こうとしていた。

「さて、ユーノ話して貰おうか。どうしてこの地球に来たのかを。」

俺はユーノに聞いた。

「うん、僕たちの一族は遺跡発掘を生業としていてね、その時とある遺跡を発掘中に見つけたのがジュエルシードなんだ。」

「あの青い宝石の事か?」

「うん、ほんとは管理局に依頼したんだけどね。結局は来なくてそれで僕たちは輸送船にジュエルシードを積んで輸送したんだけど輸送船は正体不明の攻撃で輸送船が撃墜されて全部のジュエルシードがこの地球に落ちたんだ。だから僕はそれを」

「回収しようとしたか?ちなみにジュエルシードは全部で何個ある?」

「21個だよ。」

「そうか、明日、なのはにこれを話すが構わないか？」

「うん、咄嗟とはいえ僕たちの事情につき合わせてしまったんだ。」

「あいつはそんなことは思わないだろうな。そうだ、ユーノ俺は協力するよ。」

「本当かい？ありがとう。」

ユーノは嬉しそうにこっちを見た。

「だから明日からよろしくな。」

「うん！」

「明日皆に合わせるよ。おやすみ。」

「うん、おやすみ。」

俺とユーノは寝た。

〳〳次の日〳〳

〳〳授業中〳〳

〳〳優人side〳〳

今朝はやて、リニス、セシア達にユーノと会わせて俺が居ない間ユーノを見てほしいと頼んだら皆喜んでと言っていた。そしてなのはにも昨日ユーノから聞いた事を伝えた。そしたらやはりなのはは協力すると言っていた。さて今は授業を受けるふりをして絵でも書くか。

〳〳放課後〳〳

〳〳優人side〳〳

学校が終わって今、俺はなのはと一緒に帰っていたがなのはがジューエルシードを感じ取ったのか走り出した。念話でユーノも向かっていると言っていた。俺はなのはと一回別れたその瞬間に結界に包まれた。

第9話

新たな敵

前回の纏め

高町なのはを行かした斉藤優人は化け物と戦う。そしてなのははデバイスの起動に成功させて優人は化け物を追い詰めて射線上に追いやる。そして化け物は封印された。フェレット、ユーノ・スクライアは優人と優人の家に向かった。そして寝室で優人はユーノに事情を聞き、優人は協力すると言った。次の日優人はユーノに聞いた事をなのはに話してなのはは協力すると言った。放課後、なのはと優人は一緒に帰るがなのははジュエルシードの気配を感じ取り走る。優人は後を追うが優人は謎の結界に包まれた。

くく結界内くく

くく優人sideくく

この結界はなんか見た事があるな。だが

「CBセットアップ。今回はガンダムエクシアだ。」

『了解。Set up』

俺はエクシアになったその時敵が襲い掛かってきた俺はGNソードをソードモードにして切り裂いた。そしてミサイルもどきが飛んできたから俺はGNソードをライフルモードにして迎撃して破壊した。そして近づいてきた敵をソードモードに戻して真つ二つにした、その時

「やらせてもらう。」

「何!?くつ…」

周りからビームが飛んできて、俺は咄嗟に回避した。

「これは…ファング?」

「違うよ。これはファンネルというらしいよ。」

「何!?なっ…」

声がる方向に向いたらビームライフルがきたから回避した。なんだ…あれは

「リボーンズガンダム?」

いや違う、あれは…

「Iガンダムか!!」

「よくわかったね、斉藤優人。」

「俺の名を知っている…?ぐあ…」

俺は蹴り飛ばされた。

「貴様…くっ…」

俺はGNソードをライフルモードにして迎撃して近付き腰についてるGNビームサーベルを掴み赤い機体に切りかかったが寸での所でサーベルで受け止められた。俺は

「貴様らは何者だ!!一体何が目的だ!」

「そうだね。君を殺す名くらいは覚えておけばいいか。僕はビサイド・ペインだ。」

「私はシャア・アズナブルだ。ご覧の通り軍人だ。」

いや軍人て言われてもな。モビルスーツだからな。というかシャア・アズナブルん?機動戦士ガンダムシリーズのアムロレイのライバルだった気が…ということとはあれはサザビーか!!

「なら行かせてもらう!!」

俺はGNソードをライフルモードにしてシャアとビサイドに向けて撃った。そしてソードモードにしてシャアと切り結んだ。そしてビサイドに蹴りを入れられたが左手でガードした。

「くっ…」

俺はビサイドとGNサーベルで切り結んだ。が、蹴り飛ばされた。

「時間だ。行くぞ、ビサイド・ペイン」

「了解だ。」

「まて!!」

俺は追いかけてしようとしたが目の前で大爆発が起きて追えなかった。

「ちっ…そういえばなのはは?」

(ユーノ、聞こえるか?)

(優人?良かった。いきなり君のいる所で大爆発が起きたからさ。驚いたよ。)

(そうか。今、どこにいる?)

(少し先の森だよ。)

(了解だ。すぐ向かう。)

俺はなのはとユーノの所に向かった。

～～帰り道～～

～～優人side～～

なのははボロボロになっていた。なんかもう一人の魔導師に負け
たらしい。今、俺とユーノは家に向かっている。着いたな。

～～斉藤家～～

～～優人side～～

「ただいま。」

「おかえりなさい。」

リニスが出てきた。リニスが少し怒ってる。まじか

「なんでこんなに遅かったんですか？優人。」

「いやなんというか魔法関連かな。」

そう言つて左手を上げたら

「優人！左手から血が出ていますよ。」

「えっうわあほんとだ。」

「優人、ど、どうするの？」

「リニス治療魔法つてできる？」

「できますよ。ちよつと待つてて下さい。」

そう言つてリニスは俺の左手の傷を治した。

「これでいいですね、あとで聞きますからね。あとそのユーノ君の事
も。」

「うん。」

「早く手を洗つてきて下さい。夕飯できてますよ。」

「あいよ。ユーノいくか。」

「うん。」

俺は手を洗いに向かった。

～～寝室～～

くく優人sideく

俺達は夕飯を食べた。そしてシャワーを浴びて今、ユーノとここに
いる。ちなみになんて起きているのはリニスが来るからだ。と来た
な。ドアがノックされた。

「どうぞ。」

「失礼します。」

そう言っつてリニスは入ってきた。リニスのパジャマはなんか星が
ついてる黄色のパジャマだ。ちなみにボタンだ。気に入って買った
とか。

「座つてリニス。」

「はい、では質問させてもらいますね。優人。」

「ああ。」

「では、貴方は今何をしているのですか？」

「それはなジュエルシードつていう物を集めているんだよ。詳しい事
はユーノから聞いてくれ。」

「わかりました。ではユーノ。事情を教えてくださいますね？」

「あ、はい。実は…」

くく説明中くく※知りたいかたは前の話をみてください。

「…という事なんです。」

「なるほど、そのジュエルシードという物はロストログアという事で
すか。」

「ロストログア？なんだそれ？」

「ロストログア、それは発達しすぎた文明が滅びた後に残った遺産で
す。そのジュエルシードとやらもきつとどこかの星が滅びた時に
残った物でしょう。」

「納得だ。リニスはどうかするの？」

「私も貴方の使い魔ですからね。一応手伝いはしますよ。けど表では
はやての世話をしなければならぬので裏から手伝います。」

「ありがとう、リニス。」

「いえ。もう夜遅いですから寝ましょう。」

「ああ。おやすみ、ユーノ、リニス。」

「ええ、おやすみなさい。」

「おやすみ。」

俺達は寝た。

第10話

修行

前回の纏め

結界に包まれた斉藤優人。優人はガンダムエクシアになって迎撃する。そして新たな敵に会う。その者達の名はビサイド・ペインとシヤア・アズナブルだった。シヤアとビサイドは撤退して、優人は高町なのはの所に行った。その後優人が家に帰ったらリニスと少し怒っていた。そしてそのよる優人はリニスに話をしてリニスは手伝うと言ってくれたのだった。

〃〃次の日〃〃

〃〃斉藤家〃〃

〃〃優人side〃〃

今、俺は電話でなのはを呼んで家に来て貰った。そしてはやとりニスとセシアを紹介した。その時なのはの目が一瞬、光が消えていたんだがな。まあそれは置いて。今、俺とユーノとなのはとりニスは地下にいる。理由は特訓だ。ちなみにはやてはセシアと図書館だ。着いたな。

「これはリニスにしか教えてなかったからな。」

俺は訓練場の電気をつけた。ちなみに訓練場は地下7000メートルまで吹き抜けだ。崩れるんじゃないかと思う人もいると思うがそこはご都合主義という訳で…なのはとユーノは驚いていた。

「なんだこれ!?すごい吹き抜けだ…」

「すごいこの優人君の家はすごいのだ。」

「まあ、俺の特訓の為に作られたからな。さてなのはお前は戦う覚悟があるんだろう?」

「うん。昨日あった子にお話しを聞きたいから。」

「わかった。ユーノ、リニス頼めるか?」

「ええ。」

「うん、でも優人は?」

「俺は独自で特訓するよ。」

俺は歩いて機械があるところまで行つて機械を弄つた

「今回の敵は…これにするか。」

操作完了と、訓練場にガンダムスローネ3機が出てきた。

「よし、CBセットアップ。今回はキュリオスだ。」

『了解、Set up』

俺はキュリオスになった瞬間に変形したその時スローネアインのビームが飛んできて、俺は咄嗟に回避したそしてドライに近付こうとしたがツヴァイのファンングで塞がれた。俺はミサイルを飛ばして、弾幕をはった。そして煙からでて変形してサーベルでツヴァイの大剣と切り結んだ。そして蹴りを入れて後ろに跳んだ。その時ドライとアインのビームが飛んできた。

「すごい…」

「すごい…これが優人の力。」

俺はシールドのクローを開いてアインを挟みそのままニードルを突き刺して破壊した。そして加速してドライに近付き、ビームマシンガンで牽制をしてサーベルで真つ二つにした、ツヴァイがファンングを全発射して

きたから俺はマシンガンで破壊した。がファンングにマシンガンを破壊された。俺はサーベルで残りのファンングを破壊してツヴァイに近付き大剣と切り結んだ。ツヴァイに蹴りを入れてシールドのクローを開いて大剣を持っている右手を奪いそしてサーベルをもう一本だして両足を切り落として機体を縦に真つ二つにした。

「これでよし。CB解除だ。」

『了解。』

キュリオスは解除されて俺は下に降りた。その時なのは達が寄ってきた。

「優人君、あれはなんなの?」

「ああ、教えるよ。あれはこの訓練場に搭載されてる訓練相手だよ。他のもあるんだがまあそれはまたいつかだな。」

「へえ、すごいね。」

「まあな。なのは訓練をしようか。」

「うん！」

俺達はその後二時間軽いトレーニングを挟みながら訓練をした。

〃〃夕方〃〃

〃〃斉藤家〃〃

〃〃優人side〃〃

「駄目だ…動けない…」

「何したらそうなるん？」

今、俺ははやてソファで膝枕して貰ってる。というか特訓のデータをとるためとはいえやり過ぎたな。今なら、料理をしているはずだったけど今はリニスとセシアがしている。ちなみになのはは帰ったぞ。

「まったく…何しとったかは知らんけど無茶しちゃあかんよ？」

はやてはそう言っただけで俺の筋肉痛の部分をつついてきた。

「痛い、痛いってわかったからやめてくれ。」

「ふふふ、はあい。」

ユーノもへばってます。ユーノは俺の腹の上にいる。

「できましたよ。」

「ああ、どうしよう、動けない。」

「私があーんしてあげるから大丈夫や。」

「た、頼む。」

「ずるいです。ここは私もやります。」

そう言っただけでセシアも参加してきた。夕飯を頂いたが全部はやて、セシアそしていつの間にか参加してきたリニスのあーんによつて食べた。もう無理しないようにしよう。

〃〃次の日〃〃

〃〃公園〃〃

〃〃優人side〃〃

今日も休みだから俺は散歩に出てる。ちなみに筋肉痛の部分は魔法でどうにかしてる。

「久しぶりに来たな。」

この公園懐かしいな。なのはと出会った所だからな。更に俺は奥に進んだ。その時奥で何かが光った。

「なんだ？あれは」

俺は気になって光った所まで進んだ。そして光った物はジュエルシードだった。俺は拾い上げたその時

「その宝石を渡して下さい。」

そう声が出たから振り向いたら金髪で赤目の女の子が立っていた。あれ？さっきは誰もいなかったのに。

第1話

ストレージデバイス

前回の纏め

新たな敵を倒す為に高町なのはとユーノと斉藤優人は斉藤家の地下室の特訓場で特訓するのだった。そして次の日優人は公園でジュエルシードを拾う。その時声がした方向に振り向いたら金髪で赤目の女の子が立っていた。

〓〓公園〓〓

〓〓優人 side〓〓

「それを渡して下さい。」

「なんでだ？ちゃんと理由を聞かせて貰おうか。もし力づくでもいくならばこちらにも考えがある、魔導師さん？」

「！なんで…」

「やっぱりな…これが必要って事はきつと誰かさんはジュエルシードが欲しいわけだ。まあ理由を聞かせて貰わないと渡さないが。」

「理由は言えません。」

「残念だな。交渉は決裂だ。」

俺はその瞬間地面にミサイルを撃ち込んで爆発した瞬間に転移で離脱した。

〓〓女の子 side〓〓

「こほつこほつ…逃がしちゃった。」

男の子がジュエルシードを持ってたら理由を聞かせてほしいって言われてそれを断ったら逃げられちゃった。

『大丈夫かい？今、爆音が聞こえたからさ。』

私は笑って

「大丈夫だよ、アルフ。」

『そうかい。気を付けてね、フエイト。』

「うん。」

私はそのまま通信をきった。

〃〃齊藤家メンテナンスルーム〃〃

〃〃優人side〃〃

女の子から逃げた後家に戻って俺は今、メンテナンスルームに入った。そしてパソコンの所に行こうとしたら足に何かがあたった。

「いたっ…なんだこれ？」

俺は落ちていた本を拾い上げた。

「なんて書いてあるんだ？裏…死海…文書？なんだそれ？見るからに胡散臭いな。」

俺は本を開いたその時本が凄く速い速さでページを捲ってた。俺は驚き本から手を離れたら落ちなかった。

「まじか。」

『認証完了。マスター名齊藤優人。』

「はあ…」

本は閉じられて俺の方に来た。俺は本を掴みページを捲った

「何々、この本には守護エヴァが居ます。合わせて13体です順番から零号機、初号機、貳号機、参号機

四号機、残りの9体は量産型つと…へえ…面白いなこれ、えーと管制人格とやらは貴方が作りなさい？なんだそれ？喧嘩売ってるのか？まあいいか。これはありがたく使うか。明日から。そうだ。リニスかユーノに聞いてみよう。」

俺は本を掴み下に降りた。

〃〃寝室〃〃

〃〃優人side〃〃

さて夕飯を食べて皆で人〇ゲームをしておれが億万長者になった。ちなみにビリははやてだ。色々と金を浪費していた。俺はリニスとユーノを呼んで今、来て貰う所だ。

「失礼します。」

「どうぞ。」

ユーノとリニス came。リニスとユーノは座った。ユーノが

「で、優人見せたいのって？」

「これだ。」

俺は裏死海文書を出した。

「この本は裏死海文書。なんか情報知らないか？」

そうユーノ達に聞いたらユーノの顔が強張った。

「裏死海文書？ほんとかい、それ。」

「ああ。」

「それは、凄いね。」

「何ですか？」

「裏死海文書は世界を統べる事が出来る本なんだ。しかも失われた技術さえも入っているとされているんだ。」

「それは凄いですね。」

「けれど今ではどこかに封印されてるっていう噂を聞いたんだけどね。」

「まあとにかくこいつは凄いつて訳か。ありがとうユーノ助かったよ。」

「ううん、此方も伝説のデバイスを見て良かったよ。」

「リニス、明日俺は裏死海文書の管制人格とやらの設定をしようと思うんだ。手伝ってくれるか？もちろんユーノも。」

「はい。」

「うん。」

「ありがとう。じゃあ寝るか。」

俺達は寝た。

〜〜次の日〜〜

〜〜メンテナンスルーム〜〜

〜〜優人 side〜〜

今、俺とユーノとリニスは裏死海文書の管制人格の設定をしている。どんな人にするか等を考えている。

「やはり管制人格だけであって攻撃力は一番上かな。」

「ですね。更にバインドも強力にしましょう。」

管制人格が魔改造されてる……！まあいいか。俺も参加した。

〃〃数分後〃〃

〃〃優人side〃〃

「できたな……。」

「出来ましたね。」

「で、出来た。」

管制人格が完成した。ちなみに目は赤で髪は水色っぽい。

「よし、名前は綾波レイ。名称はレイだ。」

『了解。裏死海文書、管制人格完成。管制人格ネーム綾波レイ。名称はレイ。』

そういつた瞬間管制人格が出てきた

「こんにちは、マスター。綾波レイです。」

「ああ。斉藤優人だ。優人って呼んでくれ。レイ。」

「分かりました。優人。」

「ああ。」

これでいいな。

〃〃森〃〃

〃〃優人side〃〃

今、俺は裏死海文書と歩いている。まあもしビサイド達が引っ掛かったら使うためだ。

「出てくるかな？」

そういつた瞬間俺は結界に包まれた。

『予想通り。さて初の実戦だ。今回はエヴァ初号機だ。』

『了解。守護エヴァは初号機となりました。』

そう裏死海文書が言った時、本から紫色のロボットが出てきた。

「これが初号機か……よし、初号機出動だ。」

俺はそう言った。そして初号機は

『ウオオオオオオオオッ!!』

叫んだ。

第12話

エヴァの力

前回の纏め

ジュエルシードを拾った斉藤優人。女の子が渡して欲しいと言うが優人は逃げる。そして家で新たなデバイスをてにいれる。その名は裏死海文書であった。優人はリニス、ユーノを呼んで管制人格を設定した。管制人格の名は綾波レイ。そして遂に裏死海文書の実戦が始まる。

くく森くく

くく優人sideくく

俺はエヴァ初号機を出して敵に挑んでる。といっても戦ってるのは初号機だが初号機は肩からナイフを取り出してギラドーガに刺した。ちようどギラドーガの心臓部分だったらしくギラドーガは爆発した。俺は何のナイフか気になって裏死海文書のページを広げた。

「何々あのナイフの名はプログレッシブナイフ。カッターみたいな形してるんだ。これでエヴァが使う武器を出せるのか。初号機！これを使え!!」

俺はそう言っつてバレットライフルという物を本から取り出して初号機に投げた。初号機はそれを掴みギラドーガに向けて撃った。そしてたら速効でギラドーガは爆発した。

「なんとという威力…。」

その後も初号機は出てくるギラドーガに撃ちまくっていたが弾が切れたのに気づいてバレットライフルの発射口を掴み鈍器として使った。

「え?」

俺は驚いた。そして初号機はバレットライフルを捨てて、ギラドーガの顔と胴体を掴み…そのまま…引き裂いた。

「凄いな…。」

俺はそう言うしかなかった。まさか素材はなんであれ俺と同じロボットなのに綺麗に裂いたから驚いた。そして初号機は引き裂いた

ギラドーガの首と胴体を掴み残りの2機に向かって投げた。ギラドーガはそれで倒れたそして初号機はまず一体のギラドーガの心臓部分をえぐりとった。そして最後の一体にプログレッシブナイフを刺した。凄いというか怖いな。あれ

「よし、初号機戻れ。」

そう言うのと初号機は本に入った。

「1つ分かったな。過剰戦力過ぎるなこれ。」

俺はそのまま帰った。

〃〃公園前〃〃

〃〃優人side〃〃

そう思ったかった。けど現実はそれを許してくれない。そう何を言おう。俺の目の前にジュエルシードを渡してと言ってきた女の子に再び遭遇してしまった。女の子も固まってる。

「よし、帰ろう。」

そう言っただけ帰ろうとしたら、

「待ってください。」

そう女の子が言っただけ俺の服を掴んできた。

「何？これから帰らないといけないんだ…よ…。」

女の子は倒れた。

「はっ？なんだこの展開。仕方ないな…。」

俺は女の子を抱えて家に戻った。

〃〃齊藤家〃〃

〃〃女の子side〃〃

私は目をさました。そしたら

「知らない天井。」

私は確か男の子にまた会えたから待ってって言ったらいきなり倒れたんだっけ。思い返したらこの部屋のドアが開いた。

「おっ…起きたのか。どうだ？動けるか？」

「うん、大丈夫。」

「そうか、じゃあこれ食べれるな。」

そう男の子が言うとき美味しそうな食べ物を出してきた。

「エビピラフだ。食べるか？」

「うん。」

私はスプーンを掴んでエビピラフを食べた。

「美味しい…。」

「それはなんとたってリニスが作ったんだからな。」

「リニス？」

「何だ？」

「ううん、知り合いに同じ名前の人がいるから。」

「そうか。なんか様があつたら呼ぶといい。」

「ありがとう。」

男の子は出ていった。私はその瞬間アルフに通信を繋げた。

『フェイト!!今、何処にいるんだい?』

「アルフ、今私は前逃がしちやつた男の子の家にいるよ。」

『何で?』

「男の子にまた会つたら倒れちやつてそのまま運んできてくれたのだから来れる?」

『任せて!』

アルフはそう言うとき通信をきった。

「ふう…はやく集めないよ。」

じゃないとお母さんに怒られちゃう。

~~~~リビング~~~~

~~~~優人side~~~~

今、はやてとセシアは病院にいる。だから今、居るのは俺とリニスだけだ。女の子を連れてきた時、なんか俺が誘拐してきたみたいに見られたがなんとか話して納得してもらった。リニスが

「優人、女の子の体調はどうでしたか?」

「うん、なんとか大丈夫だったよ。」

「ああ。さて上に行こう。君の主人がいるはずだよ。」
俺はリニスとアルフと共に二階に行った。

第13話

話し合い

前回の纏め

裏死海文書の守護エヴァを過剰戦力と感じた斉藤優人。帰り道で女の子と再び会うが女の子は倒れた。優人は家に連れていく。そして女の子は使い魔と通信をする。女の子の使い魔は斉藤家に来る。リニスはその使い魔と知り合いだった。

〳〳部屋〳〳

〳〳side 優人〳〳

「入るぞ。」

俺はそう言つてドアを開けた。女の子はピラフを食べ終わつていた。

「食べ終わっていたか。味は大丈夫だったか？」

「うん。」

「そうか。」

そしてリニス達が入ってきた。

「ああ。そういえば俺達の紹介をしてなかったね、俺は斉藤優人、彼女は」

「リニス…。」

「知り合いか？」

「はい、大きくなりましたね、フェイト。」

リニスは微笑んだ

「リニス!!」

女の子は抱きついた。

〳〳数分後〳〳

「もう平気か？」

俺は聞いた。

「うん。なんとか。」

女の子はリニスから離れた。

「君の名前を聞いてなかったな。君の名前を覚えてくれないか？」

「フェイト、フェイト・テストロッサ。」

「フェイトか。よろしくな、フェイト。」

「うん、よろしく優人。」

「さて、本題に入るが何でフェイト達はジュエルシードを欲しが
るんだ？」

フェイトは答えた。

「母さんが集めてきてって言ったから。」

「そうか。少しまってろ。」

俺は部屋から出た。

　　side　フェイト

優人がいなくなったから私はリニスに聞いた。

「リニス、なんでこの家に居るの？」

「そうだよ!!何で？」

リニスは少し顔を赤らめて

「実は今の主人が彼なんです。私が消えかけに成っている時に助けて
くれたんです。」

リニスは笑った。

「そう…なんだ。」

「待たせたな。」

優人が入ってきた。

　　side　優人

俺は部屋にあったジュエルシードを掴んでフェイトのいる部屋に
はいった。そして

「はい、これ。」

俺はジュエルシードをフェイトに渡した。

「いいの？」

「いいも何も俺は只手伝いで集めてるだけだしな。」

「ありがとう。」

「そういえばオレンジの人の名前聞いてなかったな。何て言うんだ？
名前」

俺はオレンジの人に聞いた。

「あたしはアルフだよ。」

「聞いてると思うが俺は斉藤優人だ。よろしく。」

「よろしくなく優人。」

「さてもうすぐはやて達も帰ってくるし夕飯一緒にどうだ？」

「え?でも」

「遠慮するな。ついでに泊まってけよ。」

「分かった。ありがとう。」

「どういたしまして。さてとはやて達に言つとかないな。」

そしてはやてとセシアが帰ってきたから俺達はフェイトとアルフを加えて夕飯を食べた。フェイトとアルフも泊まっていった。ちなみにフェイトとアルフは昼頃に帰ったらしい。

　　〓〓次の日〓〓

　　〓〓街中〓〓

　　〓〓side　優人〓〓

学校が終わったから俺となのはとユーノはジュエルシードを探索している。そして空に雷がはしった。ユーノ曰くジュエルシードを強制に発動させようとしてるらしい。ユーノは事態の重さを見たのか結界を張った。なのはは変身してジュエルシードに向かった。

「なら俺も、CBセットアップ。今回はヴァーチエだ。」

『了解、Set up』

ヴァーチエになった瞬間これはこの前知ったんだがシユツルムファストが飛んできた。俺はGNフィールドを展開して防いだ。そしてキャノン砲を構えて撃ってきた方向に撃った。爆音が聞こえた瞬間ファンネルが飛んできた。そしてビームが周りから飛んできた。「っ!!」

俺は回避したが、ヴァーチエはデカブツだ。ビームは普通に直撃する。俺の右足と左腕にかすった。俺は撃ってきた方向にキャノン砲を撃った。そしたら金色のモビルスーツが出てきた。

「こいつは……!」

俺は見たことがある。こいつはヤクトドーガだ!!俺はGNバズーカを構えてヤクトドーガを撃った。がヤクトドーガは回避した。俺

はビームサーベルを出してヤクトドーガと切り結んだ。そしてヤクトドーガを蹴って、ヤクトドーガの右腕の肘から下を切り落とした。その瞬間ヤクトドーガのファンネルが飛んできてビームを撃ってきた。俺は回避したが右のキャノン砲を破壊された。その瞬間ヤクトドーガが掴んできた。ファンネルが俺の周りにきた。ヤバイ：やられる。

「CB、パージだ。そんでパージしたパーツは爆発だ。」
『了解。』

ヴァーチェの装甲をパージした。そしてファンネルがビームを撃ってきた。

「爆発だ。」

パーツは爆発した。そして俺はナドレの状態でビームサーベルをふたつ出してヤクトドーガの足を両方切り落とした。そして止めを指そうとしたとき大きな光が走った。

「なんだ？あれ。」

俺が光が走った方向に向いた時、ヤクトドーガは逃げていた。ちつ

：

「あと少しの所で…。」

俺は光が走った所に向かった。

~~~~~ side ~~~~~ なのは~~~~~

フェイトって呼ばれた女の子が無理矢理ジュエルシードを封印したあと一緒に来ていたもう一人の人と帰ったの。睨まれた時怖かった…。

「なのは！ユーノ！無事か!？」

優人君が降りて着たの。

「うん、なんとか。」

「そうか。それなら良かった。帰るぞ。」

「うん…。」

「なのは、悩みなら聞いてやるし鍛えてもやるさ。」

「ホント?」

「ああ、君がそう望むなら、ユーノ、君に教えて欲しい事があるんだ。」

「なんだい?」

「バインドと結界の展開の仕方を教えてくれ。」

「分かった。」

「ありがとう。行くか。」

「うん!!」

なのは嬉しそうにきた。俺は帰り道、なのはは一番頑張ったなと思っ手て手を繋いだ。そしたらなのはは顔を赤らめていた。

〃〃次の日〃〃

〃〃学校〃〃

〃〃side 優人〃〃

昼休みに入ったから俺達は昼御飯を食べてる。ちなみに昼御飯は俺が作った。俺の弁当だけだが。さすがが

「優人君、それ頂戴?」

「この卵焼きか?構わないぞ?ほれアーン。」

俺は箸で卵焼きを掴みすずかの口の前に向けた。

「え:うう:はむ。あ、お美味しい。」

「だろ?」

すずかが微笑んだ。そしたらアリサとなのはが

「ずるいわよ!!私にも何か寄越しなさい!!」

「私も何か欲しいの!!」

「わ、分かった。まずアリサなこれだな、はい、アーン。」

俺は箸で唐揚げを掴みアリサの前に向けた。

「はむっ、美味しいわよ。これ。」

「俺の手作りだからな。」

「優人君の手作りなの!?!早く頂戴!!」

「分かったよ。ほれ、アーン。」

俺は箸でベーコンでアスパラを巻いた物を掴みなのはの前に向けた。

「アーン、あむっ、美味しい。」

「良かった。」

俺達はその後も昼御飯を楽しんだ。

くく放課後くく

くくside 優人くく

なのはは午後少し暗かったからアリスが少し話を聞いたりしたとか。俺も同じクラスだがその時クラスの委員長に呼ばれていたから見ていない。そして俺とユーノとなのははジュエルシードがある倉庫に向かった。

## 第14話

### 管理局登場

前回の纏め

フェイトにジュエルシードを渡した斉藤優人。そして次の日優人は高町なのはとユーノと共にジュエルシードを探索していた。そしてジュエルシードが強制に発動されてなのはが封印に向かっていている時優人はヤクトドーガと交戦するのだった。

※三人称になります。

〃〃前日〃〃

〃〃アースラ内〃〃

ここはL級艦船アースラ内。艦長はリンディ・ハラオウン。彼女等は今、地球へと向かっている。

「地球までの進路は大丈夫かしら？」

「はい、艦長。」

「そう、第97管理外世界地球ここで小規模な次元震が発生そして一時期通信妨害を受けて、更に前に発見した通称モビルスーツも出現した。」

リンディは真面目の顔をしていた。エイミイは紅茶を入れながら話した

「今回の次元震の原因はジュエルシードというロストログイアらしいです。」

「そう、けど私達には優秀な執務官と優秀な教導官がいますから。」

リンディは下を見た。そこには黒い服をきた男の子と金髪で青と白を基調とした服を着ている女の子がいた。

「はい、頑張ります。」

「それだけなの？クロノ。」

「これでいいさ。エリス。」

「そう。」

「行くわよ。皆。」

リンディが号令を掛けた。



『はー!!』

　　〃〃次の日〃〃

　　〃〃倉庫〃〃

　　〃〃side　　優人〃〃

俺となのはとユーノはこころ辺でジュエルシードの反応があったからきた。なのはが進むとフェイトも向こうからきた。俺とユーノは見守ってる。アルフもだ。場所は違うが…なのはが

「あのフェイト…ちゃん。」

「あつ、フェイトテストロッサ。」

「私はフェイトちゃんとお話しただけなの。」

「ジュエルシードは譲れないから。」

「私は知りたい。なんでフェイトちゃんはジュエルシードは集めているのか、何でそんな思い詰めているのか。」

「あ…。」

なのは、お前結構知りたいんだな。だがフェイトは答えてもいいのか？二人ともバリアジャケットを展開して走ったな。激突する瞬間彼女の真ん中に光が走った。なのは達も驚いてるな。あれは男か？「そこまでだ。」

男がバインドを張った。

「!!」

「!!」

なのは達は驚いてるな。

「管理局執務官クロノハラオウンだ。」

「!!」

「管理局…!」

アルフとユーノも驚いてるな。なんだ？管理局つて。その時、俺は何かを感じ取った。

「!…このプレッシャーは、まさか…!皆、ここから離れろ!!」

俺は走りながら言った。

(CB、セットアップ。今回はキュリオスのGNミサイル装備だ。)

『了解。』

俺はキュリオスになってGNミサイルをコンテナの上に撃つたら爆発がした。そこにはギラドーガの残骸があった。やっぱり俺はGNミサイルを更に撃つたらギラドーガが20機近く出てきた。俺はGNミサイルを撃ちまくりながら戦った。フェイトとアルフはとつとくに撤退しているようだ。俺は弾薬がきれたGNミサイルを捨ててGNシールドのクローを開いてギラドーガを掴んで投げた。が後ろからビームマシンガンにやられた。

「くっ…敵の数が多すぎる!!」

そしてギラドーガに右手を切られたあと他のギラドーガが俺の心臓部分に向けてシュツルムファストを撃ってきた。殺られる!!そう思った時、黄色いビームが走ってきてシュツルムファストは破壊された。

とどこから…なっ…!」

俺は上を見た。そこには

「ガン…ダム…。」

ガンダムがいた。見たことがない。

「この機体がそんなに気になる?」

「あ、ああ。」

ガンダムから声がして少し驚いた。

「女?」

「ええ、しかし先に敵を倒しましょう。」

「ああ。右は俺がやる。」

「わかったわ。」

俺は右側に向かった。そしてギラドーガをGNシールドのクローを掴んで潰した。

「CB、回避を伝えてくれ。反射と思考の融合だ。右手がないから頼む。」

『了解。』

「行くぞ!!」

俺は加速してギラドーガに向かった。ギラドーガが一斉にシュツ

ルムファストを撃ってきた。

『直撃コースです。』

「避けて見せるぞ!!」

CBが自動でキュリオスを動かして全て回避した。俺はシールドのクローの中のニードルでギラドローガの腕を跳ねた。そしてビームサーベルを出してギラドローガを真っ二つにして切った。ギラドローガがビームマシンガン撃ってきた。またCBが自動で動かした。俺はシールドのクローでギラドローガを掴んでニードルを刺して撃破した。そのあとギラドローガのビームマシンガンを奪ってギラドローガに向けて撃った。そして弾薬がきれたビームマシンガンを逆手に掴んでバットみたいに振ってギラドローガの頭を吹き飛ばした。そして頭部を失ったギラドローガを掴んでギラドローガに向けて投げた。そしてビームサーベルで二体共串刺しにした。そんなことをほぼ繰り返しながら残りのギラドローガを全滅させた。

〃〃数分後〃〃

〃〃side 優人〃〃

「終わったな。これで、CB解除だ。」

『了解です。』

キュリオスが解けた。そして向こうのガンダムも解けた。俺はガンダムが解けた方向に向かった。そして

「お疲れ様。」

俺は女の子に言われた。

「君は?」

「自己紹介するね。私は特別教導官エリスクロードよろしく。」

「ああ。俺は斉藤優人だ。」

「早速だけどアースラに来てもらおうよ。」

「了解だ。」

俺はエリスについて行ってアースラ内部にはいった。そして奥へと進むと和風の部屋があった。俺はそれに少し呆然としていた。エリスが

「あら、座らないの?」

「座らせてもらおうさ。」

俺はなのはの隣に座った。そういえば

「なのはの隣にいる金髪の男の子はユーノか？」

「よくわかったね。優人。」

「まあな。」

「いいかしら？」

緑色の髪をした女性が話始めた。

「私はリンディハラオウンです。この船アースラの艦長をしています。次にエリス自己紹介お願いね。」

「はい、艦長。私は特別教導のエリスクロード。よろしくね。次クロノ。」

「ああ。執務官のクロノハラオウンだ。よろしく。」

「じゃあまず俺から俺は斉藤優人だ。」

「私は高町なのです。」

「僕はユーノスクライアです。」

「分かったわ。では本題にはいるわね。ジュエルシードを集めているのは何故かしら？」

「それは僕が…」

ユーノが説明を始めた。

## 第15話

## 協力

前回の纏め

倉庫で対峙する高町なのはとフェイトテスタロッサ。だがそこに管理局執務官クロノハラオウンが乱入する。しかし更にギラドーガ達も乱入するそしてギラドーガ達に追い詰められる斉藤優人だが謎のガンダムが助けに来る。そして優人はガンダムと協力してギラドーガを全滅させた。そしてなのはとユーノと共にアースラにはいる。そしてそこで自己紹介があったあとユーノからの説明が入るのだった。

〜アースラ内部〜

〜side 優人〜

「…という訳なんです。」

ユーノが説明し終わった。そしてお茶を一口飲んだリンデイが

「立派ね。」

「だが無謀でもある。」

「そうね、確かにたった三名でロストロギアの封印だなんて。」

リンデイ、クロノ、エリスの順番で言った。そしてなのはが

「あの…ロストロギアって何ですか？」

リンデイはお茶を置いて

「ロストロギアっていうのは失われた遺産という意味です。何処かの星が繁栄しすぎてそしてその文明が滅んでそこで残った物等がロストロギア失われた遺産です。」

「僕達管理局はそのロストロギアを回収して管理しているだ。」

「ロストロギアはね、危険なのよ。ロストロギアの使い方を間違えれば街一個は普通に消えるわ。」

なのはとユーノは驚いていた。リンデイは真面目の顔をして

「ここから先は管理局が行います。貴方達は普通の生活に戻りなさい。」

「そんな!!」

ユーノが大声をあげた。だから俺は

「ユーノ、落ち着け。これは専門家である管理局の方がいい。」

「けど!!」

リンデイは笑って

「急に言われても気持ちの整理がつかないわよね。だから一晩考えてからまた話し合しましょう。」

なのはとユーノは帰ったが俺はクロノに頼みリンデイと話をするとところだ。の前にはやて達に連絡しよう。俺は携帯をだして連絡したらリンデスがでた。

「もしもしリンデス?」

『はい、なんででしょうか? 優人。』

「ごめん、今日はホントに遅くなるからさ。」

『魔法関係ですか?』

「ああ、そうだ。」

『わかりました。気を付けて。』

「ああ、じゃあな。」

俺は携帯をきった。近くにいたクロノに

「すまないな。少し電話していた。」

「聞こえていたよ。さあ行こう。」

俺とクロノはリンデイの部屋に向かった。

〃〃〃 斉藤家〃〃〃

〃〃〃 side はやて〃〃〃

「リンデス、優人君はなんて?」

「少し遅くなるそうです。」

「そう: 優人君最近帰り遅いなーまた一緒にご飯を食べたいな」

私はほんまにそう思った。優人君、あのときの用にまた一緒に:

〃〃アースラ リンデイの部屋〃〃

〃〃 side 優人〃〃

俺とクロノはリンデイの部屋の前についた。クロノが

「失礼します。」

そう言つてクロノは入った。俺も

「失礼します。」

俺もそれに続いて入った。そしてリンデイと向かい合つて席に座らせていただいた。リンデイが

「で、何かしら？ 話つて」

「ああ、単刀直入に言うがあんたら管理局はきつとなのは達の事を欲してるんだろ？」

そう言つたらリンデイの顔が強張った。そして

「ええ、そうよ。私達はいつも人手不足よ。だから…」

「分かつてる。だが決めるのはあいつらだ。けど俺は協力する。」

「ホントに？」

「かあさ…艦長。」

「ほんとき。その代わりいくつかの頼みがある。」

「頼みつて？」

「まずは俺の行動に干渉しないこと。が頼みがあればそれに従うさ。」

「分かつたわ。」

「そして、これを見てくれ。」

俺は画面を操作してギラドーガやヤクトドーガ等の画像や映像を見せた。リンデイとクロノは驚いて

「これは…！」

「モビルスーツか!!」

「正解だ。こいつらは敵だ。もし近くにいたら破壊しろ、こいつらには人間が装着してる奴ではない。無人機だ。」

「わかりました。お願いしますね。優人君。」

「了解。では帰らせてもらうよ。」

「わかつた。帰りの転送場所まで案内するよ。」

俺はクロノと共にリンデイの部屋を出て、転送場所まで行つて家に帰った。そして家に帰ったらはやてが少し寂しそうにソファで寝ていた。今度、何か埋め合わせでもするか。そう思つたら急に眠くなりはやてに寄りかかつて寝た。

くく斉藤家 リビングくく

くくside はやてくく

「う、ううん…もう…朝なんか?」

私は目を覚めました。そしたら左肩がみよーにおもかった。

「なんや…!」

左隣をみたらな…なんと優人君が寄りかかって寝とった!!私は今顔が真っ赤になつと思う。

「ううん…朝か…。」

優人君が目を覚めました。

「ゆ…優人君、どいてくれへんか?」

「すまないな、はやて。」

優人君はどいてくれた。そして

「おはよう、はやて。」

「うん!!おはよう。」

私は挨拶したんや。

くく数分後くく

くくキツチンくく

くくside はやてくく

私は優人君と朝御飯を作つとる。久しぶりやな、優人君と朝御飯作るの。

「なあ…優人君。」

「ん?なんだ?はやて。」

「なんで優人君は今朝私の左肩に寄りかかって寝ていたんや?」

「それはな。はやてが少し寂しそうにしていたからな。それにはやてとも一緒に居なきやな。」

優人君がそう言ってくれたんや。あかん顔が真っ赤になつとる。でも私は多分にやけと思うけど嬉しかったんや。そして一緒に朝御飯を作ったんや。



## 第16話

### 1ガンダム

前回の纏め

管理局と協力することになった斉藤優人は、家に帰った後、八神はやてと久しぶりに一緒にいるのだった。

〓〓次の日〓〓

〓〓ソレスタルビーイング号内〓〓

〓〓side 優人〓〓

俺は、今学校を休んでソレスタルビーイングの中にいる。ちなみにソレスタルビーイング号なった内の施設は全て把握している。ちなみになんているかという調べもののためには来た。そして俺は今コントロールルームにいる。そしてヴェーダに接続をしてリジエネと通信を行った。

「久しぶりだな、リジエネ。」

『そうだね。今日はどうしたんだい?』

「聞きたい事があつて来た。」

『なんだい?』

「ああ、ヴェーダのパーソナルデータにビサイドペインと1ガンダムは載ってるか?」

『少し待ってくれ。』

リジエネは通信をきった。俺は少し考えていた。もしヴェーダのパーソナルデータにいたら…

『優人。』

「リジエネ、結果は?」

『いたよ。ビサイドペインと1ガンダム。ちなみに1ガンダムはリボーンズガンダムのプロトタイプとなった機体だよ。ビサイドペインはリボーンズアルマークと同じ塩基配列を持っているイノベイドだよ。』

「やはり、イノベイドはこの世界に来てからセシア以外は作ってないのに。ちなみにリジエネ、ビサイドの能力はあるか?」

『ああ、それは自分の意識データを他のイノベイドまたは他のクロール人間に写すことができる。簡単に言うとお書きだね。』

「てことは、セシアの体にも写せるのか…。」

『そうなるね。』

「そうはさせないさ。ちなみに1ガンダムのデータは？」

『ああ、1ガンダムは0ガンダムの後継機だからGNフェザーがついてる。それにGNビームサーベルが二本。GNビームライフルとGNシールドだ。』

「わかった。攻略法も考え付いたしな。ありがとう、リジエネたすかった。」

『どういたしました。情報が他にわかり次第伝えるよ。』

「頼む。じゃあ。」

俺は通信をきった。そして転送ポートに向かい歩きながらアースラに連絡してアースラさ乗船許可を貰ったから転送ポートについてあとアースラに向かった。

くく管理世界くく

くくside クロノくく

高町なのはとユーノスクライアが協力すると言って母さんがそれを承諾してユーノとなのはは、いま他の管理世界の生き物を使う訓練をしている。そしてその一時間後優人がアースラにきた。その時なのは達がいる管理世界に何者かが乱入した。僕とエリスと優人は走って転送ポートに向かって管理世界に向かった。そして優人が前に見せてくれた画像に出てきたモビルスーツが大量にいた。エリスと優人はガンダムになって、僕はバリアジャケットを纏ってモビルスーツにブレイズカノンをぶつけた。そしてステインガーを周りに拡散させてモビルスーツを破壊してつた。エリスはガンダムの胸についている。拡散砲でモビルスーツを風ぎ払っている。そして優人はガンダムになったときに周りについていたミサイルやバズーカを巧みに扱って一番多く撃墜していた。ユーノとなのはも参戦している。そして全てが片付けて終わった時、アースラに連絡しようとした

ら電波障害がおきた。

くくside 優人くく

ギラドーガを全滅させた。その瞬間

『さすがは斉藤優人だね。君のその力ぜひ欲しいね。』

「通信ではなく、こっちにきたらどうだ。ビサイドペイン。」

『ふっ…そうしよう。』

そして1ガンダムが降りてきた。俺は全ての武器を構えてクロノ達に言った。

「クロノ!!皆!!こいつは俺が相手する。」

「わかった、気を付けてくれ。」

「ああ。」

俺はGNミサイルを撃ちながらNGNバズーカを撃った。そして通信で

「知ってるぞ、ビサイドペイン。貴様は自分の意識データを他人の体に写せるらしいな。」

『なぜ!?それを?!』

俺は弾薬切れになったGNミサイルとNGNバズーカを捨てて、GNランチャーを撃った。

「すごいな、つまり不死身な訳だ。例え今の体が死にかけようとも新しい体に変えられるんだからな。」

『くっ…!』

俺はGNランチャーを捨てて、GNビームライフルを右手に持ち、左手にGNビームピストルを持って撃った。

「じゃあ、替わりの肉体が周りになかったらどうなるか…」

俺はGNビームピストルを閉まってGNビームライフルを左手に持ち直してプロトGNソードをだして

「試してみるか!!」

俺は加速して1ガンダムのGNビームライフルを回避してそして非殺傷設定を解除してプロトGNソードで左腕を根元から切り落とした。

『ぐあああああああつ!!』

ビサイドは痛みだした、そして

『斉藤優人…』

「どうくる?」

ビサイドは撤退した。

「そうくるか。まあいい、しばらくは動けないはずだからな。CB解除だ。」

『了解。』

ガンダムアストレアが解除された。俺はクロノ達の所に向かった。

　　アースラ内　リンデイの部屋

　　side　優人

管理世界での戦いですこしはつちやけたのがいけなかったのかりンデイ達に呼び出された。

「んで、何の用だ?」

エリスは少し呆れながら

「用件、分かってるんでしょ?」

「まあな。」

リンデイが

「なら教えて貰いましょう。貴方は貴方と話していたビサイドペインという人物の事を…」

「仕方ないな。これはクロノ、リンデイ、エリス、君達だけしか教ええない。他言無用にすると誓えるか。」

「分かった。」

「ええ。」

「分かったわ。」

「分かった。ビサイドペインはイノベイドと呼ばれる人造人間だ。まあ要するにクロノンみたいなものだ。ちなみにイノベイドを作った所は今はない。それにイノベイドとはある世界の技術だった。それはもうないが。」

(まあ、俺が持つてるが。)

「少し分かった。なら、君がビサイドと話していた時に話していた不

死身とはどういうことだ?」

「それはな、イノベイドにはまあ色々な能力がある君らでいうレアスキルみたいなものだ。そして奴ビサイドペインの能力はビサイド自信の意識データを他のイノベイドまたは他のクローン人間に写すことが出来るんだ。簡単に言う就上書きだ。」

「そんなのが…」

「俺はビサイドペインの左腕を根元から切り落とした時、色々細工をした。」

「細工?」

「それはまた追々話す。これでいいか?」

「ああ、協力ありがとう。」

「別にかまわないさ。」

その時アラートがなった。

「なんだ?」

リンデイは通信をだして

「エイミイ分かる?」

『はい、海鳴の海周辺に大規模な魔法の発動が確認されました!!』

「先に行ってる。」

「待ってくれ。優人僕も行く。」

「私もいくわ。」「分かった。はやく行くぞ。」

俺達はブリッジに向かった。

???

side ビサイド

「くっ…ナノマシンの修復が追いつかない!!」

僕は斉藤優人と戦った時、左腕を根元から切り落とされた。そして今はふらふらしてる。

「大怪我だな。ビサイドペイン。」

「くっ…」

「仕方ない…頼めるか? プレシア女史」

「分かったわ。ビサイドペイン、このポッドに入りなさい。」

「分かった。」

俺はポッドに入った。

　　side　　プレシア

「助かった、プレシア女史。」

「かまわないわ。大佐。」

私は機械を操作しながら答えたわ。

「そうか…また頼む。」

「分かったわ。あの契約間違えないように。」

「分かっている。君は我々がてに入れたジュエルシードを受け取り、我々は君が作った機械で軍隊を作り、管理局を潰す。」

「そうよ。」

大佐は歩いていなくなつたわ。私は決意を固めて

「私は例え利用されようともアリシアを蘇らせてみせるわ!!」

そう目標を決めたわ。

## 第17話

## 救援そして戦闘

前回の纏め

ヴェーダのパーソナルデータにビサイドペインと1ガンダムのデータが載っている事を知った斉藤優人。とある管理世界でエリスクロード、クロノハラオウン、高町なのは、ユーノスクライアと共にギラドローガを全滅させた。そしてビサイドペインがのる1ガンダムと対決をして左腕を切り落とした。アースラでエリス、クロノ、リンデイハラオウンにビサイドの秘密を話した優人であった。

〜アースラ　ブリッジ〜

〜side　優人〜

俺とクロノ、エリスが着いたとき俺達が見たのはフェイトとアルフがジュエルシードを強制に発動させてジュエルシードを封印するために苦戦している所だった。

「あいつ…」

「フェイトちゃんを助けにいこう！」

なのはが言ったがクロノ

「駄目だ。彼女が弱ってからでないで行かせない。」

「そんな!!」

エリスが少し悲しい顔をして

「悲しいけどそれが現実なのよ。」

なのはは少し辛い顔をしていたがユーノを見ていたそして決意した顔をしていたから俺は何をしようとしているのかを気付いたから俺は念話をして

(ユーノ、お前なのはを転移してあの子の所に連れてくんだろ?)

(バレてたか。そうだよ。)

(俺も自分で行くよ。ちなみにお前らは命令違反で怒られるぞ。)

(そうだけど。)

(作戦が終わったらなんとか口添えしてやるよ。)

(ありがとう。)

(なのは、合図をしたら行くぞ。)

(うん、分かった!!)

(行くぞ。3、2、1、走れ!)

なのはは走った俺もそれに続いた。なのはが

「命令違反ごめんなさい!!」

ユーノが

「転移!!」

なのはは転移した。俺も

「悪いな、俺達は困ってる人を見捨てる程冷静ではない。転移。」

俺も転移した。

〃〃海上空〃〃

〃〃side 優人〃〃

なのは、ユーノがフェイトを助けにいかうとしている俺はガンダムエクシアGNアームズになってフェイトなのはを攻撃しようとしていた水の触手みたいなものを大型GNキャノンで凧ぎ払った。そして大型GNソードで水の触手みたいなものを切り払った。ユーノとアルフもバインドで捕まえていた。ジュエルシードの思念体を。俺は大型GNキャノンとGNビームガンを一斉に撃った。そしてフェイトとなのはがデバイスを構えていた。

「あの二人の準備が終わったか。」

俺は離れた。そしてジュエルシードが纏めて封印された。そのあ

と紫の光が走った。俺の所には黄色いビームが走った

「しまった!!」

やられる…そう思った時、

『させません!!』

CBがGNフィールドを展開して防いだ。どこから

「CB、GNアームズ解除だ…がっ!!」

俺は何者かに蹴られた。意識を失う前に見たのは赤い機体とでかいモビルアーマーだった。



くく時の庭園くく

くくside 優人くく

「知らない天井だ。」

俺が目を覚ましたらベッドの中にいた。CBがちやんとネックレスとしてある。なんだここは

『マスター無事ですか?』

「ああ、なんとか、ここは…どこだ。」

「おっ…目覚ましたんかい?」

「アルフか…」

アルフが入ってきた。

「ここは…?」

「時の庭園だよ。」

「そうか、」

俺は身体を起こした。

「身体は大丈夫かい?」

「ああ、痛みはないよ。あれフェイトは?」

「ああ、フェイトは…」

アルフが少し怒り顔になって震えていた。その時フェイトの叫び声が聞こえた。

「なんだ。」

「っ!!」

アルフが走って行った。俺も身体を起こして身を少し隠しながらすすんだ。

そしてとある扉の前に来た。

「ここは…CBセットアップ。ガンダムデユナメスフルシールドGNピストル付きでな。」

『了解。Set up』

俺はデユナメスになって突入した。そして女がアルフを吹き飛ばそうとしていから女を蹴り飛ばした。

「優人…。」

「平気か?アルフ」

「うん。」

「貴方は誰かしら？」

「俺か？俺は…」

「斉藤優人だな。」

「なっ…くっ…」

俺は飛んできたビームをフルシールドで全て防いだ。

「貴様はシヤアアズナブル!!」

俺はGNビームピストルを撃った。シヤアは回避してそしてビームサーベルを出して切りかかってきたから俺もサーベルを出して防いだ。

「お前は何が目的だ。そしてなぜ俺を狙う。」

「それは君が一番危険分子だからだよ。」

「何？」

「君はイノベイターの可能性を示しすぎた。だから私が君を殺す。」

「そんなこと!!」

俺はシヤアを蹴り飛ばした。そしてサーベルを締まってGNスナイパーライフルを出して撃った。

「ちい…ファンネル!!」

シヤアがファンネルを飛ばしてきた。俺は回避したがシヤアが撃ってきたメガ粒子砲をフルシールドで防いだがフルシールドが耐えきれず爆破した。

「くっ…」

俺は加速してアルフを抱えた。

「ちよ…優人。」

「撤退するぞ。これじゃ…」

「行かせんよ!!」

シヤアがファンネルを飛ばして撃ってきた。

「くそ…回避ができない…ぐあっ!!」

俺の右胸をビームが貫いた。更に左足と右腕を貫かれた。俺は力が抜けて落下した。

「くそ…」

「転移させるよ…」

「すまない…：アルフ。」

俺とアルフは転移した。

〳〳海鳴市　バニングス家〳〳

〳〳side　アリサ〳〳

最近付き合いが悪い優人となのはがどうしてるか気になるなく家に付いたら優人と犬が倒れていたからすぐに介抱したわ。でその日に学校になのはが来たの。で今皆で私の家に来て、まず犬を見てそのあと優人が寝ている部屋の前に来たの。そして声を掛けたわ。

「優人、入るわよ。」

「ああ、どうぞ。」

入ったわ。

〳〳side　優人〳〳

アルフが転移してくれて両方怪我まみれでアリサの家に倒れていたらアリサが治療してくれた。そして今なのはとすずかも来た。

「優人、怪我はどう？」

「なんとか平気だ。ありがとうな。アリサ。」

「いいわよ。別に。」

何故かアリサは顔を赤らめていた。

「本当に大丈夫なの？優人君。」

「大丈夫だってすずか。」

「よかった。」

すずかは安堵していた。

「優人君。」

「なんだ？なのは。」

「怪我つてどんくらいなの？」（優人君、後でアースラで話があるの。）

「まあ、せいぜい全治1週間程度だよ。」（分かった。）

なのはから念話がきたから答えた。もう教えるかなりニスの事を。あとはやてにもこの事を教えるかな。

「俺は少し寝るよ。」

「分かった。おやすみ。」

「ああ。」

アリサ達が部屋からでた。

(リニス聞こえるか?)

(優人ですか。どうしたんですか?今日は帰ってこないで。)

(少し怪我をしてね。今はアルフと共にアリサの家にいるよ。後、詳細を伝えるしはやてにもこの事を伝える。)

(分かりました。後で迎えにいきます。)

(悪いな。)

俺は念話をきって少し寝た。

〃〃時の庭園〃〃

〃〃side シヤア〃〃

「遂に兵力が揃ったな。」

「大佐。」

左腕が戻っているビサイドペインが歩いて来た。

「ビサイド、怪我はいいのか?」

「ええ。なんとか。」

「そうか。始めるぞ。管理局を潰してこの時の庭園をミッドチルダに落とす。」

「そして僕達の思い描く世界を作るんですね。」

「そうだ。人は大きくなりすぎた…だから自らの手でそれをどうにかしなければならぬのだ。」

「大佐、僕は斉藤優人を殺したい。あいつのお陰で死にかけた。」

「そうだな。ならば私も手伝おう。」

「感謝します。」

「そういえばフェイトテストアロツサは?」

「ええ、あいつはもう行きましたよ。」

「あれは君が欲しいのだから?ビサイド。」

「ええ。必要ですよ。あれは…」

「そうか…」

私はモニターを見ていた。そこには、プレシア女史が感傷に浸っていた所だった。私はモニターを操作して時の庭園の後ろにひそかに着けた核パルスエンジンの状況を見ていた。

## 第18話 最初で最後の全力全開の勝負 なのはVSフェイト

### 前回の纏め

フェイトを救援しに行った高町なのはとユーノスクライアと斉藤優人。そして終わったとき優人は何者かに気絶させられる。そして優人が目を覚ましたら時の庭園にいた。アルフがプレシアテストタロツサにやられる時に助けるがシャアアズナブルが来て、優人は交戦して撤退しようとしたらシャアの追い討ちにより怪我をおう。そのあとアリサバニングスの家の前に倒れるがアリサが治療したのだった。

くくとある管理世界くく

くくside 優人くく

アリサが治療してくれた後アルフを連れて自宅に戻った。そしてはやてに全て話したがはやては怒らずに許してくれた。リニスの事も話した。そして今いる管理世界にいくためにリニスと共にアースラに来た。そして皆にリニスの事を紹介した。そしてこの管理世界に着いて、フェイトが来た後なのははフェイトに勝負を申し込んだ。お互いのジュエルシードを懸けて最初で最後の全力全開の勝負をしよう。そして今に至る。なのはとフェイトは本気でやっている。フェイトがランサーを出して撃つがなのはがビルをすれすれに登って全てを回避したならシューターを撃って逆にフェイトを追い詰めたりしていた。

「なのはのシューターは誘導弾か…。ユーノが教えたのか？」

「そうだね。僕は教えてないさ。」

「そうか。」

フェイトが近付き鎌を出してなのはに突撃したがなのはは防御を張った。そして後ろではなのはの残ったシューターがフェイトに向かっていた。フェイトはそれに気づいてまずなのはにスタン効果を

狙ったランサーを撃って紙一重に避けた。なのははビルに激突して落ちた。フェイトが煙を見ていたその瞬間バスターが飛んできていた。

「何かを感じる…。」

「優人？」

「すまない、少し離れる。」

俺はその場から離れた。

side ユーノ

優人が離脱していった。さて今なのはとフェイトは空中戦へと移った。なのはは巧いね。攻撃しながら自分の所に誘導している。そして高軌道戦闘へと移った。斬撃、斬撃更に斬撃となっていた。そしてフェイトはなのはに突っ込んだ。しかしフェイトの突撃が少しずれた。その時のフェイトの顔は悲しそうだった。まだ攻撃が続いていたけどフェイトは少し追い詰められていた。フェイトがなのはをバインドで捕まえた。そしてフェイトの周りに沢山のスフィアが現れた。アルフはそれを見て少し焦りながら

「フェイトのアレは不味いよ!!フェイトは本気なんだ!!」

「フェイト、私が教えた事をちゃんと使っているんですね。」

リニスは少し嬉しそうだった。

「ということはこれでなのはが防ぎきればなのはの勝ち、防ぎきれなければフェイトの勝ちだね。」

そして遂にスフィアが放たれた。なのはの状況は煙で見えなかった。更に残った魔力をフェイトは集結させて放った。なのはの所に直撃して周りのビルは一気に崩れた。

「どうなった…」

フェイトが動こうとした瞬間フェイトがバインドで捕まった。煙が晴れてなのはが少しボロボロで出てきた。そしてなのはは

「バスター!!」

そう言っ撃った。フェイトは防いだが手は少し血まみれだった。フェイトは安堵していたけど僕らの周りにピンクの光がどこかに集まっていた。

side 優人

俺はこの戦いを空から見ていたが今なのはの周りにピンクの光が集まっている。なのはが、

「これが私とレイジングハートが考えだしたディバインバスターのバリエーション!!」

まさか…集束砲か!? フェイト防げるのか?

「スターライトオオオオ!!」

なのははレイジングハートを構えて

「うわああああ!!」

フェイトは雄叫びを上げながら防御装を何重にも出した。

「ブレイカアアア!!」

なのはは撃った。そしてフェイトの防御装をどんどんと破壊していき、そして最後の防御装を破壊した。フェイトは光に吞まれた。

「これは…また…」

ビルがどんどんと光に吞まれて消えてった。トランザムライザーと同じかそれ以上の威力だな。俺はその時何かを感じた。

「この感じ…やはり…CBセットアップ。今回はキュリオスだ。」

『了解。Set up』

俺はキュリオスになって一気に加速した。そしてフェイトを狙おうとした者に対してビームマシンガンを撃った。爆発がしてそいつは降りてきた。

「モビルアーマーか…αジールだな。」

俺は加速して近付こうとしたがαジールはファンネルをだして撃ってきた。俺は変形して全て回避した。そしてαジールの顔の前に来て、奴をGNシールドのクローをだしてαジールの顔を挟んで潰した。そしたらαジールは爆発して落下した。

「これでいいな。CB解除。」

『了解。』

キュリオスは解除された。俺はなのはとフェイトの所に向かった。

アースラ ブリッジ



side 優人

エイミー達が時の庭園の在処を見つけた。俺とリニスとユーノとなのはとアルフそして両手を拘束されたフェイトはブリッジにきた。そして大型モニターでプレシアをみた。

『プレシアテスタロッサ!!時空管理法違反及び管理局艦船の攻撃容疑で逮捕します!!同行を、願います。』

そう言つて管理局の武装隊は奥に進んだ。その時プレシアの顔が一気に怒り顔になった。武装隊が突入して俺達が見たのはフェイトよりも少し小さいフェイトに似た女の子がポッドっぽい物に寝ていた。皆が驚いているとき

『私のアリシアに触れないで!!』

そう言つてプレシアは武装隊の一人をアイアンクロードで掴んで吹き飛ばした。

「あれは…リニス、分かるか?」

「分かりませんがきつとフェイトと何か関係があると思います。」

その時エイミーが

『プレシアはね、会社の実験でたった一人の娘を失っているの。そしてその子の遺伝子を使ってクローン製作をしたのそれがproject A.T.E. クローニングした素体に記憶を定着させることによって従来の技術では考えられない知識や行動力を与える事ができるようになるの。』

『よく調べたわね。そうよ。もう時間がないわ。この9つのジュエルシードでアルハザードにたどり着けるかどうか。』

「アルハザード?なんだそれ。」

エリスが

「失われた都市と言われてるわ。そしてその都市には未知の技術があると考えられているわ。」

プレシアがこちらを見て、

『私の目的はアリシアの復活それだけだった。けれど所詮作り物は作り物ね。アリシアの代わりにはならない。私が慰みに使うだけの人形。貴女はもういらないわ!!どこにでも消えなさい!!』

フェイトは崩れた。ガリニスが支えた。なのはとユーノは心配そうに見ていた。そしてプレシアの追いつきがきた、

『フェイト、いいことを教えて上げるわ。私は貴女を作り出した時から貴女の事が…大嫌いよ!!』

そう言った瞬間フェイトの瞳から光が消えた。そしてデバイスを落とした。おれは何か切れた。そして走って通信の所に来てスイツチを押し叫んだ。

「ふざけるな!!命はいつだって一つだ!!だからこいつの命はフェイトの物だ!!アリシアじゃない!!」

『そう。面白い事を言うわね。貴方が所持している裏死海文書が欲しいわ。来なさい。待ってるわ。』

その瞬間エイミーが

『時の庭園内に高魔力反応!!更にモビルスーツの反応!!』

「何!?まさか!!」

画面がかわりシャアが出てきた

『久しぶりだな。斉藤優人、我々は決起する。君ら管理局を潰す為にそしてこの時の庭園をミッドチルダに落とす。止めたければきたまえ。待っている斉藤優人。今度こそ君を葬る。』

画面が消えた。

「俺は先に行く。皆先に行ってるぞ。フェイトお前はお前だ。惑わされるな。」

そうやって俺は時の庭園に先に突入した。

## 第19話

### 突入！時の庭園

#### 前回の纏め

最初で最後の全力全開の勝負が始まって勝者は高町なのはとなった。そして時の庭園の在処が判明してフェイトテスタロッサの秘密が露になる。プレシアテスタロッサはフェイトに対して辛い一言をぶつけてフェイトの瞳から光が消えた。その事を聞いて斉藤優人はキレた。映像が変わりシヤアアズナブルが現れる映像が消えた後優人は時の庭園に向かったのだった。

〃〃時の庭園 内部〃〃

〃〃side 優人〃〃

俺は時の庭園に突入した瞬間にガンダムアヴァランチアストレア type F（右腕にGNハンドミサイル左腕にはGNシールド左手にはNGNバズーカ右手にはプロトGNソードとGNランチャー両肩にはGNサーベル2本腰にはGNハンマーとGNビームライフとGNビームサーベル2本）で突入した。まず左手のNGNバズーカをギラドーガに対してゼロ距離で撃ち込みそしてGNハンドミサイルを撃って破壊していった。俺は足にもついているGNクロウでギラドーガを掴んでギラドーガとは違うロボットに向けて投げた。そしてぶつかった瞬間GNランチャーを撃って同時に撃破した。更にギラドーガの心臓部分にプロトGNソードを刺した。そして他のギラドーガがシュトルムファストを撃ってきたから俺はギラドーガを盾にして防いだ。その間にNGNバズーカとGNハンドミサイルの全弾を撃ち込んだ。それにより約8割を破壊した。NGNバズーカとGNハンドミサイルが弾切れになったから俺は捨てた。そしてGNランチャーを左手に持ち代えて撃った。ギラドーガが一気に風ぎ払われた。

「終わりか…」

俺は全滅したのを見たので進んだ。

〃〃side　　リニス〃〃

　　今私はなのはさんとユーノとアルフと共に突入しています。私は優人が製作してくれた杖がたのデバイスで戦っています。傀儡兵に対してジェットスマッシュャーをぶついたりしています。フェイトは平気でしようか？

　　〃〃アースラ　　部屋〃〃

　　〃〃side　　フェイト〃〃

　　私は母さんにいらないうわられた。もう…何をすればいいかわから…ない。私は…起き上がって…画面を見た…。あのこ…思い返してみればあの子とはぶつかってばかりだった。私は…あの子…の名前…を覚えてない…。そしてもう一つの…画面を…見た…ロボットが…戦って…る。優人、あのととき彼は…母さんに言った…命はいつだって…1つだって、私は今…嬉しい…かな…母さんに…人形…って言われたり…したから…私はバルディッシュを見た。そしてバルディッシュに近付いてバルディッシュを起動した。バルディッシュはボロボロで、でもバルディッシュはサイスフォームからアックスフォームになって

『Get　set』

　　それだけ言った。私は嬉しくてバルディッシュを抱き締めた。

　　「私たちはまだ始まってすらいなかったんだね。」

　　私はバルディッシュを持ち直して魔力で外壁装甲を直した。そしてセットアップしてみんなの所に向かった。

　　〃〃時の庭園　　動力炉へと続く螺旋階段〃〃

　　〃〃side　　なのは〃〃

　　私とユーノ君とアルフさんとリニスさんとで動力炉を停めに向かったんだけど敵のロボットに塞がれまくりなの!!アルフさんがパンチで破壊してもリニスさんが斬撃を飛ばして破壊しても増えてく一方。私は先に進んだ。その時ユーノ君が

「なのは!!」

私は後ろを向いたら敵の斧みたいなのが飛んできたぶつかる!! そう思った時それは黄色い光に阻まれたの。私は上を見たらフェイトちゃんがいたの!そしてフェイトちゃんは

「サンダアアアレイジ!!」

そう言った。そして一気にロボットは風ぎ払われた。フェイトちゃんはこつちに来て、私は何かを言おうとしたら後ろで爆音がした。そこにはさっきのロボットよりも大きいのがでたの。

「あいつの装甲はとても固い…けど二人でなら…」

私はフェイトちゃんがそう言ってくれたからとても嬉しかった!!

「うん!!うん!!うん!!」

ロボットはチャージを始めてそして撃ってきた。私とフェイトちゃんは避けたの。そしてフェイトちゃんは

斬撃を飛ばして私は

「シュート!!」

デイバインシューターを飛ばしてロボットの大きな腕を壊したの。そしてロボットは残った腕でまたチャージを始めたから私はレイジングハートをカノンモードにしたフェイトちゃんもモードチェンジをしたの。私は

「デイバインイイイインバスタアアア!!」

「サンダアアアスマツシヤアア!!」

私とフェイトちゃんの砲撃はロボットに直撃してそして

「せーの!!」

更に砲撃は太くなってロボットを破壊した。そして両方のデバイスが排気してなんとか完了したの。アルフさんが

「フェイト!!フェイトお!!」

フェイトちゃんに抱き付いたの。フェイトちゃんはアルフさんを抱いて

「ごめんねアルフ、ありがとう。」

リニスさんも来て、

「良かったです。フェイト。」

「うん。ありがとうリニス。」

私たちが集まった時

【すまないが少しはじつこにまで退避してくれ。】

これは…優人君の声。皆も聞こえたらしくて皆ははじつこにまで行ったの。そしたら爆発して落ちていくロボットがあったの。

くくside 優人くく

俺はいろいろと施設を回っては潰しての繰り返しをしていた。そして今俺はビサイドを追っている。ビサイドはギラドーガを使って自分だけ逃げていた。俺はまずなのは達に警告をして5体のギラドーガと交戦している。まずGNハンマーでギラドーガの心臓部分を潰した。そして他の1体のギラドーガの四肢をプロトGNソードで切り裂いた。そして次のギラドーガはGNビームライフで終わらせて最後の2体はGNランチャーで風ぎ払った。俺はGNランチャーを捨てた。そしてなのは達の所に向かった。そしてフェイトが居たから

「フェイト、もう平気なんだな?」

「うん、もう大丈夫。」

「わかった。これから俺はプレシアの所に向かう。来るか?フェイト、アルフ、リニス。」

「うん。」

「ああ。」

「ええ。」

「なのは達は動力炉の破壊を優先してもらいたい。」

「わかった。」

「任せて!!優人君。」

「感謝する。いくぞ。」

俺とフェイトとアルフとリニスはプレシアの所に向かった。

くく時の庭園 最深部くく

くくside 優人くく

着いた。俺達はプレシアがいるこの部屋に突入した。そこには

シヤアアズナブルとビサイドペインがいた。

「ここにいたのか。ビサイドペイン、シヤアアズナブル。」

「来たのか、齊藤優人。」

「ああ、お前らは絶対ここにいると思ったからな。」

「へえ、そうか。」

「ビサイドペイン、貴様はヴェーダのパーソナルデータから消去された。貴様はもうヴェーダには戻れない。」

「なっ… まあいい。君を殺してヴェーダを奪うまでだ。」

「やってみろ。」

俺は加速してビサイドに切りかかった。ビサイドもビームサーベルを出して俺のプロトGNソードを防いだ。

「ちっ…」

俺は離れてGNクロウからもサーベルを出して切りかかった。ビサイドは回避した。

「そういえば新しくバインダーが着いてるな。」

「これか。これのお陰で1ガンダムは1.5倍までに上がったのさ。だからこいつの名は1.5ガンダムさ。」

「そうか直ぐに1ガンダムに戻してやる。」

俺は肩からビームサーベルを引き抜いた。そして1.5ガンダムのシールドを真つ二つに切った。

「ちっ…やるじゃないか」

「どー…もー」

俺は足をあげて1.5ガンダムの左胸の部分を薄いが切り裂いた。更にGNバスターライフルを破壊した。そして蹴り飛ばした。クロノが額から血を流しながら来た。そしてプレシアに

「知らない筈がないだろう？どんなことをしても過去は戻ってきやしないって！」

ギラドーガがクロノを襲おうとしたがクロノはステインガブレイドを撃って破壊した。その時フェイトとアルフとリニスが来た。プレシアが

「何しに来たの？」

「伝えたいことがあつて来ました。私はアリシアではないです、けれど私は貴方の娘フェイトテストタロッサです。例えクローンでも!!」  
「プレシア、貴女は例えこの子がクローンでもちゃんと娘として見るべきです!!」

リニスはフェイトを撫でながらいった。そしてプレシアは「下らないわ。」

「言ったね。」

ビサイドはバインダーを前に向けて俺に撃った。

「ぐあああああ!!」

俺はシールドで防いだが直ぐに破壊され吹き飛ばされた。

「ファンネル!!」

シャアもファンネルを出して撃ってきた。そしてアルフとリニスを吹き飛ばした。

「ビサイドペイン、フェイトテストタロッサを殺して新たな肉体を得るのだ。」

「ええ。こいつはいい完成体だからね!!」

ビサイドはサーベルでフェイトを突き刺そうとした。

「「フェイト!!」」

俺とアルフとリニスは叫んだ。だが突き刺されたのはフェイトではなくて…

くく side フェイトくく

私はビサイドっていう人に殺されると思って目を瞑った。でもいつまでたつても痛みが来ないから見たら母さんが庇つて、母さんの右の脇腹を貫いていた。

「母さん…。」

「彼女の事いらなんだろ?」

「やっぱり…私は…気…付くがの…遅すぎ…るわね…今更…でも…いい…私は…フェイトの事…を愛する…わ…。」

母さんが倒れた。

「母さん!!母さん!!」

私は母さんを揺すった。でも起きない。



「邪魔が入ったがまあいい。次こそ殺す。死ね!!」

「それはお前だ。ビサイドペイン。」

「何?ぐあああああ」

その時優人がビサイドの両腕を切り落とした。

　　side　優人　　

俺はビサイドの両腕をビームサーベルで切り落とした。

「斉藤…優人。」

「サヨナラだ。」

俺は心臓部分にビームサーベルを刺した。そしてサーベルを抜いて蹴り飛ばした。そして奴は謎の空間の中に吸い込まれていった。俺はビームサーベルをシャアに向けて

「次はお前だ、シャアアズナブル。」

「いいだろう。斉藤優人。君を私が殺す。」

「ならば俺もだ。」

俺はサーベルを両手に掴んでシャアに突撃した。シャアもサーベルで受け止めてきた。そして俺はシャアのシールドを蹴り飛ばした。シールドは何処かに追いやった。

第20話                    B E Y O N D                    T H E                    T I M E

前回の纏め

遂に斉藤優人は時の庭園に突入した。優人はアストレアを駆りギリドーガや傀儡兵を全滅していった。一方フェイトテスタロッサも生氣を取り戻して復活して高町なのはと共闘をして傀儡兵を倒した。そしてプレシアテスタロッサ、シヤアアズナブル、ビサイドペインがいる部屋についたフェイトはプレシアに想いを告げる。ビサイドはプレシアの一言を聞いた瞬間フェイトを殺そうとしたがプレシアが庇ってそれは失敗する。そして遂にビサイドは優人に倒されたのだった。

今シヤアアズナブルと斉藤優人の決戦が始まる。

　　時の庭園                    最深部

　　side                    優人

俺とシヤアは今激戦を繰り広げている。奴が放ったファンネルをGNビームライフルで全て破壊した。そしてシヤアもサーベル2本で切りかかってきたが俺もサーベル2本で受け止めた。

「やるな!!それでこそ私の敵だ!!」

「そんなこと!!」

俺はシヤアの腹の部分にあるメガ粒子砲をサーベルで切り裂いた。シヤアは驚いていたが俺を蹴り飛ばした。

「くっ…」

「君はここで詰む。」

サーベル2本が襲いかかってきた俺は調度死角になる部分に避けた。

「なっ…!」

「いただく!!」

俺はシヤアの左腕を切った。

「くっ……」

シヤアは俺の右手にあったサーベルを蹴り飛ばした。俺はシヤアの右手にあったサーベルの持ち手にサーベルを刺した。そして捨てさせた。

「考えるな。」

「当たり前だ！」

俺は左手で殴った。だがシヤアは右手で俺の左手を掴んだ。俺は右手でシヤアの首部分のケープルをちぎった。シヤアは逃げようとしたが

「逃がすかよ!!」

俺はシヤアの顔面を殴った。また殴った、殴ったそして蹴って

「うおおおお!!」

また殴った。シヤアは顔面から地面にダイブした。そして

「モニターが死ぬ!?何!?!」

そう言った。そして起き上がって、

「さすがというべきか……」

「これで貴様は逮捕されるだけだ。」

「私は死なないよ。」

「何!?!」

そうシヤアがいた所が崩れたのだ。そしてシヤアはそのまま落ちていった。

「シヤアアズナブル……」

俺はシヤアが落ちていくのを黙って見ていただが……

「なんだ?」

「崩れていつてるのか!!フェイトテスタロッサ!!プレシアテスタロッサを抱えるんだ!!」

「はい!!」

フェイトはプレシアを抱えた。俺はアリシアが入っているポッドを見ていた。

「優人!?!」

「俺は…すまないが先に行つててくれ。」

俺はアリシアの所に加速した。

「優人君!!急いで!!」

俺はアリシアの入っているポッドを掴んだ。そして飛ばうとしたらGNドライブが煙を上げた。

「しまつ…」

俺は落ちた。

「優人君!!」

くくアースラ 治療室くく

くくside エリスくく

私はいざという時に待機していた。そして皆が帰ってきたけど たった一人斉藤優人が帰って来なかった。

「ねえ…優人は?」

ユーノが

「優人は虚数空間の中に落ちた…。彼の足場が崩れて落ちたんだ…」

「そう…」

私はそう答えるしかなかった。斉藤優人。出会った時からずっと私は彼に何かを感じていたわ。だけど今じゃ…。その時アラームが鳴った。

『アースラ内に転移反応!!場所は転移装置のあるところですよ!!』

私たち（プレシアとクロノ以外）は走って向かった。

くくside 優人くく

なんとかあの空間から脱出ができた。まあ、エルスを呼んでそれでワープしてきただけだが…俺はアリシアが入っているポッドを離さずに来た。疲れた…。

くくside リニスくく

私たちが着いたとき倒れていたのは優人でした。隣にはアリシアが入っているポッドがありました。

「アルフ、そのポッドを抱えて下さい。私は優人を抱えます。」  
「わかった!!」

私は優人、アルフはアリシアが入っているポッドを抱えて治療室に向かいました。

くく治療室くく

くくside

優人くく

俺は目を覚ました。

「知らない天井だ…」

またこの台詞をいったな、俺。隣にはプレシアテスタロッサが寝ていた。ちょうどドアが開いた。そこにはフェイトとアルフとリニス  
がいた。リニスが

「優人、目を覚ましたんですね?」

「ああ、そうだ。」

「よかった。今なのは達を呼んできます。」

リニスは部屋からでた。俺はフェイトとアルフを見て

「ここは何処だ?」

「アースラの治療室だよ。」

「あんたは疲れと今までの傷が溜まって倒れたのさ。」

「そうか…時の庭園は?」

「なくなったよ。大きな爆発があつてね、ちょうどあたし達がアースラに戻った時には跡形もなかったよ。」

アルフが答えた。

「そういえばプレシアの容態は?」

「母さんは脇腹の傷は一応防げたけどでも…」

「わかった。クロノ達が来たら話したい事がある。」

その時クロノ達が入ってきた。クロノが

「優人、平気か?」

「なんとか…話したいことがある。リンディはいるか?」

「何かしら?」

「プレシアテスタロッサの怪我を完全に直す。そしてアリシアもこつ

ちで復活させるから二人とも何か台に乗せろ。」

「しかし…」

「頼む、やらせてくれ。」

「わかったわ。その代わり、私とクロノとエリスも同伴させてもらおうよ。」

「わかった。着いてこい。リニスとフェイトとアルフも着いてこい。そうだ、クロノアリシアの入っているポッドを持っててくれ。」

「わかった。」

俺はプレシアを運びクロノはアリシアを運んでソレスタルビーイングの中へとはいった。

　　ソレスタルビーイング　　治療室　　

　　side　　優人　　

ここに着いたときに皆驚いていたから余計な物を触ると射殺されると教えた。そしたら皆の顔が恐怖に怯える顔だった。まずプレシアをポッドに入れて

「リジエネ、後は頼む。」

『わかった。任せてくれ。ちなみにこれが蘇らせる薬でありながら成長剤だよ。』

目の前に出てきたのは典型的な注射器だった。俺はアリシアが入っているポッドを抱えてとある部屋の前に来て、

「絶対に入ってくるなよ。」

そう言って入った。

　　ソレスタルビーイング　　イノベイドの部屋　　

　　side　　優人　　

でっかい要塞には必ず秘密の部屋に近いものがある。これはその一つといてもおかしくない。イノベイドを作る工場に近い。ここなら短時間で背が小さくても2分あれば背が大きくなる。今回のアリシアはフェイトと同じ背にするようにセッティングした。俺は元々入っていたポッドからアリシアを出してアリシアをイノベイドのポッドへと入れた。そしてまず注射器を刺した。そしてスイッチを押して始まった。

くく2分後くく

くくside 優人くく

2分がたつてアリシアの背はフェイトと同じ位になった。そしてアリシアは目を覚ました。俺はポッドの開閉ボタンを押して開けた。アリシアは久しぶりの空気になれていなかったから俺はアリシアを支えて座らせた。※ちゃんと服は着ているよ。

「えつと…貴方は？」

アリシアが聞いてきた。

「俺は斉藤優人だ。」

「えつとアリシアテストタロツサです。ヨロシクね。優人。」

「わかった。アリシアまず君には知ってもらいたい事がある…」

くく今までの経緯みたいな物を説明中くく

「…という訳だ。わかったか？」

「うん、ありがとうね。」

「歩けるか？」

「ううん、歩けないや。」

「わかった。」

俺はアリシアを事前に用意していた車椅子に乗せた。そしてフェイト達の所に向かった。

くく治療室くく

くくside リニスくく

プレシアの治療が完了してプレシアは目を覚ましました。そしてリジエネさんから聞いた情報に驚きました。まさかナノマシンを入れて病気も治すなんて…。しかもその副作用でプレシアは若返ります。その時優人とフェイトに似た女の子が入ってきました。あれがアリシアですか。プレシアはアリシアをみた瞬間抱きついていました。そしてアリシアは優人から今までの経緯を聞いていたのかプレシアを説教していました。そして最後はアリシアからプレシアに抱きついていました。そしてフェイトを呼んでフェイトにお礼を

いっていました。フェイトは余程嬉しかったのか泣きながらありがとうと言っていました。私とアルフと優人とクロノとエリスとリンデイさんはこの場面を仲良く見ていました。

　　ソレスタルビーイング　　応接室　　

　　side　　優人　　

「では話して貰いましょうか。この船はなんなのか。」

俺はリンデイとクロノとエリスだけを呼んで応接室に来て、リンデイが聞いてきた。

「この船は外宇宙航行艦ソレスタルビーイングだ。細かい事は話せないがこれは俺以外はここまで動かせない。ちなみにこいつはやらんぞ。」

クロノが

「何故だ？それさえあれば管理局が沢山の世界を救えるのに。」

「確かに。」

「まあクロノの言うことも間違っていないと思うがこいつは他の勢力にあるだけで悪用される心配がある。やれ正義などと抜かしてる組織は叩けば埃なんて沢山出てくるだろうしな。とにかくこの話は終わりだ。アースラに戻ろう。」

俺とクロノとリンデイとエリスとフェイトとアリシアとアルフとリニスとプレシアはアースラに戻った。



## 第21話 名前を呼んで

前回の纏め

シャアアズナブルと死闘を繰り広げて勝った斉藤優人だがアリシアはアテスタロッサのポッドを掴んだ時足場が崩れて虚数空間へと落とされるが何らかの方法で帰ってくる。そしてアースラにいたプレシアはアテスタロッサを運んで外宇宙航行艦ソレスタルビーイングでプレシアの治療を行う、勿論アリシアも復活させるのだった。アリシアは目を覚まして優人から今までの経緯をきいた。そしてフェイトはタロッサはプレシアとアリシアと会うことができ喜んでいたのであった。

〃〃数日後〃〃

〃〃斉藤家           リビング〃〃

〃〃side            優人〃〃

あのあとアースラに戻ったら俺とユーノとリニスとなのはは地上に戻った。ユーノはなのはの家に行った。ちなみにフェイト達は事実上シャア達に利用されていたから無罪だ。それに更に調べたらアリシアがなくなった原因はプレシアではなくてプレシアが勤めていた会社の本社達とその事実を隠蔽した一部の管理局員だ。だから書類整理が終わってから会わせると。俺達は朝が早い。だから俺達は朝御飯を食べている。その時アースラから連絡が入った。フェイト達に会えるという連絡だ。俺ははやてとセシアに言っただけからリニスと共に集合場所の海鳴公園に来た。フェイト、アリシア、アルフ、プレシアそしてクロノがいた。俺はフェイトとアリシアに

「来たぞ。」

「来ましたよ。フェイト、アリシア。」

「リニス、優人。」

「リニスはフェイトとアリシア達と話してるといい。俺はクロノとプレシアと話す。」

「はー。」

俺はクロノとプレシアに向き合い

「クロノ、出会い頭で悪いが俺は管理局に入ろうと思う。」

「本当にいきなりだな!?あ、そこの部分は母さんと話し合うといいさ。」

「そうか。プレシアさん体調は?」

「いいわ。むしろ若返ってる気がするわ。」

「それはプレシアさんの今体に駆け巡っている血の中にナノマシンが入っていてそれが老化も直してるんだ。」

「そうなの。とにかくありがとう。貴方のお陰でアリシアも復活したしフェイトも可愛がる事ができるわ。」

「いいさ。久しぶりの団欒は楽しめよ。」

「ええ。」

「そういえばなのはは?」

「来るさ。」

「フェイトちやくん!!」

「ほらな。」

なのはとユーノはフェイトとアリシアの所に来た。そして俺とクロノとユーノとプレシアとアルフとリニスとアリシアもその場から離れた。アリシアはフェイトとなのはが話し合えばいいとき。俺達はベンチの所に行った。俺はアリシアに

「そういえばアリシアもう歩けるのか。早いな。」

「すごいでしょ。」

アリシアは胸を張っていた。

「まあな。」

俺はアリシアの頭を撫でた。アリシアは猫みたいに目を細目ながら頭をグリグリしてきた。俺は撫でながらアルフに

「アルフも元気だな。」

「うん、あたしは元気だよ。ありがとうね。優人のお陰でフェイトは救われたから。」

「いや、根本的にはなのはからさ。」

「それでもだよ。」

「そうかな。」

俺が見たときなのはとフェイトは抱き合っていた。よく見ると二人とも泣いていた。嬉し泣きか…。そして後ろを見たらアルフとプレシアも泣いていた…何故？そしてフェイトとなのはハリボンを交換した。その時クロノが

「時間だな。」

「もうか？」

「ああ。」

「クロノ、たまにアースラにお邪魔させてもらうからな。」

「わかった。なら君のデバイスにアースラの座標番号を送っておく。」

「ありがとう。」

俺達はなのはとフェイトの所に向かった。そしてフェイトは俺に  
気付き俺に

「ありがとう。優人君のお陰で助かった。」

「俺は何もしてないさ。」

「ううん、母さんもお姉ちゃんも助けてくれたから。」

「そうだな。フェイト、家族を大切に。」

「うん。」

「またな、フェイト、アリシア、アルフ、プレシア、クロノ。」

「うん、またね。」

「バイバイ！」

「じゃーね!!」

「またね。」

「ああ、またな。」

なのはもずっと手をふっていた。リニスもだ。そしてフェイト、アリシア、アルフ、プレシア、クロノは完全にいなくなった。

「行くか…俺達も。」

「うん!!」

「リニス、ユーノを頼むな。」

「ええ、いってらっしゃい。」

「いってきます。」

俺となのはは学校に向かった。今日という日が幸せであることを願いながら。そしてそのあとも：

だけどそのあと俺はこの願いが無慈悲にも踏みにじられると知った。

~~~~~  
???

「いいのですか？」

「構わないさ。あと半年軍備を固めるさ。シヤアアズナブルの二の舞にはならんよ。」

「へえー慎重だね。」

「ふっ：何事も慎重にやらなければならぬさ。」

「そうだな。そして我々の望みのため、協力してもらう。」

「いいだろう。だが私の計画にも協力してもらう。」

「わかった。」

「さて始めるとしようか。半年後に向けて…。」

全てを終わらせる為に

この人間は仮面の下で笑っていた。

くく 齊藤家 リビングくく
八神はやてはいつもとある本と一緒にだ。その本は彼女にとって大
切な物であるから。そしてその本が

た。

脈をうつ

d

無印編

e
n

第22話 局員として

〃〃数日後〃〃

〃〃アースラ 部屋〃〃

〃〃side 優人〃〃

フェイト達が本局に行ってから数日後、俺は今アースラで局員の採用試験なる物を受けていた。これに合格すれば訓練学校に行かずにすむんだと。俺はこの過去問をやったことはないが全部解いた。その時鐘がなって試験が終わった。問題用紙と解答用紙が回収された。まあいいか。そして俺はクロノに呼ばれて魔力量を計らさせた。そして計った機械が大爆発して跡形もなくなった。更には模擬戦と言われてクロノとエリスと戦ったが圧勝した。そして試験が、完全に終わった。

〃〃アースラ 食堂〃〃

〃〃side 優人〃〃

「疲れた…。」

俺は食堂で寛いでいた。結果は直ぐに出るとか。まあいい。俺はとにかく管理局に入る事ができればいいや。多分この先もモバイルスーツを所持して襲ってくるヤツはいると思うしそれに管理局ならば色々と要請ができるからな。そう思っているとクロノとエリスがこっちに来た。俺はクロノに

「なんだ？もう結果がでたのか？」

「ああ、結果は文句なしの合格。まさか執務官である僕を倒して更に結構強いと言われた特別教導官であるエリスにさえも圧勝しているんだ。こんな人材は欲しいさ。それに君の魔力量が不明だからね。こんな逸材は初めてだよ。ちなみに君は特別に三等空佐だ。」

「結構高いわね。三等空佐でしょ？すごいわね。」

「そうなのか？まあ受けるよ。」

「そうか。制服は？」

「来たくない。こんな年で堅物にはなりたくない。」

「そ、そう。(ちよっと見てみたかったわね。)」

俺はクロノから証明書をもらった。

「これで俺も管理局員か。」

「そうだな。だけど君はほぼ偉いからな。」

「そうか。」

「そうだ。そして早速だが任務だ。」

「ほんとに早速だな、クロノ。」

「まあ、仕方ないわよ。で任務は？」

「ああ、内容は…とある無人世界で暴れてるロストログリアU。E通称

アンノウンエネミーだ。」

「そいつを倒せばいいんだな？」

「ああ、いこう。」

「了解。」

俺とクロノとエリスは転送ポートに向かった。

　　〳〳第9管理外世界　　エンジンル〳〳

　　〳〳side　　優人〳〳

俺達がこの世界についた。この世界はビルなどがあつた名残がみられる。そう、どの建物も機能していないのだ。

「クロノ、これは…。」

「これはな一年くらい前に破壊された世界だ。完全に住民もいなくなつたから無人世界なんだ。」

「そうか。」

『マスター、2時の方向に敵です。なんか竜みたいです。』

「それが今回の敵か？クロノ。」

「ああ、そうだ。確か青い竜がガフランで緑がバクトだ。」

「了解、CBセットアップ。今回はガンダムエクシアだ。」

『了解　Set　up』

俺はエクシアになつた瞬間にビームダガーを投げた。そしたらガフランの顔面に刺さつた。ガフランは爆発した。

「先に行つてるぞ。」

俺はクロノとエリスにそう言って先行した。そしてビームライフルを撃つたら弾かれた。ガフランは多少のダメージを受けていたが俺は驚いた。まさか弾くなんて。俺は近付いてGNロングブレイドで切り裂いた。クロノとエリスも戦っているがやはり圧されている。俺はビームダガーを抜いてクロノとエリスに襲おうとしていたガフランに投げて沈黙させた。そして俺はGNソードをソードモードにしてガフランの首と胴体を切り落とした。ガフランはここには十機はいる。俺はGNソードをソードモードにしてそして左手にGNロングブレイドをもつて突貫した。まずGNロングブレイドをガフランの頭に投げて破壊した。俺は持っている武器を駆使しながらガフランを倒していった。

〃〃数分後〃〃

〃〃アースラ仕事場所〃〃

〃〃side 優人〃〃

終わった。それだけの一言につきる。俺とクロノとエリスはこの任務が終わった瞬間アースラに帰還した。そして報告書をかいている。書くのが楽だな。しかも作文よりもだ。

「よし、終わりと…。」

俺は報告書をリンデイに送信した。

「帰るかな。」

「帰るのか?。」

「そうだな。ほぼ学校に通わないと行けないし。」

「わかった。もし必要になったときに連絡する。」

「了解。」

俺は家に帰った。

〃〃斉藤家

リビング〃〃

〃〃side

優人〃〃

「…という事があったんだ。」

俺は夕食を食べながらはやて、セシア、リニスに今日の事を話した。

「しかしすごいんな。優人君佐官やる？ほぼ偉いやん。」

「そうかな？はやて。」

「すごいですよ。優人、」

「ありがとうセシア。」

俺達はそのあとも夕食を楽しんだ。

〃〃メンテナンスルーム〃〃

〃〃side 優人〃〃

俺は夕食を食べ終わった後、セシアに呼び出されてここにいる。セシアは先に居た。

「セシア、なんの用だ？」

「はい、実はエクストリームガンダムの開発が完了しました。」

「どんなやつなんだ？」

「こんなのです。」

俺が見たのはクリアな部分が赤いガンダムだった。セシアは自慢げに

「その名もエクストリームガンダムtypeレオスです!!」

「そうか。」

「ちなみにこのエクストリームガンダムは色々進化をします。今は確かエクリップスフェースです。」

「ありがとう。なら今度、こいつを実戦に投入するよ。」

「わかりました。このエクストリームガンダムは単体のデバイスです。それに生体認証もついているので心配はありませんよ。」

「ありがとう、セシア。」

「いえ、いいですよ。」

「さじやあ寝るかな。おやすみセシア。」

「はい、おやすみなさい優人。」

セシアが先にメンテナンスルームから出たので俺はメンテナンスルームの電気を落として部屋に向かった。そしてエクストリームガンダム。こいつの性能がどんなのかを気にしながら眠りについた。

A, S編

第23話

魔法家族ヴォルケンはやて

〃〃一ヶ月後〃〃

〃〃齊藤家　　はやての部屋〃〃

〃〃side　　優人〃〃

さてなんではやての部屋にいるかを説明しよう。はやての図書館に迎いに行くのが出来なくてはやてが帰ってくるのが遅くて心配していたらはやてが四人組と共に帰ってきた。びっくりしたな。ちなみにはやては寝ている。ちなみにここには金髪とピンク髪の女性がいる。おっ…覚ましたな。

「はやて、平気か？」

「うん、なんとか。えつと…」

はやては金髪とピンク髪の女性を見た。そして少したったら赤い髪の女の子と耳が生えてる男の人が入ってきた…耳？そしてその四人組は臣下の形をはやてにとった。そして説明が始まった。

〃〃説明中〃〃

終わった。なんか魔力を集める事ができるんだと。金髪がシャマルでピンク髪がシグナムで赤い髪がヴィータで耳の人がザフィーラだってちなみに狼だと。裏死海文書とは逆か…。はやてはダンスをあけてメジャーを取り出して

「じゃあまずは皆の服の計りからやな。優人君、手伝ってくれへん？」
「わかった。おい、着いてこいよ。」

俺ははやての車椅子を運んで下におりた。ちなみにリニスとセシアにも説明したぞ？

ちなみにヴィータ、シグナム、シャマルは今着替えてる。俺はザフィーラが狼になったから上につけて広いでいる。ちなみに皆は服を着るのに戸惑っている。そしてちやうど昼になった、

「昼やな。」

「はやて、俺が作るよ。」

「お願いな。」

俺は台所に向かった。今日は無難に炒飯が作りたいたから炒飯を作った。

「できたぞ。」

俺は炒飯とスプーンをおいた。

「さすがにスプーンの使い方はわかるだろ？」

「ああ。」

シグナムが、答えた。

「食べるときは手を合わせていただきますというんだ。ほら、合わせて。そしていただきます。」

「」「」「いただきます。」「」「」

皆がスプーンをとって食べた。シグナムとシヤマルの顔が少し面白かった。ちなみにヴェイータは今一心不乱に食べてる。俺達はそれを見たらヴェイータは顔を赤くした。俺達は笑った。そしたらはやてが

「優人君、やっと笑ったで。」

「そうなのか？優人。」

「まあな。」

「そうなんですか。」

「まあ、面白いことがあれば誰だつて笑うさ。それにあんなにおいしく食べてくれるのは嬉しいさ。じゃあ食べようか。」

俺達は炒飯を食べた。食器を片付け終わって、はやてがでかけると言ったから俺ははやての車椅子を押した。

〃〃シヨツピングセンター 玩具売場〃〃

〃〃side 優人〃〃

俺達ははやてがヴォルケンスの騎士甲冑を考える為に来たんだと。俺達は今ぬいぐるみ売場にいる。後ろを見たらヴェイータがとあるぬいぐるみに目を奪われていた。進みながら俺ははやてに

「はやて、少しいいか？」

「なんや？」

「ヴィータがのろうさっていうぬいぐるみに目を奪われているから買ってくる。」

「はあい。待つとるね。」

「ああ。」

俺は歩いてのろうさを掴んでレジに向かつてのろうさを買った。そしてはやて達の所に戻ってヴィータに袋を渡した。

「優人、なんだ？これ。」

「これはなヴィータへの贈り物さ。」

「ほんとか!?ありがとう…」

「どういたしまして。」

俺はヴィータの頭を撫でた。

くく帰り道くく

くくside 優人くく

結局いいのはなかったらしくて食材を買っただけになった。ヴィータはあの袋を大事そうに抱えていた。俺とはやてとシヤマルは顔を見合わせて頷いて、

「ヴィータ、開けていいぞ。」

そう言った。ヴィータは直ぐに開けた。まあろうさが入っていたからヴィータはめちやくちや嬉しそうにのろうさを頬擦りしていた。俺達は少し微笑んだ。

くく斉藤家 風呂くく

くくside はやてくく

今私はヴィータとお風呂に入つとる。ヴィータに

「ヴィータ、のろうさどうやった？」

「可愛かったよ!!はやて。」

「優人君に感謝せえよ?」

「うん!!」

私はシヤボン玉を吹いたんや。その時のヴィータの顔が可愛かったんや。

くく同時刻くく

くくリビングくく

くくside 優人くく

俺はシャマル、シグナムに訓練場とメンテナンスルームを教えた。そしてリビングで茶を飲みながら

「シャマル、この本に見覚えは？」

俺は裏死海文書を見せた。

「これは見たことがあるわ。これは裏死海文書ね。」

「昔からあったのか。」

「はい。」

「ちなみにこの本のマスターは俺なんだ。」

「そうなの!!すごいわ!!」

「そうなのか?シグナム、ザフィーラ。」

「ああ、昔、こう言われた。裏死海文書を手に入れた者はこの世の全てを手に入れる事ができると。そしてそれを極めた暁には神に等しき存在へとなることができる。」

「そうか…」

だからあんなに過剰戦力なのか。ヴィータとはやてがでてきた。

「シャマルとシグナム入ってきな。」

「ああ。」

シグナムとシャマルは風呂に向かった。俺はヴィータに

「ヴィータ、風呂どうだった？」

「楽しかった!!はやてがねこう泡を飛ばしてた!!」

「泡？」

「シャボン玉の事や。」

「あー納得だ。楽しかったか？」

「うん!後ね優人ありがとう。のろうさ買ってくれて嬉しかった!!」

「どういたしまして。欲しかったんだろ？」

「うん!!」

俺達是他にも話した。ヴィータは終始楽しそうだった。シャマルとシグナムが風呂から出てきたから俺は風呂に入った。ちなみに俺

はザファイラと風呂に入った。

くく寝室くく

くくside はやてくく

今日は優人君、セシアさん、リニスさんの他に家族がふえたんや。とても嬉しかった。私はヴィータと寝ることになった。ヴィータは今日、優人が買ったのろうさを抱き締めて寝とる。かわええな。私はそう思いながら寝た。明日がいい日である事をいのりながら。

第24話

はやての病気の真実

前回の纏め

八神はやてに新たな家族が出来た。名はシャマル、シグナム、ヴィータ、ザフィーラである。斉藤優人や、セシアアウェア、リニスはそれを迎えたのだった。

〃〃3か月後〃〃

〃〃病院 診療室〃〃

〃〃side 優人〃〃

俺とシグナムとシャマルは石田先生からはやての病気について聞くところだ。ヴィータ、はやては下で待ってる。リニスとセシアには食材を、買ってきて貰ってる。そして今俺達は石田先生からとんでもない言葉を聞いた。それを聞いた、シャマルは

「先生…嘘ですよね？」

「いえ、本当なんです。はやてちゃんの病気は悪化し始めていてこのまま内臓まで届いてしまえば下半身が使えなくなるんです。」

「く…」

「ご免なさい。今の医学では治せないの。」

「石田先生は悪くないです…」

俺達は部屋から出た。シャマルは泣き崩れ、シグナムは壁を叩いて悔しがっていたよくみると泣いていた。

「シャマル、シグナム、この事ははやてだけには言うなよ。先に降りてる。」

俺はヴィータ達の所に向かった。ヴィータとはやては仲良く話してた。はやては俺に気づいて

「あれ？シャマルとシグナムは？」

「後で来ると。」

「優人、今日の夜ご飯は？」

「そうだな…ハンバーグだ。」

「本当か!？」

「ああ、」

「優人のご飯とはやてのご飯はギガウマだからなく。」

シヤマルとシグナムが降りてきた。魔法で隠してゐるな涙あと。

〃〃数時間後〃〃

〃〃公園〃〃

〃〃side 優人〃〃

はやてが寝た後はやて以外の皆は公園に集まった。今日の病院で話をするためである。そして話した。全てをヴィータは泣きながら

「はやてを…はやてを助けなきゃ!!」

「闇の書へページを全て完成させれば足が治るはず。」

「皆は魔力を蒐集するのか。」

「ああ。」

「なら、俺は何もできないな。俺は管理局の人間だ。」

「う、嘘だろ?」

「すまないな。だがこれだけは言わせて貰う。俺は管理局にこの事は言わないし、何も知らせない。」

(CBあれを)

『了解』

CBに頼んでとある物を出して貰った。シヤマルが

「それは…リンカーコア?」

「ああ、とある奴等の物だ。貰うといい。」

ヴィータが

「いいのか?」

「構わない。だがこれが最初で最後の手伝いだ。俺のコアはやらないからな。」

「分かってる。リンカーコアをくれたんだ。」

「すごいわね。これで200ページは貯まったわ。」

「ありがとう。優人。」

「いいさ。後は頑張ってくれ。俺はこれから何も見てないし、何も聞いてないからな。」

「すまないな。助かる。」

「いいさ。」

「待ってください。」

リニスと言った。まさか…

「リニス、お前…」

「ええ、私のリンカーコアを蒐集してください。そうすれば。」

「いいのか？」

「ええ、はやてを死なせたくありませんから。」

「わかったわ。」

シヤマルが蒐集を始めた。そして蒐集し終えて。

「ありがとう。助かったわ。」

「いいですよ。では帰りましょう。」

俺達は帰った。

〃〃齊藤家 メンテナンスルーム〃〃

〃〃side 優人〃〃

俺はセシアを呼んだ。エクストリームガンダムについて聞くためにだ。

「失礼します。」

セシアが入ってきた。俺は

「セシア、エクストリームガンダムの状況は？」

「今、最終調整に入っています。」

「そうか。」

「エクストリームガンダムは専用のGNドライブで動きます。」

「専用のか…。」

「ええ、リジエさんにも協力してもらいました。」

「そうなのか。」

「はい。」

「ありがとう。では寝るか。」

「はい。」

俺はメンテナンスルームの電気を落とした。そして寝た。エクストリームガンダム…こいつとダブルオークアンタがあれば…きつと…

〃〃数日後〃〃

〃〃アースラ　ブリッジ〃〃

〃〃side　優人〃〃

俺はクロノに呼ばれてここにいる。今回な任務だと。しかもロストロギアの任務。クロノに

「クロノ、今回のロストロギアは？」

「ああ、今回のロストロギアは全体で言うと生命の実だ。そして今回は第3の使徒だ。」

映像に出てきた奴は他の魔導師の攻撃を受けているのに無傷だ。なら俺は裏死海文書を出した。そして

「あいつにはこいつが一番だな。クロノ、転移させてもらうぞ。」

「わかった。」

俺は転移した。

〃〃第28管理世界　オリバーノーツ〃〃

〃〃side　優人〃〃

俺はエヴァンゲリオン初号機を出した。

「行け、初号機。」

そう言ったら初号機は第3の使徒に向かった。奴は何かのフィールドを展開していた。そして初号機は倒されて顔を捕まれてビームを喰らった。最後は吹き飛ばされてビルに激突した。初号機の右目は損失した。

「初号機、動かないのか。」

俺は戻そうとした。その瞬間初号機が動き出した。

「なんで動いてる…！」

初号機は普通に動いてそして

「まさか…暴走!?!」

『ウオオオオオオオオっ!!』

吠えた。そのまま走って第3の使徒を飛ばしたりして、最後は掴み投げをして第3の使徒の臓物をえぐりとったりしてた。そう初号機の周りには血が散乱していた。初号機はまた

『ウオオオオオオオオっ!!』

吠えた。そして第3の使徒を食べ始めた。

「あれが…エヴァンゲリオン。」

初号機が何かを潰した瞬間爆発が始まった。

「やばい。CB、大至急でアリオスだ!!」

『了解。』

俺はアリオスになった瞬間変形して加速した。そのお陰で怪我はしなかった。爆発が収まって煙が晴れた、そこには血に濡れたエヴァンゲリオン初号機が突っ立っていた。

〜アースラ ブリッジ〜

〜side 優人〜

「あれは一体なんだ!？」

「クロノ落ち着いてくれ、出なければ話せない。」

「わかった。でなんだあれ。」

「ああ、あれは裏死海文書というらしい。」

「本当か?それは」

「ああ、」

「少し待っててくれ。」

クロノが出てった。アースラに戻った後クロノがあれはなんだと聞いてきたからな。裏死海文書のページは全てが埋まってる。便利だね。

「すまない。優人、こっちに来てくれ。」

俺はクロノに着いてった。そこはメンテナンスルームでした…。

「まさか裏死海文書の検査か?」

「ああ。」

「残念ながら裏死海文書は俺の許可がないとあかないぞ?」

「では開けてくれないか？」

「わかった。」

俺達はメンテナンスルームに入った。

〃〃メンテナンスルーム〃〃

〃〃side 優人〃〃

メンテナンスルームに入ったら緑の髪の人が出た。その人が

「こんにちは。技術部のマリエルです。斉藤優人三等空佐。」

「どうも、斉藤優人です。」

「早速その裏死海文書見せてくれないかな？」

「分かりましたが検査だけですよ？」

「わかってるわ。」

裏死海文書の検査が始まった。特出すべき点はなかったらしいし
かも見れなかった項目もあったとか。俺は報告書を書いて帰った。

第25話

再会

前回の纏め

八神はやての病気は治らない事がわかり、シグナムとシャマルは泣き崩れる。そしてその話を斉藤優人ははやて以外にした。ヴィータははやてを助けなきやと、いった。優人はヴォルケンスに自分は管理局に居るから手伝えないと言ったがとあるリンカーコアを渡す。そしてリニスも協力した。その数日後、優人はクロノハラオウンに呼ばれた。とあるロストログアの破壊任務である。そして優人は裏死海文書からエヴァンゲリオン初号機を出して戦う。そして勝つのだった。

〃〃3か月後〃〃

〃〃海鳴公園〃〃

〃〃side 優人〃〃

3か月がたった。メールが来てフェイトがここに来ると。俺となのははフェイトを見つけた。フェイトもこっちに気づいた。なのはは

「フェイト…ちゃん…。」

「なのは…。」

二人共走って抱きついた。まあ、約半年ぶりだからな。いいだろうな。フェイトは俺に

「優人、久しぶり。」

「ああ、久しぶりだな。あれ？アリシアは？」

「お姉ちゃんは後で来るって。」

「そうか。」

〃〃数時間後〃〃

〃〃学校 教室〃〃

〃〃side 優人〃〃

フェイトと一旦別れて俺となのはは学校に行った。そして先生が

「今日は転校生が来ます。フェイトさん、アリシアさん、入って来て。」
金髪の二人が入ってきた。フェイトとアリシアか。フェイトは恥ずかしながら

「フェイト…テストタロツサです。よろしく…お願いします。」

「アリシアテストタロツサです。よろしくね!!」

拍手が聞こえた。というかまさか転校してくるとはね。驚きだよ。

〜〜昼〜〜

〜〜屋上〜〜

〜〜side 優人〜〜

「とうか転校したのか…。」

「そうだよ!!驚いた?」

「まあな。少しは驚いたさ。」

「ふうん。生で会うのは始めてだね。よろしくね、アリサ、すずか。」

「よろしくね、」

「よろしくね。」

「ん?知り合い?」

俺は気になって聞いたらフェイトが

「ううん、文通で知り合ったただだよ。」

「そうか。」

「優人君、ご飯たべよう?」

「ああ。」

俺達は弁当を出した。それを見たフェイトとアリシアが

「美味しそう。」

「美味しそう。これリニスを作ったの?」

「いや、俺だが?」

「うそ!!一口頂戴?」

アリシアが、いった。

「私も欲しいな。」

フェイトもそれに便乗して言った。

「分かった。」

俺はまず佃煮を掴んでアリシアに

「ほら、アーン。」

「え…うんアーン。はむ、はむ…美味しい!!」

「良かった。次はフェイトだな。」

俺はほうれん草をバターで炒めた物を掴んで

「フェイト、ほらアーン。」

「うん、アーン。あむ、美味しい…」

「それは良かった。」

「優人君!!」

すずかとなのはが詰めよってきた。

「私にも何か頂戴?」

「すずかちゃんずるい!!私も!!」

「分かったから落ち着け。」

俺はなのはとすずかにもあげた。そして仲良く食べた。フェイトとアリシアが入って来たぶんよりいっそう楽しく感じた。

～～放課後～～

～～学校 門前～～

～～side 優人～～

「じゃあね」

「また明日」

すずかとアリサは帰った。俺となのはとフェイトとアリシアは歩いて帰った。そして帰り道にフェイトが

「これからはよろしくね。」

「よろしくな。フェイト、アリシア。」

「うん!!」

アリシアは俺に抱きついてきた。俺はアリシアを撫でた。フェイトとなのははなんか不機嫌な顔をしていた。

「これからは皆で訓練が出来るな。」

「うん、リニスから聞いたけど優人の家の訓練場使ってもいいよね?」

「ああ。」

「ありがとう。」

「今回はあたしたちがあんたを殺してあげるよ!!前の世界でやられたぶんを返すよ!!」

「断る!!CBセットアップ。セラヴィーで行く。」

『了解、Setup』

俺はセラヴィーガンダムになった。

「お前らをあの世に戻してやる。」

「やってみるんだな？」

「4対1、こちらが有利だ。貴様では勝てまい。」

「それはどうかな？やってみなければ分からないからな。」

俺は加速した。

第26話

敗北

前回の纏め

約半年ぶりに再会した斉藤優人と高町なのはとフェイトテスト
ロツサとアリシアテストアロツサ。これからは魔法の練習も一緒にで
きると喜んでいた。その夜優人は死んだ筈のブリングスタビティ、テ
ヴァインノヴァ、ヒリングケア、リヴァイヴリバイバルと遭遇するの
だった。

くく街くく

くくside 優人くく

俺は今イノベイドと交戦してる。奴等はガデツサ、エンプラス、ガ
ラツゾを使ってる。俺はセラヴィーのGNバズーカIIを撃った。が
奴等は回避した。ちなみにブリングはガラツゾ、ヒリングとリヴァイ
ヴはガデツサ、テヴァインはエンプラスだ。ガデツサのビームが飛ん
できたから回避した。まずはビームサーベルでガラツゾと交戦した。
「前とは違い少しビームの量が増加してるな。斉藤優人。」

「それはどーも!!」

俺はガラツゾを蹴った。そしてGNキャノンで砲撃した。しかし
ガデツサのバルカンによって右膝のキャノンを破壊された。

「ッ!!」

「残念ながら強くなっているのは君だけではないのだよ!! 斉藤優人
!!」

ガラツゾとガデツサが挟み込んで来た俺は後ろに下がったが左膝
のキャノンも破壊された。ガデツサがビームサーベルを出して来た
から俺もビームサーベルを出して応戦した。左からエンプラスが来
たから俺はガデツサを思いつき蹴った。そしてエンプラスのビー
ムを回避した。そしたらガラツゾに左腕を切られた。

「くそ…」

そしてガデツサのビーム砲によって右手首を吹き飛ばされた。そ
の瞬間エンプラスのエグナーウィップに捕まった。

「グアアアアアアッ!!」

電撃を喰らった…くっ、これじゃあ…エンプラスとガデツサの三機が大型ビーム砲を構えていた。

「しまった…」

「しずめえええええ!!」

三機のビーム砲からビームが飛んできた。

「GNフィールド最大展開!!」

俺はセラヴィーの後ろのガンダムの顔も展開して何とか防ごうとした。が

『うわああああああああああああああああああ』

「この声はフェイト!?」

そう言った時後ろからガラツゾが接近していた。

『マスター!!』

「なっ…」

俺はGNフィールドを展開した状態で後ろに振り替えたたらガラツゾが既に接近していた。

「しまった…くっ…」

両腰についてるGNフィールド発生機をガラツゾのビームサーベルによって両方破壊された。それによりGNフィールドは失われた。

「しまっ…」

俺はビームに吞まれてそのまま吹き飛ばされた。

「うわああああああああああああああああ!!」

何度もビルに激突してそして公園まで吹き飛ばされた。

くく街くく

くくside ブリングくく

我々は斉藤優人と交戦して勝った。

「死んだか?」

「もしかしたら生きてたりしてね。」

ヒリングが言った。

「とにかく撤退しよう。これでなら暫くは動けまい。」

あたしは少し不安だったけど優人の怪我が治る事を心の中で祈った。

くくアースラ ブリツジくく

くくside クロノくく

僕は今回、なのは、フェイト、アルフの三人が襲われたと情報が入って来たのでレイジングハートとバルディッシュが撮ったという写真を見ていた。その時優人のデバイス、ソレスタルビーイングからも写真が届いた。

「なんだ？これは」

僕は操作してその写真を見た。

「これは！優人が負けてる？」

そうその写真らは優人を圧して挙げ句にはビームで優人を吹き飛ばしている写真だった。その時エイミーとエリスが来て、

「クロノ、何を見ているの？」

「ああ、右にあるのはレイジングハートとバルディッシュが撮った写真だ。今見ているのは優人のデバイスソレスタルビーイングから届いた写真だ。」

エリスは興味深そうに

「へえー…ってこれ、優人が負けてるじゃない!!」

「そうだ。優人を圧していたモビルスーツをよく見てみる。」

「これは！優人とは違う色だけど明らかに同じ粒子の光を放ってるわね。」

「そうなんだ。この画像は解析にまわす。だけどレイジングハート達から送られた画像は見たことがある。」

エイミーが不思議そうに

「見たことがあるってどんな？」

僕は本の画像をだして

「これは…ロストロギア闇の書だよ。」

エイミーは少し驚いて

「闇の書ってあの…」

「ああ、危険度一級指定だ。まさかこんな時にか。」

「クロノ、何かならぬ因縁を持ってそうね。」

僕は少し顔をしかめて

「まあね。昔にね。」

「何か辛そうだから、聞かないでおくわね。」

「そうして貰えると助かる。」

僕は画像を閉じた。

第27話

敗北の朝

前回の纏め

ブリングスタビテイ、デヴァインノヴァ、ヒリングケア、リヴァイヴリバイバルと交戦した斉藤優人。しかし復活した彼等に翻弄され遂に敗北するのだった。

〳〳次の日〳〳

〳〳斉藤家　リビング〳〳

〳〳side　優人〳〳

「ここは…」

俺は一回眠ったんだっけ…たしかイノベイド達にぼこぼこにされてシグナム達に出会って…それから…寝たんだ。

「頭に柔らかい感触が…」

俺は横に寝ていたから上を向いた。そしたらシグナムが俺を膝枕していた。シグナムも寝ていた。俺は一度起き上がった。そしたら体に痛みが走った。

「ツ!!」

そういえば傷が塞がっている。シヤマルな治してくれたのか…今日は学校休みだな。俺は歩いて電話機を掴んで学校に今日は休むと連絡した。そして二階から降りてくる音が聞こえた。そしてドアが開いた。

「おはよう、はやて。」

「優人君、おはよーさん。」

はやてが車椅子で来たのだ。

「はやて朝御飯手伝うよ。後今日は学校に休むと伝えた。」

「そうなんか?なんかあったん?」

「怪我をしてな。まともに歩ける様なものではないからな。」

「分かった。手伝って?」

「ああ。」

俺ははやてと一緒に朝御飯の準備をした。そしてちようど食器を
だす時にドアが乱暴に開いた。シャマルが寝癖をつけたまま来たの
だ。

「ごめんなさ〜い!!」

「おはよう、シャマル。」

「おはようございます。優人君怪我はもういいの?」

「外面はな。内面はまだ痛みがね。」

「それは良かった。」

そしてシグナムも起きた。そしてヴィータも起きた。

「おはようございます。優人、怪我はもういいのか?」

「ああ、なんとかね。」

「そうか。」

「おはよー。」

ヴィータはまだ眠たそうだ。シャマルが

「ヴィータちゃんも顔を洗って。」

「うん。」

そしてリニスとセシアも下りてきた。

「おはようございます。優人、はやて皆。」

「おはようリニス。」

「おはようございます。」

「朝御飯できたで〜。運ぶの手伝って。」

俺達は朝御飯を運んでヴィータが顔を洗い終わって俺達はイスに
座った。そして食べた。朝御飯はいつも通りの味がした。

〜メンテナンスルーム〜

〜side 優人〜

俺は今CBの調整を行ってる。ついでにGNドライブを新しく設
計してる。

「GN粒子の色は…紫だな。エルスの色と同じやつにしよう。ついで
に青のGNドライブも作るか…」

俺はヴェーダとリンクしながらGNドライブの開発をしている。

ちなみにイノベイドのガデツサやガラツゾのデータをみて対策も練ってる。次には負けられないようにしたいしな。

〜フェイトの家〜

〜side フェイト〜

「お邪魔します。」

「ただいま〜。」

私の家はテストロッサ家とハラオウン家の合同だ。私とお姉ちゃんはなのはを家に誘った。なのはは行くって言ってくれた。後母さんさ紹介もしくちやね。私達はリビングに入って

「母さん、アルフ、リンディさんただいま。なのはを連れて来たんだ。」

「お帰りなさい。こんにちはなのはさん。」

「お帰りなさい。私はプレシアテストロッサよ。よろしくね。なのはちゃん。」

「お帰り〜おつなのは〜」

「えつと…お邪魔します。初めましてプレシアさん。高町なのはです。よろしくお願いします。」

「なのは〜早く部屋に行こう?〜」

「うん。」

母さんが

「そういえば優人は? 優人も連れて来るって言ったのに。」

「優人はね大怪我したんだって。だから学校休んでるの。明日には来るって」

「そう。手は洗いなさい。後でおやつ出しとくからね〜。」

「二はーい。」

私達は洗面所に行って手を洗って私と姉さんが寝る部屋に行った。

〜フェイトとアリシアの部屋〜

〜side なのは〜

私はフェイトちゃんとアリシアちゃんの家にお邪魔して今部屋に居るの。優人君は怪我で学校を休んでるの。私はフェイトちゃんと

アリシアちゃんと共にこの間の敵について話し合ってる。

「フェイトちゃん、あの魔導師達訳がありそうだね。」

「うん、何か理由があつて襲ってきたのかもしれないし。」

「フェイトくあのね、フェイトが襲われたって情報が来たときにママがデバイスもつて大暴れ仕掛けたんだよ。」

「え？」

「うそ…」

「ほんとだよ。」

アリシアちゃんはえへへと笑つてたけど怖い。ちよつとお兄ちゃんに通じてるものがあつたりして。フェイトちゃんは完全に苦笑いしてたの。

「フェイトちゃん、特訓しよう!!」

「うん、次に会つたときには勝てる様に。」

「じゃあ棒を持ってくるね。」

アリシアちゃんが部屋からでたの。というか棒なんてあるんだ…

「フェイトちゃんの家には棒あるんだ。」

思わず口に出たの。そしたら

「うん、一応特訓の為にね。」

「へえ…」

そしてドアが開いて、アリシアちゃんが

「棒を持ってきたよ。」二人とも特訓は程々につまママとリンディさんが言つてたよ。」

それを聞いて私とフェイトちゃんは苦笑いしたの。そしてフェイトちゃんは立つて棒を掴んで

「じゃあなのは行こう？」

「うん!!」

私も棒を掴んでフェイトちゃんの後に着いてつたの。その後は帰るまで特訓をしてたの。

くくアースラ メンテナンスルームくく

ここには先の戦闘により大破した二つのデバイスがある。その名

はレイジングハートとバルデイツシュだ。一応の修理は終わって今最終チェックが始まっている。そして彼等は思い出す。自分達が何も出来ずに自分達のマスターが無残に負けた事を彼等は最後のメンテナンスの部分でエラーを出した。とある注文もつけて。もしかしたら自分達が壊れてしまうかもしれないのに。そうその注文は『CVK-792を含むシステムを組み込んで下さい。』

お願いします』

第28話 リベンジと鍋

前回の纏め

イノベイド達に敗北した次の日斉藤優人はイノベイド達との戦闘に備えて対策を練った。一方高町なのは、フェイトテスタロッサも負けをはいしたが特訓を始めるのだった。

〓三日後〓

〓〓街〓

〓〓side 優人〓

俺は今結界の前にいる。この結界のなかにはシグナム、ザフィラ、ヴィータがいる。そして狙われてるのはリンディとプレシアだ。だが俺はイノベイドがこの中にいることを感じとり突入する所だ。

「CB、セットアップ。今回はダブルオーライザーセブンソード／Gだ。」

『了解 Set up』

俺はダブルオーライザーセブンソード／Gになった。(ダブルオーセブンソード／Gの形をそのままにオーライザーを後ろにつけている状態。GNドライブについてるバスターソード等がなくなったらオーライザーのバインダーが自動でつけられる。ちなみにGNソードIIは普通のまま)

俺はそのまま結界に突入した。

〓〓結界〓

〓〓side 優人〓

俺は結界に突入した瞬間GNソードIIプラスターを構えてとあるビルに撃った。したらイノベイド達がでてきた。今回はガデッサ一機、ガラッゾが二機そしてエンプラスが一機だ。俺はGNバスターソードを構えた。そしてヒリングが

「へえ〜生きてたんだ。」

「まあな。だが今回は遅れをとらないさ。」

「ふっ…よく言う。ならば我々の連携を見破ってみよ!!」

奴等は一斉にきた。俺は左手にバスターソード、右手にGNソードⅡブラスターを構えてガラツゾに突入した。まずバスターソードで右手のサーベルを受け止めたあと左手をブラスターで吹き飛ばした。そしてつけた。

「く…この…」

この声はブリングだ。エンプラスが大型ビーム砲からビームをだした。俺はGNバスターソードⅡをシールドモードにしてビームを受け止めた。

「なっ…ビームを受け止めた!?!」

この声はデヴァインだな。俺はバスターソードを構えてエンプラスに突撃した。エンプラスはエグナーウィップを出したが俺はGNソードⅡブラスターで尻ぎ払った。そしてエンプラスはGNフィールドを出したが俺は構わずにGNバスターソードⅡを刺した。そしてフィールド内でGNソードⅡブラスターを構えてバスターソードⅡに向けて撃った。バスターソードはエンプラスをも巻き込み爆発した。

「デヴァイン!!」

ブリングが叫んだ。空いたGNドライブの所にオーライザーのバインダーがマウントされた。ちなみに両方だ。

「貴様あ!!」

ブリングは右手しかないがビームサーベルを展開してきた。俺はGNソードⅡブラスターを捨てて、GNソードⅡを取り出した。そしてサーベルモードにして切り結んだ。俺はガラツゾの右手を蹴りあげた。

「なっ…」

ブリングは驚いていたがこの際関係はない。右手に持ってたGNソードⅡをまず右手に刺した。そして左手のGNソードⅡをガラツゾの心臓部分に刺した。そして刺した状態でサーベルモードにして倒した。俺は爆発したのを見届けて後ろを向いたら残りの二機は撤

退してた。そして

「さすがは最強のイノベーター斉藤優人。」

「なっどこから…!」

俺は声ができる方を向いたらビームが飛んできた。

「どこにいる!!」

「ここだよ。」

声が出た方に向いたそしたら白い機体が実体剣を持って切りかかってきたから俺はGNソードIIをソードモードにして切り結んだ。

「貴様は?」

「私はラウ・ル・クルーゼだ。さすがは斉藤優人だね。そしてさよならだ。」

俺は蹴られた。そして奴はバルカンを撃ってきた。

「そんな攻撃!!」

俺は回避してまた切り結んだ。その時

「時間か…」

「何?」

「また会おう。」

俺は蹴られた。そして右から緑色の光が見えた。遂にそれは爆発した。

(音爆弾みたいなものであり閃光弾でもあるのか。)

クルーゼは撤退していた。結界も解かれてる。

「逃げたか…。CB解除だ。」

『了解。』

～～～数時間後～～～

～～～斉藤家 玄関～～～

～～～side 優人～～～

「用はその守護騎士とやらと交戦して捕らえろってことか。」

『そうだ。質問は?』

「いや、ないがイノベイドがまた表れた。」

『イノベイドが?』

「ああ、そしてラウ・ル・クルーゼとやらもでてきた。」

『ラウ・ル・クルーゼ!? そうかラウ　ル　クルーゼについてはこちらで調べる。』

「すまない。こちらでもヴェーダで調べる。わかり次第連絡してくれ。こちらもする。」

『分かった。』

クロノからの連絡がきれた。さっきのは闇の書の捕獲とか言っていたが俺はそんなことはしない。だつて見て見ぬふりをしているから。そしてイノベイドとラウ・ル・クルーゼ。イノベイド達はなんとか倒せるが問題はクルーゼだ。奴が単体でいるわけがない。きつとシヤアアズナブルと同じように何かを企んでいるはずだ。

「細かいのは後にしよう。先に飯かな。」

俺はリビングのドアを開けた。

〜リビング〜

〜side　優人〜

「またせたな。」

「遅いで〜優人君。」

「もう始めてますよ。」

「悪い今座る。」

俺はイスに座った。今回の夜ご飯は鍋だ。ほんとには皆で食べる予定だったがシヤマル、シグナム、ヴィータ、ザファイラは急に夜ご飯が食べれなくなったと連絡してきたから俺とはやてとりニスとセシアで鍋を楽しんでる。少しあいつらに申し訳ないが楽しむか。そう思ってたなら、はやてが

「優人〜ちゃんと食べとる? はい。」

「そう言いながら肉を渡してきた。」

「ありがとう、はやて。」

俺は肉を食べた。やはり冬には鍋だな。そう思った。

「セシア、そのしらたきとって。」

「はい。どうぞ。」

「ありがとう。」

俺はしらたきを受け取った。そして豆腐を箸で掴んでおわんに入れた。そして豆腐を少し箸できつて口に運んだ。少し熱いな。

「リニス、キャベツが足りないから足して。」

「はい。これですね。」

「ああ。というかりニスお前鍋平気か？」

「ふーふーすれば平気ですよ。」

「そうか。それなら大丈夫だな。」

リニスは山猫だから心配だったがその必要はなかったようだ。俺達は鍋をたのしんだ。シグナム達はいつ帰ってくるのやら。

第29話

予兆と図書館

前回の纏め

イノベイド達と再度交戦した斉藤優人はイノベイドを二人倒した。そしてラウ・ル・クルーゼなる人物と一度交戦した。その夜優人は八神はやて、リニス、セシアアウエアと鍋をするのだった。

〳〳次の日〳〳

〳〳斉藤家　リビング〳〳

〳〳side　優人〳〳

俺がは起きてリビングに下りた。そしたらシグナム達が居た。

「おはよう。今帰って来たのか？」

そう言ったらシグナムが

「ああ、シヤマルが先に帰って来ていたが少し遅れた。」

「そうか。というかはやてに何か言われると思うぞ。」

「そうだが…」

「まあ、俺がなんか口添えしとくよ。」

「ありがとう。」

その瞬間二階から何か物音が聞こえた。

「なんだ？とにかく行こう!!」

俺は走って二階に向かった。シグナム達も俺に続いた。

〳〳はやての部屋〳〳

〳〳side　優人〳〳

俺達がはやての部屋に来たとき既にセシアとリニスがいた。

「リニス!!はやては？」

「はい。急に苦しみ出しました。」

「分かった。早く病院へ…」

俺は携帯を取り出して病院に連絡した。

くくアースラ ブリツジくく

くくside 優人くく

俺も病院へ行こうとしたらアースラから連絡が、きたのでアースラに来た。ちなみに学校はしばらく怪我の療養ということで休んでる。俺はブリツジに来た。クロノが

「来たか、」

「ああ。で何の様だ？」

「ラウ・ル・クルーゼについて調べが終わったからその報告を。エイミー画像を」

「はくい。」

画像が出てきたそこには金髪のロングヘアの男が出てきた。そしてクロノは

「ラウ・ル・クルーゼは故ユーレン・ヒビキの遺伝子を元に造られた人間だ。」

「ということはフェイトと似たもんか？」

「ああ。だが…」

「それだけじゃないわ。」

エリスが来た。そして

「クロノ、ここからは私に任せて？」

「分かった。」

「ラウ・ル・クルーゼは故ユーレン・ヒビキのクローンとして生まれたのはまだよかったの。けど彼はテロメアを服用しなければ自分の老化が防げない出来損ないの人間になったの。」

「そうか。」

「これを見たユーレン・ヒビキはクルーゼを出来損ないと呼んで挙げ句の果てには暴力まで振ったわ。けどその数日後クルーゼはユーレン・ヒビキの家に放火して逃げ出したわ。」

「そんなことが…」

「ええ、そしてクルーゼが使っていたモビルスーツ、あれは元々管理局が今私が使ってるトルネードガンダムを基礎に作り上げた結構初期

のモビルスーツなのよ。」

クロノが俺にディスクを渡してきた。

「これは？」

「これはクルーゼが使っていたモビルスーツシグーのデータだ。目を通しといてくれ。」

「了解だ。エリス。」

「何かしら？」

「ありがとう。助かったよ、君がいて良かった。」

「ど、どういたしまして…べ、別に構わないわよ…」

エリスは顔を赤くしていた…何故？エリスの顔を見た俺は熱を出したのかと思い、

「熱でもあるのか？」

そう言っておでこを離したら

「な…な…な…」

顔を更に赤くしていた。熱はなかった

「熱はないのか…良かった。」

そう言っておでこを離したら

「うう…」

エリスは走ってどこかに行った。クロノが

「ほんと君は鈍感だな。」

「どういうことだ？それは。」

「後で分かるさ。エリスにかわって言うけど次の戦闘からはエリスも参戦する。トルネードガンダムにかわってフェニックスガンダムというものを使うとか。」

「了解だ。では帰らせてもらうな。」

「ああ。」

俺はブリッジをでて転送ポートまで向かった。そして自宅まで転送した。

くく夕方くく

〃〃図書館〃〃

〃〃side 優人〃〃

俺はセシアとリニス、シヤマルに昼御飯を作った後図書館に来ていた。何故かという量子型演算処理システムをもう1つ作る為だ。ヴェーダは完全に俺のものだし、それならもう1つ作ればいいと思っただから来ている。だから俺は工学の本の所にいる。

「この本も良さそうだな。あとこれも。これもだな。」

俺は目に留まった物を重ねていった。そしたら結構な高さまで上がった。

「増えたから少し目を通して必要のないものだけ戻そう。」

俺は目を通して必要のないものだけを本棚に戻したら四冊まで減った。そして工学の所から出たら聞いたことがある声が聞こえた。

「もしかして優人君？」

「ん？」

俺は振り向いたらそこには月村すずかが居た。

「やっぱり優人君だ!!」

「久しぶりだな、すずか。」

「うん。」

「積もる話もあると思うから座ろう。」

俺とすずかはイスに座った。そしてすずかが

「怪我はもう平気なの？」

「まあな。明日にはこれるよ。」

「良かった。アリサちゃんもなのはちゃんも心配してたよ？」

「そうか。それは申し訳ないな。」

「そういえばその本達は何？」

「こいつらは量子型演算の論理の本とかだよ。」

「見して。」

俺は一冊すずかに渡した。すずかは目を通したが

「うう〜難しすぎるよ〜。分かる所はあるけど…」

「少し分かるだけでもいいだろ。最近は何かあったか？」

「うん、明日にはなのはちゃん達にも話そうと思うんだけど今ね私の

友達が入院してるのだからクリスマスイブの時にプレゼントを渡したいな〜って。」

「面白そうだから手伝うよ。」

「ありがとう。」

「もう図書館が閉まる時間か。俺はこいつらを借りてくるから。」

「うん、少し待ってるね。」

俺は本を借りてすずかの居る所に向かった。そして

「すずか一人で帰れるか？」

「うん、大丈夫。」

「分かった。また誘拐されないように気を付けてくれよ。」

「うん、また明日学校でね。」

「ああ。また明日。」

俺は本を持って家に向かった。クリスマスプレゼントか：何にしようか。多分だがすずか達は纏めて渡すに決まってるだろうな。俺からの個人のプレゼントを渡すか。というか性別聞いてないな。まあ明日聞くか。

第30話 プレゼントの用意とクリスマス

前回の纏め

ヴォルケンズが全員帰ってきた日の朝八神はやては倒れた。斉藤優人は病院へ連絡して行こうとしたらアースラから呼び出しをくらった。そしてクロノハラオウン、エリスクロードからラウ・ル・クルーゼについて話された。そして図書館で月村すずかと会う。すずかは入院してる友達の為にプレゼントを用意したいと優人にいった。そして優人はそれを了承したのだった。

〃〃次の日〃〃

〃〃学校 教室〃〃

〃〃side 優人〃〃

「おはよ。」

俺は教室に入ってそう言って自分の席に座った。そしてすずか、アリサ、フェイト、アリシア、なのはが俺の席の周りに集まってきた。フェイトが

「もう平気なの？」

「ああ。完治した。」

「良かった。」

「フェイトちゃん、そわそわしてたもんね。」

「そういうのはだっていつ来るのかなってずっと言ってたじゃん。」「うっ…」

「落ち着きなさい。二人とも。」

「そうだよ。とにかく優人が来て良かったじゃん。」

アリシアはそう言って俺に引っ付いてきた。よく分からないからとにかく撫でた。

「ん〜、やっぱりママのもだけど優人のなでなでも安心するね〜。」

そう言ってグリグリ頭を押し付けてきた。すずかが

「優人君、昨日話した件なんだけど…」

「わかってる。候補は上がってるのか？」

そう聞いたらアリサが

「そうね。私達でなんとか買える物を選んでるわ。例えば花とか。」

「そういえば入院してる人って女か？」

「うん。」

「そうか。」

「何か考えてるの？」

「まあ、俺個人からの贈り物でもしようかと。」

「ずるいよ。それ。」

フェイトが頬を膨らませて言った。俺はフェイトの頭に手をのせて

「安心しろ。お前達にもちやんとやるさ。」

「それは本当なの？」

「まあな。ここまで仲良くしてくれたからな。まあお礼でもあるな。」

「楽しみにしてるわよ。」

「楽しみにしとけよ。アリサ。」

ちようどチャイムがなったので俺達は席に座った。

　　〳〳数日後〳〳

　　〳〳クリスマス〳〳

　　〳〳病院　　病室〳〳

　　〳〳side　　優人〳〳

さて俺となのは、フェイト、アリシア、すずか、アリサはすずかの友人が居る病室の前までに来たんだが妙に見覚えがあるのだ。まあ気のせいだろう。すずかがドアをノックして

「はやてちゃん、入るね。」

そう言った。はやて…まさか…俺達はすずかに続いて病室の中にはいった。やはり考えとは当たりやすいな。やっぱはやてだった。

「あつ…すずかちゃん。あれ？今日は友人の友人が入院してる病院へ行くってきいたけど…優人？」

「まあな。それがお前だよ、はやて。とにかくメリークリスマス。」

「私達もメリークリスマス!!」

「さすが達はクリスマスプレゼントをはやての前に出した。」

「わぁ〜おおきにな。」

「これは俺からだ。はやて。」

「俺は小さい箱を渡した。」

「これは?」

「開けてみるといいさ。」

「はやては箱を開けた。そこには十字架のネックレスが入っていた。」

「おおきに。きれいやなく。」

「はやて、つけてやるよ。貸してみ。」

「俺ははやてからネックレスを受け取るとはやての後ろからネックレスをつけた。はやてはとても嬉しそうな顔をしていた。その時ドアが開いた。ヴォルケンスか…。」

「はやてー来たよー。」

「ヴィータの声がした今回はザフィーラ以外は皆いる。シャマルが」

「優人君来てたんですね?」

「まあな。」

「そう言った瞬間なのは、フェイト、シグナム、シャマル、ヴィータの間の空気が膠着した。そしてヴィータは俺とはやての所にきて手を広げていた。完全に敵意を丸出しだ。すずかもアリスも不思議そうにみっていた。そしてはやてがほんでヴィータを叩いた。」

「いてっ…」

「失礼やろ。ヴィータ。」

「だってはやてえ!!」

「とにかくダメやろ。御免なのはちゃん、フェイトちゃん。」

「いいよ。大丈夫。」

「なんでこんなにピリピリしているのだろうか。まあいいか。とうか念話が出来ない。おれはシャマルの所に向かって」

「シャマル、お前念話にジャミングかけてるだろ。」

「よく分かりましたね。そうですよ。」

「解いてもらうのは無理か？」

「御免なさい。無理ですね。優人君とは違う局の魔導師がいますから。」

「フェイトとなのはの事か。まさかあいつらから蒐集したのか。」

「はい。」

「だからか…。」

俺は頭を悩ました。これは後で大変な事が起きると思うから。

〃〃病院 屋上〃〃

〃〃side 優人〃〃

「すずかとアリサ、そしてアリシアもこの場から離れたそして俺達は屋上に行った。なんでもシグナムとシャマル、ヴィータはなのはとフェイト、アルフを襲ったとか。俺はシャマルに頼んでリニスをとんでもらった。裏死海文書を持たせて。そして闇の書は例えページを全部うめても駄目だとなのはは言った。その時ヴィータがラケーテンハンマーでなのはを吹き飛ばした。俺はイノベイドが此処に居ることを察知した。そして

「CB、セットアップ。今回はダブルオーライザー、GNソードⅡ、GNソードⅢ持ちでな。」

『了解。Set up』

俺はダブルオーライザーになって空を飛んでイノベイドが居る所にGNマイクロミサイルを飛ばした。そしてその場が爆発してイノベイドが出てきた。ガラツゾとガデツサだ。ガデツサが

「よく分かりましたね。」

「まあな。貴様らと何度も戦っていれば何処にいるか位予想がつく。」

「へえー。だけでもうこれで終わりだよ。」

「望むところだ。ダブルオーライザー。」

「ガラツゾ。」

「ガデツサ。」

「斉藤優人。」

「ヒリング・ケア」

「リヴァイヴ・リバイバル。」

「目標を…」

「斉藤優人を…」

「駆逐する!!」

「殺らせてもらうよ!!」

「破壊させていただく。」

俺達は同時に加速して最後の戦いに望んだ。

第31話 決着と闇の書の闇

前回の纏め

久しぶりに学校に来た斉藤優人は高町なのは、フェイトテストロッサ、アリシアテストアロッサ、アリサバニングス、月村すずかと話し合う。その数日後優人達はすずかの友達が入院してる病院へ行った。その友人は八神はやてだった。そしてプレゼントを渡した後、ヴォルケンズが来た。なのは、フェイトとの空気は一触即発に近かったがさすがに戦いはしなかったそして屋上に来た時ヴィータがなのはを吹き飛ばして戦いが始まる。一方優人もイノベイドを見つけて戦い始めるのだった。

くく街くく

くくside 優人くく

俺はイノベイドの二人と交戦してる。この二人はコンビネーションが巧く自分達の欠点をカバーしあってるだが俺も負けじとGNソードIIをくっつけて回転させることによりGNメガランチャーのビームを防いだ。そして俺はGNソードIIIをソードモードにしてガラツゾと切り結んだ。

「さすがだね!!だけど…」

ガラツゾは俺の左腕を掴んだ。

「何!?!」

「リヴァイヴ!!」

「まさか…」

俺は動こうとしたがガラツゾが離さない。ちつ…どうする!?

「なら…」

俺はGNマイクロミサイルをガラツゾに放った。そしてガラツゾに命中した。

「きゃっ…」

「今だ!!」

俺はガラツゾを蹴り飛ばしてメガランチャーを避けた。

「なっ…」

俺はガデツサに向かい、GNソードIIを回転させてメガランチャーを切って破壊した。そしてGNソードIIIをライフルモードにして右腕を切り取った。

「何!？」

「ハアアアアアっ!!」

ガラツゾがサーベルを展開して襲い掛かって来た。俺はGNソードIIの両刃からビームサーベルを出して受け止めた。そしてGNソードIIIをソードモードにして右腕、右足を切り落とした。

「くっ…この」

俺はGNソードIIの片方を腰につけてもう片方は左手に持ち、ガラツゾの顔面を切り飛ばした。そして心臓部分にさしてビームサーベルを内部で展開してそのままビルに突き落とした。そしてガラツゾは爆発した。その時病院の所で大きな光が起きた。

「なんだ…あれは…」

「あれは…闇の書の闇。だがその前にヒリングの仇!!」

ガデツサがバルカンを撃ちながら接近してきた。俺は残ったGNソードIIを掴んでライフルモードにして迎撃した。ガデツサは俺に近付きビームサーベルを出した。俺は咄嗟にGNソードIIをソードモードにしてなんとか受け止めた。

「何!？」

「次は…俺の番。」

俺はGNソードIIIをソードモードにしてガデツサの左腕を切り落とした。そしてGNソードIIのビームサーベルを展開して心臓部分に突き刺した。そしてGNソードIIIをライフルモードにしてGNバルカンと共に一斉に撃つてガデツサを撃墜した。

「これで終わりだ。さてさっきの所へ向かわなければ。」

俺は光がした所に向かった。その場でも戦闘は始まっていた。というか周りから火柱がたってるし。

くく街くく

くくside

優人くく

俺は戦闘がある場所についた瞬間GNマイクロミサイルを飛ばした。そして銀髪の女に直撃した。俺はなのはとフェイトの所に向かった。

「お前ら大丈夫か？」

「優人：うん。なんとか。」

「大丈夫なの。」

「そうか：俺はあの女と戦う。少し下がっていてくれ。」

「わかった。気を付けて。」

「うん。頑張つてね。」

俺は飛んで女の所に向かった。そして女の前に立って、

「お前は：誰だ？」

「私は闇の書：」

「はやてとヴォルケンスは何処だ？」

「我が主は私の中に：ヴォルケンリッターは消滅した。」

「なっ…」

「そして君も…」

女はダガーを作り、俺に放とうとしたが

「ならば：取り戻す!!」

俺はGNマイクロミサイルを放ってダガーと相討ちにした。そしてGNソードⅢをソードモードにして切りかかったが女の左腕の槍みたいな物で受け止められた。

「ちっ…」

俺は女を蹴り飛ばして GNソードⅢをライフルモードにしてGNバルカンと共に一斉に撃った。女は回避したが俺はそれを追った。そしてまた斬撃、そして斬撃さらに斬撃と切り結んだ。

「我が主は君を傷つけたくはないんだ。だから…」

「そうか。だけどこれは聞かせてもらう。何故お前は泣いている。」

「！これは主の涙だ。」

「そんなんじや納得はしない。お前は辛いんじやないのか？」

「違う！これは…」

「言い訳を聞きたい訳じゃない!!」

俺は女を蹴り飛ばした。その時リニスが来て、

「お待たせしました。裏死海文書です!!受け取ってください!!」

リニスが裏死海文書を投げたから俺はキャッチした。そして

「CB、裏死海文書を閉まってくれ。」

『了解。』

裏死海文書はしまわれた。俺はGNソードⅢをソードモードにして女に向かった。女は魔法陣を展開した。

「くっ…」

「甘い!!」

俺は更に加速した。そして魔法陣をメリメリと破った。

「なっ…」

「此処は俺の距離だ!!」

俺はGNソードⅢのビームサーベルを展開して女を切った。女の服が切った部分だけ破けた。

「くっ…」

女は左手の槍を俺に向けたが俺はGNソードⅢをソードモードにして受け止めた。

「この槍重いな…だが…!」

俺はマイクロミサイルを飛ばしてミサイルをバルカンで撃って女の目の前で爆発させた。そして煙からでてGNソードⅢをソードモードにして槍を切り裂いた。

「なっ…ナハトヴアールが!!」

「今だ!!」

俺はトランザムを発動して進んだ。マイクロミサイルとバルカンを牽制として使った。

「くっ…早い!!」

俺は一気に接近してGNソードⅢを振りかざして切った。そして女は槍を盾として使ったが更に槍は罅がはいった。

「もう一撃!!」

俺はビームサーベルを出して縦に切った。女の服が切られた部分だけ焼けた。

「何故そこまで…何故!?!」

「俺はただ家族を取り戻す…それだけだ。それにお前も家族だからな間違えは正す!!」

俺はGNソードⅢをソードモードにして突撃したが魔法陣に塞がれた。そして自分の肉体が粒子の粉と化してるのに気づいた。

「何!?!」

「もういいんだ。だから…もう永遠の眠りについてくれ。」

「くっ…」

「優人君!?!」

「優人!?!」

「優人!?!」

なのは、フェイト、リニスの声が聞こえたが俺は完全に粒子の粉になった。

第32話

話し合いとブラストカラミティと脱出

前回の纏め

ヒリング・ケア、リヴァイヴ・リバイバルと交戦して勝った斉藤優人。優人はそのあと高町なのは、フェイトテストタロツサを助けて闇の書の闇と交戦して追い詰めるが粒子の粉となり、消えてった。

〃〃空間〃〃

〃〃side 優人〃〃

「此処は…何処だ？」

俺は確か闇の書の闇と戦ってその最中に粒子の粉となったんだ。

「此処は闇の書の中の空間だ。」

俺は声ができる方に向いたそこには…

「貴方は…ロックオン・ストラトス。兄貴の方か？」

「ああ。俺はお前に聞きに来た。」

「何を？」

「お前は何故この世界を救いたいと思う？そして何故前の世界も救いたいと思った？」

「それは分からない…だがそうだとするならば俺はこの世界も前の世界も好きだから…好きだったからこそ守りたいと思ったんだ。」

「あるじゃないか。君にはちゃんとした理由が…。」

「アレルヤ・ハプティズム。」

「君には守ろうとした理由がある。そうそれはきつと僕達がそれぞれ抱えた理想と同じに近いんだろうね。」

「そうか。俺はこれはただの思いだと思ってた…だけど…」

「だが君にはそれを貫き通せるか？喩え世界から見放されようとも世界から疎まれても…」

「ティエリア・アーデ」

「答えてもらいたい。」

「それは難しいと思う。だから俺はその思いをねじ曲げてしまうかもしれない。だけど俺はねじ曲げてでも思いを貫き通してみたい。」

「そうか。お前は切り開くんだな。その思いで未来を…」

「刹那・F・セイエイ。」

俺は刹那を見た。

「そうだろ?」

「ああ、だけど空間の中にいる貴方達は一体?」

刹那が

「希望だ。」

「希望?」

「そう俺達はお前の理想に近いものでもある。」

「そう祈りと共にな。」

「だがそれは見せかけなんだ。自分勝手な思いでもある。そんなものは直ぐにへし折られる。皆、思いも理由も考えきれないと感じる。だけど…俺はこの世界が好きだから…その気持ちは…きつと本当だと思っから…。」

その瞬間ロックオン、アレルヤ、ティエリア、刹那は消えた。俺はCBに

「CB、裏死海文書を出してくれ。」

『了解。』

裏死海文書が出てきた。俺は

「管理者権限発動。管理人格綾波レイ。来い。」

綾波レイが出てきた。

「マスター。」

「綾波。早速だけどユニゾンインだ。できるか?」

「ええ。ちゃんと。」

「わかった。綾波レイ。ユニゾンイン!!」

俺と綾波はユニゾンした。髪の毛は銀髪で目は金色となっている。

「CB、そのままセットアップだ。機体はダブルオーライザーGNソードⅢ両手持ちだ。」

『了解、Set up』

俺はダブルオーライザーとなった。そしてトランザムが発動した。これはただのトランザムじゃない。

「トランザムバースト…。」

俺はGNソードⅢをソードモードにして縦に切った。

〃〃時間は遡り〃〃

〃〃海〃〃

〃〃side　　なのは〃〃

優人君が消えて、私とフェイトちゃんトリニスさんの3人で戦ってたけどリニスさんは少し用意があるといっていなくなったから私とフェイトちゃんまで戦ってたの。そして海の所でフェイトちゃんが少し気絶しちゃって、私は今A・C・Sドライブを発動して女の人に突っ込んだ!!そして何度も何度も岩にぶつかってそして遂に岩にぶつかってたけど岩を突破はしなかった。そして女の人の防御をカートリッジ四回リロードして遂に破って

「まさか…!」

「シュート!!」

爆発したの。私の左腕の部分のバリアジャケットは破れた。

「これでも無傷だったら…」

そして女の人は無傷だったの。

「でも諦めない!!行くよレイジングハート!!」

『yes』

女の人に立ち向かったけど吹き飛ばされるわ、無数の魔法弾をくらうわの繰り返しだったの。そしてチェーンバインドでぐるぐる巻きにされて、更に吊るされたの。女の人はずっともなくてかい槍を出して

「沈めええええええ!!」

落としてきたの!!

「あ!!」

私は絶望したのでも落ちてくる前に何かに槍は切られて真っ二つに沈んだの。それを切ったのはフェイトちゃんだったの。

「フェイトちゃん!!」

「ごめんね…なのは。」

「ううん!!ありがとうございます!!」

その時女の人の左腕の部分にいた蛇が暴れだしたの。そして

『そこにいる人分かりますか!?!』

私とフェイトちゃんは顔を見合わせて

「はやてちゃん!?!」

「はやて!?!」

『女の人に絡まっとするその蛇を吹き飛ばしてください!!』

そう言ったの。そして連絡が来てそれは

「ユーノ君!!」

『なのは、フェイト!!』

「ユーノ、この状態はどうすればいい?」

『この状態で意識を保ってるのは珍しい。だから吹き飛ばして!!手加減なしの、全力で!!』

通信が切れた。私とフェイトちゃんはデバイスを構えて

「さすが、ユーノ君!!」

「教え方が旨い!!」

『『全くです。』』

「中距離殲滅コンビネーション!!」

「ブラスト…カラミティ!!」

「ファイア!!」

私とフェイトちゃんはデバイスを女の人に向けて撃った!!そのあとは周りの魔力弾をぶつけたの。そして光が走ったの。そしてそこから光が走ったの。光が消えたら騎士達が全員いたの。そして真ん中にははやてちゃんがいたの。

~~~~~ side はやて~~~~~

私とリインフォースは闇の書から脱出して騎士達を復活させたんや。そして私はデバイスを掲げて

「リインフォース、ユニゾンイン!!」

私とリインフォースはユニゾンしたんや。そしたら私の髪の毛はクリーム色となり目は水色っぽくなった。私と騎士達は近くの岩に

降りたんや。そしてヴィータが

「あの…はやて…」

「すみません。」

「その…はやてちゃん…」

私は

「いいんや。取りあえずは…」

私は笑顔でてを広げて

「お帰り!!」

ヴィータが泣き始めて…

「うう…ひつく…はやて…はやてええ!!」

抱きついたんや。私も抱きつき返した。皆笑ったんや。なのはちゃん達も降りてきたんや。そしたら

「良いところをすまない。」

黒い人と金髪の人とりに降りてきたんや。

「時空管理局クロノ・ハラオウンだ。」

「同じく時空管理局エリス・クロードよ。」

クロノっていう人が指をとある所に指して

「あれは闇の書の防衛プログラムで間違いないだろうか？」

私は頷いて

「うん、闇の書の防衛プログラムナハトヴァール。」

そしたらリインフォースが出てきて

『ナハトは周辺の物を取り込みどんどん大きくなっている。』

クロノっていう人が

「対策は一応持っている…」

デバイスを出したんや。そしてエリスっていう人も変身したんや。

そこには前に優人君が言ってたガンダムがいた。

「だが協力者は多い方がいい。手伝って貰えないだろうか？」

そう言ったんや。私達は頷いた。そしてエリスっていう人が

「そういえば優人は？」

そう言った瞬間周りの空気が固まったんや。そしてなのはちゃん

「確か闇の書に取り込まれたんだよ!!」

全員が動こうとした時ナハトヴァールの所から虹色の光が出てきたんや。

〃〃side 優人〃〃

俺はなんとか脱出ができた。そして俺は

「CB、GNドライブ最大!!」

『了解。』

GNドライブは大きく広がった。そうこの周辺全部をまきこんだ。俺はこの状態でなのは達の所に向かった。

### 第33話 決戦!! ナハトヴァール そしてトラン ザムライザー

#### 前回の纏め

闇の書の空間でロックオン・ストラトス、アレルヤ・ハプティズム、テイエリア・アーデ、刹那・F・セイエイと話して決意した斉藤優人。そして裏死海文書の管制人格綾波レイとユニゾンインをして脱出をする。時は少し遡り高町なのはとフェイトテスタロッサは闇の書の闇と交戦して倒す。そして八神はやたとヴォルケンズが脱出する。そしてクロノ・ハラオウン、エリス・クロード達も参戦するのだった。

〜海上〜

〜side 優人〜

俺は今なのは達の所にいる。なのはが

「優人君…。」

「すまなかった。」

「うん。無事なだけ良かった。」

フェイトとなのはは少し涙目だったから俺は頭を撫でた。少し嬉しそうだった。

「優人」

「はやてか。良かった無事で。」

「うん。ラインフォースとユニゾンしとるし。」

「ラインフォース？」

「うん。闇の書の管制人格さんや。」

「名前をつけたんだな。」

「うん。どうやろうか？」

「いい名前だよ。」

「おおきに。」

その時はやての横に小さい女の人が出てきた。

『君は…』

「お前がリインフォースか。よろしくな。」

『ああ。だが恨まないのか？私を…』

「なんで家族を恨む必要があるんだ？」

『ありがとう。そういえば私の欠陥部分が直ってきているのだがわかるか？』

「それは後で話すよ。クロノ。」

「ああ…手順は…」

そしてナハトヴアールを倒す説明を受けているが…

「少し待ってくれ。」

俺はクロノに言った。

「なんだ？」

「最後の止めは俺に任せてくれないか？」

「だが…」

「ちやんと考えてあるさ。もし駄目だったらその策を使えばいい。」

「わかった。」

そして始まった。まずは、ユーノはケイジングサークル、アルフはチェーンバインド、リニスもチェーンバインド、そしてザファイラは鋼の軛をかけて闇の書の防衛プログラムナハトヴアールを捕獲したがチェーンバインド、鋼の軛が全て破壊された。そしてナハトヴアールはビームを俺達に向けて撃つてきたが俺達は避けた。そしてシヤマルが

「ヴィータちゃんとなのはちゃん、お願いね!!」

なのはとヴィータがナハトヴアールに向かった。ナハトヴアールはビームを撃つていたがあいつらは避けていた。そしてヴィータがなのはになにかを言った。なのはは嬉しそうに頷いていた。そしてヴィータはカートリッジをしてグラーフアイゼンを大きくしていた。なのはもカートリッジをしてデイバインシユーターを放っていた。そしてそれらはヴィータが通る道に存在するナハトヴアールの触手を全て潰していたもちろんビーム同士をぶつけて消したりとか。そしてヴィータは更にアイゼンを大きくして

「轟天…爆砕!!」

そのまま

「ギガント…シユラアアアアク!!」

ナハトヴァールに向けて落とした。ナハトヴァールの防御層は三つあったがひとつ目が割れてナハトヴァールは海にめりこんだ。シヤマルが

「次、シグナムとフェイトちゃん!!」

フェイトとシグナムがナハトヴァールのビームをよけながら合流した。そしてフェイトは自分が持っている大型剣の斬撃を飛ばしてシグナムとは向かい側についた。シグナムはレヴァンティンを弓に変えてフェイトは電撃を貯めてそして

「駆けよ!!隼!!」

シグナムは矢を放ってフェイトは大型剣を更に大きくしてその大型剣を振り落とした。そしてバリアは碎けてナハトヴァールの後ろ足が碎けた。

『グアアアアアアアアアアアッ!!』

奴は雄叫びを上げて空に飛んで複合バリアを展開した。俺はザフィーラに

「ザフィーラ、一枚目を頼む!!」

「ああ!!」

ザフィーラは頷いてパンチで一枚目を破壊した。俺はGNソードⅢを両方ソードモードにして更にサーベルモードにして縦に切った。そして追い討ちでGNマイクロミサイルをぶつけた。複合バリアは全て碎けた。シヤマルが

「はやてちゃん!!」

俺はナハトヴァールから離脱した。そして上空でははやてが杖を構えて

「彼方より来たれ、やどりぎの木」

『銀月の槍となりて、撃ち貫け』

ラインフォースも言った。上空で槍が出てきてそしてはやてとりインフォースは

『石化の槍、ミストルティン!!』



槍を落とした。ナハトヴァールにその槍が刺さっていつてナハトヴァールは石化して海に落ちた。これでいいのか：と思ったがナハトヴァールが復活した。そしてまずエリスがファンネルらしきものを飛ばして触手を潰した後そのガンダムが変形して炎を纏ってナハトヴァールに突撃した。そしてナハトヴァールの周りにリフレクターが来た。そしてクロノが

「凍てつけ!!」

『エターナルコフィン』

クロノが持つている杖から氷のビームが出てきて海面を凍らせながらナハトヴァールに当たった。そして直撃したビームはリフレクターに当たってナハトヴァールに集中した。そしてクロノは髪の毛などが少し凍っていた。そして俺を見て、

「優人!!後を頼む!!」

「了解。」

俺はナハトヴァールの上に来て

「CB、GNドライブ最大放出。トランザムライザーで決める。」

『了解。トランザムバーストもまだ続いており更にユニゾンもしているので更に強くできます。』

「出てきたコアは裏死海文書が吸収する。」

俺は両手に持っているGNソードⅢをソードモードにしたまま上にあげ、そして手首の部分を変形させて更に放出できるようにした。(劇場版ガンダム00の劇中映画のダブルオーライザーのトランザムライザーの状態なもの)

「一気に決める：トランザム：バースト：ライザアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

GNソードⅢと手首の部分から大型のビームを出してそのままナハトヴァールに振り落とした。トランザムバーストライザーはナハトヴァールに直撃した。

「うおおおおおおおっ!!」

ダブルオーの目とへの部分が赤くなった瞬間に更にビームが大型化した。そしてナハトヴァールのコア以外を全て吹き飛ばした。俺

もトランザムバーストライザーが終了した瞬間に裏死海文書を出してコアを吸収した。俺はGNソードⅢは左手の方を戻した。

「これでいいか……」

その時リジエネから通信が来た。

『優人、地球の軌道付近に何かを感じる。どうする?』

「ソレスタルビーイングの大型ビームをその何かの部分に撃つてくれ。俺も直ぐに向かう。後ジンクスⅥを全機を出してくれ。」

『分かった。』

通信が切れた。俺はトランザムを出したまま加速して宇宙に向かった。

くくアースラくく

※此処は三人称になります。

「地球の軌道状に大型の反応があります!!」

アレックスが叫んだ。そしてリンディが少し焦ったがランディが

「これは……もう一つから大型の反応があります!!」

そして映像ではビームとビームがぶつかって大爆発を起こした。

そしてそこからは大量のモビルスーツが出てきた。そしてそれらは激突した。

第34話      ガンダムVSガンダム      ラウ・ル・クルーゼと斉藤優人

前回の纏め

闇の書の防衛プログラムナハトヴァールと交戦した斉藤優人、高町なのは、フェイトテスタロッサ、八神はやたとヴォルケンス、クロノハラオウン、エリスクロード、ユーノ、アルフ、リニス。優人はトランザムバーストライザーを放ってナハトヴァールを倒すがリジエネレジェッタから通信が来て宇宙に向かう。そして宇宙では大型ビームがぶつかり、更にモビルスーツが戦闘を始めたのだった。

〜地球軌道上〜

〜side 優人〜

俺はリジエネから通信が来た後宇宙に上がったそこで見たのはリンクスと他のモビルスーツが戦っている所だった。俺はダブルオーライザーの状態のまま進んだ。GNソードIIIを右手に持ち、GNソードIIを二つ腰につけた。ちなみにトランザムは終了した。まず、1つ目の機体に向けてGNソードIIIをライフルモードにして心臓部分にうった。その機体は爆発した。そして俺は敵のモビルスーツが来ている方を見た。そこには大型の要塞と先が尖っている物体があった。俺はリジエネに通信をした。

『どうした？優人。』

「リジエネ、俺の予想だが大型の要塞の隣にある尖っている物体がビームを放った物だとおもう。だからそこに攻撃を集中させよう。」  
『分かった。』

リジエネは通信を切った。俺はGNソードIIIをライフルモードのままにしてGNマイクロミサイルを飛ばして敵のモビルスーツを撃破していった。そして敵が実体剣で襲い掛かってきたから俺はGNソードIIIをソードモードにして受け止めた。そして空いてる左手にGNソードIIを掴んでソードモードにして切り裂いた。ちょうど敵

の腰と体の部分に刺さったので敵は爆発した。そして俺は進んだ。その時リジエネから

『優人、あの尖っている物体から高エネルギー反応がある。だからこっちも撃つよ。』

「頼む。」

俺はソレスタルビーイングの大型ビーム砲の射線上から離れたそしてまたビーム同士がぶつかって大爆発を起こした。俺は敵の大型ビーム砲に向かった。そして塞がってくる敵を切って切って切って切りまくった。そしてちょうど大型ビーム砲の近くに接近したときビームが所々から飛んできた。俺は全て回避した。

「何処からだ…？」

そう言った時通信が来た。

『さすがは最高のイノベーター斉藤優人。まさかこのビームを全て避けるとはな。』

「何処だ…こいつは…！」

俺は上を見た。そこには

「ガン…ダム」

がいた。俺そのかガンダムに聞いた。

「お前はラウ・ル・クルーゼか!？」

『当たり前だよ。』

ガンダムに乗っているのはラウ・ル・クルーゼだった。俺はGNソードⅢをソードモードにしてクルーゼに切りかかったが奴は左腕に付いてるでつかいシールドからビームサーベルを出して受け止めてきた。

「くっ…」

『この程度か…？』

俺はクルーゼに蹴られて距離を取られた。そして奴はファンネルらしきものを出してビームを放ってきた。俺は必死に回避してファンネルを一つ破壊したがクルーゼもビームを放ってきた。俺は全ての方向のビームを避けるのに必死だった。その時ファンネルらしきもののビームがGNソードⅢのビームを撃つ部分に直撃したことに

よりGNソードⅢが爆破した。

「くっ…まさかやられるとはな…。」

俺は右手に腰についてるGNソードⅡを持った。左手にも持とうとしたが左手はファンネルらしきもののビームに破壊された。

「くそ…」

俺はGNマイクロミサイルをクルーゼに放ったがクルーゼはビームのカーテンを張ったからミサイルは全て破壊された。だが

「今しかない…。」

俺はGNソードⅡをソードモードにして爆風から出てきてクルーゼの左腕を切った。

『ほう…！』

「答えろ、ラウ・ル・クルーゼ、貴様は何故こんな事をするんだ!？」

『私はこの腐った世界を変える!!この世界を…私を虐げたこの世界を!!』

〜数十年前〜

〜第26管理世界 プラント〜

※此処は三人称になります。

『こんなのが私のクローンか…。』

その少年はとある男の細胞によって生まれたクローン。だがテロメアを服用しなければ老化は止まらない。その少年の名はラウ・ル・クルーゼその少年の素体となった男の名はユーレン・ヒビキ。ラウ・ル・クルーゼは完全のクローンとして生まれるものだと思われていたがそれはむりだった。その事によりクルーゼはヒビキの家では

『出来損ないが、』

『なんて醜い子供なんでしょう。』

『最悪。こんなのがヒビキ様のクローンなんて。』

『こいつは生まれてこなければよかったんだ。』

『こんなのさっさと殺そうぜ。』

『やめとけよ。そんなことしたらヒビキ様に怒られるぜ。出来損ないでも使えるから取っというてるんだろ。お前は使えなければすぐに殺

「されているんだよ。」

「お前なんか消えればいいのに。」

「なんでお前なんだ。」

「なんでお前がヒビキ様のクローンなんだ。」

「早く居なくなれよ。」

「消えろ。」

「早く死ね。」

「消えろ。」

「早く死ね。」

「消えろ。」

「早く死ね。」

ヒビキの家の使用人達にも出来損ないとして扱われたクルーゼは、ずっと耐えていたがある日とある者がクルーゼのテロメアを隠して、奴の老化の顔を見たとき

『化け物が…！』

『こんなのがこの家に居るなんて…！』

『やだ…私こんな所にいるの怖い…。』

『こんな奴が居るから…！』

更に虐げられた。そしてクルーゼは遂にヒビキの家にある財産を全て奪い、そしてヒビキの家を防火した。それによりユーレン・ヒビキの家は消化活動を行われたが全焼。更に使用人、ヒビキ本人など全員の焼死体が発見された…ただ一人、クルーゼを除いて…

～～地球圏軌道上～～

～～side 優人～～

「そんなことで…！」

俺は認めない。絶対に…

「確かにそんなことをされれば世界を憎むかも知れない…だが関係のない人まで巻き込むのは…！」

俺はクルーゼに切りかかったが奴は回避した。そしてファンネルらしきものからビームを撃ってきたが俺は全て回避した。

『関係のない…？関係はあるさ…！自分のやったことは間違いではないと信じ、分からねと逃げ、知らず、聞かず…！その果てにできた私だ。ならば私はこの世界を裁く義務がある。そして滅ぶ人は…滅ぶべくしてな!!』

「そんなことさせるか!!」

俺はGNソードIIをライフルモードにしてファンネルらしきものをどんどんと破壊していった。

『ならば止めてみる…！すでにジェネシスは地球の海鳴に向けて発射態勢に入ってるそれに表面上には特殊な装甲を施してるから破壊はできまい!!すでに私の勝ちだよ…！斉藤優人、こんな世界は守る価値はないんだよ。』

「だが…それでも…」

俺はGNソードIIをくつつけてツインランスの状態にしてビームサーベルを発生させてクルーゼに突撃した。

「それでも…俺は!!守りたい世界があるんだ!!」

ビームサーベルをクルーゼに向けて切ったが奴の右腕しか切れなかったが俺はトランザムを発生させて一気に接近した。クルーゼは残ったファンネルらしきものを俺に向けて撃ってきた俺は量子化をしなかつたから顔面と右胸を破壊された。そして

「うおおおおおおおおお!!」

クルーゼの腹の部分に刺した。俺は

「CB、ジェネシスの心臓部分は!？」

『そのままつすぐ突っ込んで下さい!!』

俺はトランザムを発動したままジェネシスの内部に突撃した。クルーゼは既に息絶えていたが俺は気にせずジェネシスの心臓部分にクルーゼが突き刺さったままGNソードIIを刺した。そして脱出した。そしてジェネシスは大きく爆発してなくなった。俺はこの爆発に巻き込まれたが既に意識を失いかけていた。俺が完全に意識を失うまえに見たのは転移してアースラについた事だった。

## 第35話 戦いの後

### 前回の纏め

遂に地球軌道上にて優人のモビルスーツ達とラウ・ル・クルーゼのモビルスーツ達が激突する。クルーゼの目的は自分を造り上げたこの世界を自らの手で変える事だった。優人は左手を失いながらもこの世界を守りたいと言ってクルーゼを刺した。更にそのままクルーゼ側の大型ビーム砲のジェネシスも破壊する。優人は破壊した後気絶した。

くくアースラ食堂くく

くくside クロノくく

地上でのナハトヴァール戦が終わった瞬間優人は宇宙に行って沢山の敵と戦っていた。僕とアースラメンバーに守護騎士達なども見ている。そして優人はこのアースラに転移してきた。そして優人は左手、頭から血を流していたから病室に運ばれた。八神はやても疲労で寝ている。此処にはその二人を除いたメンバーがいる。そして僕は

「皆、優人が戦っていた人間の名はラウ・ル・クルーゼだ。彼は僕達管理局が所持していたモビルスーツを奪った。そして優人と戦って負けた男だ。こいつは危険人物であってやむを得ない時は殺してもよかったんだ。」

そう言った。その時皆は驚いていた。そして

「な…んだ皆…無事か…。」

優人が歩いてきた。しかも辛そうに。

「優人!!」

フェイトとなのはが優人によって優人を支えてイスに座らせた

「ありがとう。この話をするには後プレシアとアリシアも呼んでくれ。後はやて、リインフォースも呼んでくれ。」

優人はそう言った。

「分かった。だがプレシア女史は…」



「あつ…私が呼ぶね。」

フェイトが連絡した。

「主とリインフォースは私が呼ぼう。」

守護騎士の一人のシグナムが立ってはやて達がいる部屋に向かった。

〃〃数十分後〃〃

〃〃アースラ 食堂〃〃

〃〃side 優人〃〃

プレシアとアリシアそして目が覚めたはやてとリインフォースが来た。

「集まった…ははやて、もう平気なんだな？」

「うん。なんとか…」

「さてリインフォースがナハトヴァールとの戦いの前に俺に言ってきたよな。」

俺はリインフォースの方を向いた。

「ああ。闇の書改め夜天の書の欠陥部分そこが君、いや優人の出した光によって修復されていた。しかも夜天の書当時の姿に…」

「あの光はトランザムバーストと言うんだ。詳しくは分からない。CB分かるか？」

『ええ。代わりに説明しましょうか？』  
「頼む。」

俺は待機状態のCBを首から外した。ネックレスとなっているからすぐとれた。

『では初めまして。優人のデバイスのソレスタルビーイング改めCBです。みなさんが気になっているあの光、トランザムバーストの説明しましょう。トランザムバーストはトランザムと呼ばれるシステムを発動した時とある能力を用いる事により発動するシステムです。』

「その能力って？」

エリスが聞いた。

『ええ。我がマスター斉藤優人は人類の革新イノベーターとして覚醒

しております。その力を発動することによりトランザムバーストを発動できます。しかしこれを起こす為にはツインドライヴと呼ばれるシステムと連動する事させなければなりません。そしてそれと連動する事により純度を増したGN粒子が人々の意識を拡張させます。しかしあのときナハトヴァール戦ではそれとは違い貴方達をサポートをするという事になっていました。あのとき気づいたのでは？」

クロノが

「じゃああのとき魔力量が増えたと思ったのは…」

『そうです。我がマスターのトランザムバーストがあればこそです。そしてあのときはナハトヴァールの攻撃があんな単調だったのは我がマスターが脳量子波によって妨害をしたからです。そして夜天の書が修復されたのはGN粒子がその部分を治したからです。分かりましたか？』

「うん。優人がいたからあそこまで戦えたんだね。」

フェイトが頷いたそして他の皆もそれに続いた。クロノが

「さて次は君達守護騎士達についてだが…」

クロノがなにかを言おうとしたが俺が

「クロノ…俺はこいつらとすんでる。」

そう言った。そして皆が

『ええく!!』

うるさい。クロノが少し驚きながら

「じゃあ君は彼女の犯行を見て見ぬふりをしたのか？」

「いや見て見ぬふりなんて無理だな。俺はあのときイノベイドと戦って大怪我をおったし、更にそいつらとの対策やお前からの招集で色々な管理外世界にも行ったんだ。わかる訳ないだろう。それにお前からはただ闇の書が動き始めたから守護騎士達を捕獲しろとは言われたさ。だが俺はこいつらが人を襲ったなんて知らなかったし第一フェイト達がやられたなんて知らなかった。まあ俺に非が多少あるのは分かったが俺をどうするつもりだ？クロノ」

俺はクロノに聞いた。クロノはなんとも答えにくそうにしていたがリンデイが

「そうね。見て見ぬふりは確かに犯罪よ。だけど貴方はラウル・クルーゼの犯行を防いだ。だから不問に付すわ。そして貴方は現時点で二等空佐よ。」

「母さん!!」

「クロノ。彼が居なかったらこの船は落ちていたのよ。」

「どういう事ですか?」

なのはが聞いた。リンデイが一息つき、

「ナハトヴァール戦が終了した後、宇宙では大型ビームが飛んできたの。それを彼が同じ大型ビームで封殺したの。そして沢山のモビルスーツと戦ってラウル・クルーゼも倒したの。だから彼は沢山の命を救ったのよ、」

皆が驚いていた。俺は

「まあこの傷はその時のだ。」

「そうなんだ。」

フェイトが納得した顔をしていた。俺はリンデイを見て

「リンデイさん、守護騎士達はどうなりますか?」

「そうね。多分だけど管理局で奉仕活動などをさせられると思うわ。」

「そうか。ならいいか。」

俺は納得したがシグナムが

「しかし沢山の人を傷つけた我がここまで生きててよいのだろうか。」

そう言ったがはやてが

「何言つとるんや!!どんな世界でも生きてちやいけない命なんてあらへん。だから生きててええんや。」

そう言った。俺も

「そうだな。お前達は沢山の人を傷つけた。だがお前達はそれを糧として生きてる。しかし死んでしまえばそれはその人達を愚弄する事になる。」

シグナム達は納得した顔をしていた。

「そうだな。」

「じゃあ帰るか。」

俺はそう言った。皆は頷いた。

「リンデイさん、クロノ、エリス。俺達は帰るぞ。」

「ああ。今日は助かったよ。」

「ありがとうね。私達を助けてくれて。」

「気を付けてね。」

クロノ、リンデイ、エリスの順で言った。俺、はやて、リイン  
フォース、シグナム、シャマル、ヴェータ、ザフィーラ、なのは、フェ  
イト、アリシア、プレシアはそれぞれ帰路についた。俺はあることを  
思い出して

「そういえばはやて病院は？」

『あ……』

俺達は急いで病院に転移した。

## 第36話

### その後の話

#### アースラ中間報告書

闇の書事件が終結した。

加害者側であり被害者でもある闇の書の守護騎士シグナム、シャマル、ヴィータ、ザフィーラ、管制人格のラインフォースそしてその主の八神はやては管理局に裁判等の結果、管理局に入って奉仕活動をする事になった。ちなみに八神はやては少したってから正式に管理局に入る事になっているので今は囑託魔導師となっている。守護騎士とラインフォースはもう入っている。ちなみに彼等は斉藤優人の部下という事になっているが優人は部下になった守護騎士達に自分達が進みたいキャリアに進めと言った。

それによりザフィーラは囑託魔導師に近い物になった。

ヴィータは航空隊へと向かった。ちなみに教導資格を得る為に特別教導官エリスクロード一等空尉と切磋琢磨している。

シャマルは持ち前の治癒力で先生となっている。シャマルは優しさとすぐに傷を治したり正確な治療方法を教えたりしている事から「管理局最高の医者」と呼ばれている。が実はとある病気にかかった人にとてつもなくでかい注射器をぶっさしてファイナルオペレーション等とよく分からない単語を発していた。

シグナムは交替部隊に向かった。彼女は色々な部隊を渡り歩いている。後戦闘狂。その事もあってかよく所属している部隊の隊長や隊員と模擬戦をしているとか。ちなみに管理局で呼ばれている名は「戦闘狂の剣士」ちなみにこれを聞いた本人はどうでもよく思ってるらしい。そして海鳴の道場でも先生をしている。ちなみに警官にも教えられている。そこでの名は「姐さん」である。当の本人は困惑してるもよう。

そしてラインフォースは優人を支えたいらしく優人の部下としてやっている。最近では捜査官に入りたいらしく勉強をしている。ちなみに捜査官になっても優人を支えたいとか。そういう事もあってか

管理局では「救いの女神様」と呼ばれて何故か崇拜されてる。これに困った本人は優人に相談したが気にするなと言われたので気にしてないが少しは気にしてる模様。最近妹が欲しいとか

この守護騎士達と同居をしてそして見て見ぬふりをした齊藤優人は本当は咎められる筈だったが事件当時は致命傷をおったりラウル・クルーゼとの最終決戦でアースラや地球の命運を救ったり、ナハトヴァールを倒したり大活躍をしたことにより咎められるはず三等空佐から二等空佐に昇進した。が優人は地上に行きたいと言ったので地上行きとなったので二等陸佐となった。この後正式に挨拶に行くとか。最近執務官の勉強をしている。ちなみに任務にできれば成功が100%を記録している。そして色々な人に優しいので「管理局最強の人間」「慈悲が溢れる最強の人」等と呼ばれているが当の本人は気にしてない模様。

今回の事件で活躍した高町なのは、フェイトテスタロッサはもう少ししたら囑託魔導師から正式に管理局に入るとか。フェイトテスタロッサの姉アリシアテスタロッサも管理局に入る準備を行ってる。

アースラ艦長

リンデイハラオウン提督

〃〃1ヶ月後〃〃

〃〃齊藤家 訓練場〃〃

〃〃side 優人〃〃

はやてが無事に病院を退院した。その後守護騎士達の裁判があったが罰は奉仕活動となった。俺は地上本部に赴きその司令のレジアス・ゲイズに挨拶をした。レジアスは俺を受け入れた後二等陸佐に任命した。所属する部隊は後日知らせるとか。そして今ははやてとなのはが模擬戦を行ってる。はやては戦いかたが面白い一撃がでかいが近接では弱いらしい。がなのはが手加減しているとはいえないの

はを押している分ではさすがとしか言えない。そして今決着がついた。勿論なのは勝利だったがはやてに追い詰められていた。まあ面白い試合だった。今リインフォースがはやてに寄ってバリアジャケットを解除したはやてを支えて車椅子に座らせた。はやてが車椅子を卒業するのはもう少しらしい。

「ん？」

管理局から連絡が来た。

「レジアスとオーリスからか…」

どうやら俺の所属する部隊が決まった部隊はゼスト隊という所か…俺はレジアスに返信を送った。

「やてと…」

俺ははやて達の所に向かった。

〃〃数時間後〃〃

〃〃メンテナンスルーム〃〃

〃〃side 優人〃〃

今俺はセシアに呼ばれてメンテナンスルームにいる。セシアが

「優人、完成しましたよ。エクストリームガンダムtypeレオスが。」

「そうか。もらってもいいのか？」

するとセシアはブレスレットを出した。

「はい。元々は貴方専用のガンダムですから。今はエクリップスフェーズがありますが。今はアイオスフェーズの開発を行っています。近いうちに完成する予定です。」

「分かった。ありがとう。」

俺はブレスレットを受け取って腕につけた。どうやらこれがエクストリームガンダムの待機状態らしい。セシアが何かを思い出したらしく

「そうだ。ちなみにエクストリームガンダムはCBのガンダムと連動しています。後私がエクストリームガンダムに向けて通信などをすると思います。」

「分かった。では出るか。はやて達がご飯を用意して待つてるしな。」  
「はい。」

俺とセシアは部屋を出た。そして下に下りて夕御飯を食べた。久しぶりの皆でご飯だった。今までは色々欠けていたからな。

くく地球の真ん中くく

ここは地球の真ん中である。この地球と月にはとあるシステムがある。最近までそれを巡る戦いが存在した。それらの影響によりモビルスーツは世にでたのだ。そのシステムの名はジェネレーションシステム。管理者がいたがそいつはとある人物に敗北して今はとある生物となっている。そしてそのシステムを掌握している者がいる。その名は

コードア

メリアス

特性は…

裏切りのコード

ドである。

この者がこの後この世界に何をもちたらすかは分からない。だがこれだけは言える。

奴が一番危険だと…。リボンズアルマークやシャアアズナブル、ラウ・ル・クルーゼ以上にだ…



## GOD編

### 第37話

### 始動と任務と歌姫

くく地球の真ん中くく

ジエネレーションシステムが存在してる場所ではとある人物がいる。名はコードアメリカスである。

「ふふ…遂に整った。アプロディアを下しジエネレーションシステムをてに入れて遂に軍備は整った。これでならいける。だが後は」

コードアメリカスはとある人間を見た。そして口元を歪めて

「ふふっこの人間を倒せばいいのか。名は斉藤優人。世界のバランスを保つ者か…。」

アメリカスは動き始めた。ここには誰も居ないかと思われて居たがもう1つ居た。それは鳥の形をしていた。そしてその鳥は

「早く彼に知らせなければ…！」

そう言つて旅立った。

くく数日後くく

くくミッドチルダ 管理局地上本部 レジアスの部屋くく

くくside 優人くく

俺は所属する部隊が決まった。だから俺はその部隊の部隊長が待ってるレジアスの部屋の前まで来た。

「よし。」

俺は慣れてない服を着ていた。そして扉をノックして。

「失礼します。」

レジアスの部屋に入った。

「斉藤優人二等陸佐参りました。」

「ああ。そうか今日からか…ではゼスト頼む。」

「分かった。本日付けにより君の所属する部隊の隊長のゼスト・グラ  
ンガイツだ。」

「斉藤優人二等陸佐です。よろしくお願いします。」

俺はゼスト隊長に敬礼をした。

「では今から俺達の仕事場と仲間を紹介するからついてこい。」  
「了解。」

俺とゼスト隊長はレジアスの部屋を出た。

〃〃首都防衛隊 オフィス〃〃

〃〃side 優人〃〃

「着いたぞ。」

「ここが、首都防衛隊か…。」

「そうだ。よし少し待ってろ。」

ゼスト隊長はそう言って何処かに向かった。

〃〃三分後〃〃

〃〃side 優人〃〃

ゼスト隊長が連れてきたのはここにいる隊員達だった。

「優人。紹介を。」

「はっ。本日付けにより首都防衛隊に配属になりました斉藤優人二等陸佐です。よろしくお願ひします。」

俺はそう言って敬礼をした。他の皆も敬礼をして受け入れてくれた。そして女の人が出てきて

「私はクイント・ナカジマ。よろしくね。」

「はい。」

そしてゼスト隊長が出てきて

「早速で悪いが任務に出るぞ。優人出れるか？」

「いつでも出れます。」

「分かった。では行くぞ!!」

『はっ!!』

俺達は出撃場所へと向かった。

〃〃第14管理世界 プラント〃〃

〃〃side 優人〃〃

俺達は任務がある管理世界に着いた。俺は気になり隊長に

「隊長、今回の任務は？」

「ああ。今回の任務はとある要人の警護だ。」

クイントさんが

「誰ですか？その要人は」

「確か…」

そう言つて隊長はデータを見た。そして

「ラクス・クライン嬢だ。」

そう言つた瞬間他の隊員達がざわついた。何でだ？

「ゼスト隊長、ラクス・クラインとは？」

俺はそう聞いた。クイントが驚きながら

「貴方、ラクス・クラインの事知らないの!？」

「あいにく俺はそういうのを知らないの。ここに来る前は戦いの日々を追われていたので。」

「そうか。なら俺が説明しよう。ラクス・クラインはこの管理世界プラントでは一番人気の歌姫だ。プラントの最高議長シーゲル・クラインの娘でもある。」

「では我々が呼ばれたのは彼女が何処かに移動するからその警護をしろと？」

「そうだ。彼女はまだ10歳だ。」

「若いですね。まだ歌姫というより少女ですね。」

「だからだよ。あとこれからラクス・クライン嬢が待つてるホテルに向かうぞ。」

「了解です。」

俺達はラクス・クラインが待つホテルまで向かった。

〳〳ホテル星の扉 特別会議室〳〳

〳〳side 優人〳〳

全員では多すぎるということでゼスト隊長とクイントさん、そして地位が高く実力もあるということと俺も代表としてやってきた。そしてラクス・クラインが待つてる会議室の前についてゼスト隊長が扉の前に立つて

「失礼します。ラクス・クライン嬢の警護をしに来ました首都防衛隊です。」

そして入った。俺とクイントさんもそれに続いた。そこにはピンクの髪の女の子とマネージャーらしき人が居た。恐らくピンクの方がラクス・クラインだろう。そしてマネージャーが

「御苦労様。私はラクス・クラインのマネージャーのアンドリユーバルトフェルトだ。よろしく頼む。さて君達にお願いした警護ご事だが…」

「はい。」

バルトフェルトさんという人が何かを言おうとしたが俺を見た。

「ゼストさん彼は？」

「待つてください。優人紹介を。」

「了解。管理局地上本部首都防衛隊所属斉藤優人二等陸佐です。よろしくお願ひします。」

俺は敬礼をした。バルトフェルトさんは俺を見て

「ほう、彼が…。バルトフェルトだ。よろしくな。」

「はい。」

バルトフェルトさんが手を出してきたら俺も手を出して握手した。そしてバルトフェルトさんは

「では説明をします。最近ラクス・クライン嬢は何者かに狙われている。前はラウ・ル・クルーゼにも狙われていたしな。」

「ラウ・ル・クルーゼだって!？」

俺は驚いた。まさかこんな所で奴の事を聞くなんて知らなかったから。ゼスト隊長が

「知ってるのか？」

「闇の書事件のその後の戦いは知ってますか？」

「ああ、情報は見た。確かラウ・ル・クルーゼが地球に向けて大掛かりな事をしようとしたとか。」

「ええ。実はその戦い

俺が静めたんです。そしてラウ・ル・クルーゼを倒しました。」

「そうか…君がか…」

ゼスト隊長は納得していたが、他の皆は驚いていた。そしてバルトフェルトさんは

「ならばラウ・ル・クルーゼはもう出ないのだな？」

「ええ。彼の影に怯える必要はありません。」

「分かった。ではゼストさん後は頼みます。私はこの後やるがあるので。」

「分かりました。」

バルトフェルトさんは部屋を出た。そして俺達はラクス・クライン嬢に寄ってゼスト隊長が

「ラクス・クライン嬢ですね？」

「はい。私はラクス・クラインです。」

「貴方を警護する事になってる管理局地上本部所属首都防衛隊です。」

「はい。よろしくお願いします。あら？」

ラクス嬢は俺に気づいた。

「どうかしましたか？」

「そこにいる。男の子は？」

「ああ。優人もう一回自己紹介な。」

「了解。管理局地上本部首都防衛隊所属斉藤優人二等陸佐です。よろしくお願いします。」

「ラクス・クラインです。よろしくお願いします。所で貴方は何歳ですか？」

「今は九歳ですが。」

「私より一歳下ですね。ならば優人とお呼びしてもいいですか？」

「構いません。」

「分かりました。では私の事はラクスとお呼びください。」

「え？しかし…」

「お願いします。」

ラクスクラインは俺より少し背が下だから上目づかいをしてきた。俺は

「分かりました、ラクスこれでいいですか？」

「はい。後できれば敬語もなくして欲しいのですが…。」

「ラクスこれで構わないか？」

そう聞いたらラクスは花を咲かせたような満面の笑みを浮かべて

「はい!!」

そう言った。そしてゼスト隊長が

「では我々が今回のコンサート先までお送りします。」

「はい。お願いします。」

俺達は会議室を出てそしてホテルを出てホテルの扉前に用意した車に乗り込んだ。ちなみに俺はラクスの希望もあり本当は違う車両に乗り込むはずだったが彼女と同じ車両に乗った。

## 第38話 出会い

前回の纏め

遂に斉藤優人の所属する部隊が決まった。部隊の名は首都防衛隊である。そしてその部隊長はゼスト・グランガイツ。その後優人達はある要人の警護の為に第14管理世界プラントに向かう。その要人の名はラクス・クライン。プラントでは有名な歌姫だまマネージャーのアンドリユーバルトフェルトから話されたラクスを狙うもの達がいる。それらから守る為に優人達はラクスを警護するのだった。

〳〳第1管理世界 ミッドチルダ 管理局地上本部 首都防衛隊  
オフィス〳〳

〳〳side 優人〳〳

事件もなく無事にラクスを送り届けた。今俺はその報告書を書いてる。その報告書が書き終わりに差し掛かった時クイントさんがお茶をくれた。俺は

「ありがとうございます。」

クイントさんがいれたお茶を一口飲んだ。クイントさんは

「いいわよ。それよりあのとき言っていたラウ・ル・クルーゼを倒したって本当?。」

俺はお茶をもう一口飲んで答えた。

「はい。俺はクルーゼと戦ってそして倒しました。けど忘れられない…あのときあいつが言った言葉は…」

『自分のやったことは間違いでないと信じ、分からぬと逃げ、知らず、聞かず!!』

『こんな世界は守る価値なんてないんだよ。』

あのときはがむしゃらに近かったからあんまり分からなかったがあいつは…世界を恨んでた。深く、深く…な。

「人…優人君!!」

クイントさんが叫んだのではと覚ました。クイントさんは

「大丈夫？」

「ええ。大丈夫です。報告書終わったので提出して帰らせてもらいます。後お茶ありがとうございます。」

俺はお茶を飲み干して自分のデスクから立って報告書を持って部隊長の机に置いた。ゼスト隊長は

「ん？もう終わったのか？」

「はい。お疲れ様でした。」

ゼスト隊長は一通り報告書を見た。そして

「ああ。お疲れ様。」

そう言った。俺はオフィスから出て制服から普通の服に着替えて転送場所まで向かった。

くく地球 帰り道くく

くくside 優人くく

俺は転送場所から地球に向かってそして降りた。今は家に向かっている。俺は曲がり角に差し掛かったがその時誰かとぶつかった。そして尻餅をついたが俺は直ぐに立って尻餅をついてるもう一人の方に向かった。そこにはなのは似の女の子がいた。だが俺は

「すまない。大丈夫か？」

俺は手を差し出した。女の子は俺の手を掴んだ。

「いえ、大丈夫です。」

俺は手を引っ張って立たせた。そして俺は女の子に

「失礼だけど：君は？俺は斉藤優人だ。」

女の子はお嬢様見たいにスカートの裾を掴んだ。

「シユテル・デストラクターです。」

「なら、シユテルと呼ばせて貰うな。よろしくな。」

「はい。私も優人と呼びますので。」

俺はシユテルがバリアジャケットっぽいものを着ているからシユテルに

「そういえば君のその服は…」

その時空から



「どいてええええええ!!」

声がした。俺は上を見た。そしたら

「はっ?ぐわああ!!」

俺は上から降ってきた奴の下敷きになった。ELSと融合したお陰かそこまで痛くはなかったが。シュテルがなにかに気づいて

「貴方は…レヴィ…」

「あ、シュテルんだ♪」

俺の上にいる奴が嬉しそうに言っていたが俺は

「すまないが早く退いてくれ。」

シュテルも

「レヴィ、貴方は今人の上に座っています。退きなさい。」

「え?わわわわっ!!」

レヴィという奴は直ぐに退いてくれた。そして

「ごめん!!ごめん!!大丈夫?」

「ああ。なんとか大丈夫だ。」

俺はレヴィという奴をみたら今度はフェイト似の女の子だった。しかも水色の髪だ。

「君は?」

「僕?僕はレヴィ・ザ・スラッシュャーだよ。強くて凄くてカッコイイんだぞ!!」

「そ、そうか。俺は斉藤優人だ。よろしくな。」

「うん♪よろしくねユウユウ。」

「ん?まあいいか。さてシュテル達は何処かに行くのか?」

俺は聞いた。その瞬間誰かの腹の虫が鳴った。レヴィだった。レヴィは

「シュテルん、僕お腹すいたよ。」

シュテルが少し呆れ顔をしていた。

「レヴィ…」

俺はシュテル達に

「ならば俺の家に来るか?二人増えても大丈夫だと思うし。」

二人に提案した。そしてレヴィが目を輝かせて涎を滴かけていた。

「本当!？」

「レヴィ、涎を拭いて下さい。そうですね、行かせて貰います。」  
「分かった。少し待っていてくれ。」

俺は携帯を取り出してはやて達にメールで今日の夜ご飯に二人増えりと送った。そしてらはやてからOKの返事を貰った。俺は携帯をポケットにしまって

「よし。行くぞ。着いてこいよ。」

俺は家に向かった。シュテルとレヴィは俺に続いた。

〃〃齊藤家〃〃

〃〃side 優人〃〃

俺はシュテルとレヴィを家に連れてきた。そしてリビングのドアを開けた。そしてまずリニスが

「お帰りなさい優人。えーと彼女達が優人が言っていた?」

「ああ。茶髪がシュテルで水色の髪がレヴィだ。」

シュテルは俺に自己紹介した時とは違って頭を下げてレヴィは右腕を高く上げて

「シュテルです。」

「レヴィだよ。」

と自己紹介した。リニスも

「リニスです。よろしくお願いしますね。」

自己紹介した。俺はリニスに

「そういえばシグナム達は?」

「今日は、アースラで仕事やって。」

キッチンから声がした。そこにははやてがいた。

「ただいまはやて。」

「うん、お帰り♪もうすぐでご飯できるで。リニスさん、セシアを呼んできてくれへん?」

「わかりました。」

リニスは、リビングから出た。そしてはやては

「優人、ちよつと手伝って?」

「分かった。二人ともイスに座っててくれ。」

俺はそう言った。シュテルとレヴィは

「わかりました。」

「はーい!!」

そう言っつてイスに座った。俺はキッチンに向かつてはやてに

「何をすればいい?」

はやては

「今日はカレーやからお皿とスプーン出して?」

「分かった。」

俺は皿とスプーンを出した。俺ははやてに

「後は?」

「あの二人にどのくらい食べるか聞いといて?」

「分かった。」

俺はキッチンから顔を出してシュテルとレヴィに

「ご飯はどのくらい食べる?」

レヴィが

「僕大盛!!」

「私は普通で。」

「分かった。」

俺ははやてに

「シュテルが普通でレヴィが大盛だど。」

「分かった。ご飯ついでくれへん?」

俺はご飯をついだ。そしてカレーははやてがついだ。カレーを運んでる時にリニスとセシアが降りてきた。俺とはやてはイスに座った。そして俺達は

『いただきます。』

皆でいただきますをして食べた。レヴィが

「うまい、うまいぞ!!」

そう言っつてばくばくと食べていた。シュテルももくもくと食べていた。俺達も食べ始めた。

## 特別番外編その1

これは後に一つの伝説として語られる話である…。

この話は今から何百年も前の話。

ミッドチルダ式は存在しない時の世界。ベルカ式しかなかった時代の話である…。

そう数百年前…ベルカ時代は諸国の王達が統一を巡って戦いに明け暮れていた。人は何万と死んでいった。しかしそんな時代でも民は民衆はいつか終わりが来ると信じていた。

の時代の末期、聖王がオリヴィエの前の王になり霸王がクラウスの前の王になったときである。戦争は更に激化していった。そんなときに戦場では、とある噂が流れていた。国同士がぶつかりあうと何処からか現れて僅か数時間でその戦争を止めてしまうものがあると…

その者は各国でこう呼ばれる様になった

『介入者』と…

そしてこの国もその噂に目をつけていた。仲間にしようとする為に…

〃〃聖王連合 首都 聖王王国 王の間〃〃

「それは本当か？」

「はい。例の介入者が我が国の領土…しかも首都にいるという確定情報が入りました。」

「そうか。名は分かるのか？」

王は従者に聞いた。従者は紙を見て、

「はい、名は斉藤優人。黒髪に目は赤色です。この城にお呼びしますか？」

従者は王に聞いた。王は少し考えて

「うむ。呼んできてくれ。」

「分かりました。失礼します。」

従者は頭を下げたあと下がった。王は少し興味深そうに

「斉藤優人か…本当に介入者ならば…」

誰もいない王の間に声が響いた。

くく首都 街中くく

世の中は戦乱だというのにこの街は活気づいてる。それも戦乱などないと言わんばかりの活気さだ。そしてその街にはとある少年がいた。周りの人間と比べるとなんか場違いにしか見えない。がその少年も右手に焼き鳥左手にはりんごを持って楽しんでいた。少年はりんごを一口食べて

「この街はいいな。他の国とは全く違う。楽しそうに皆生きてる。こうあつて欲しいものだ。」

この少年は心から願った。そうこの少年こそが『介入者』斉藤優人なのだ。彼は諸国を渡り歩いている。そして今は聖王連合の首都にいるのだ。だが彼はこの後の事を知らない。彼は街中を進んだ。しかしその後ろから追いかけている人影が4つ居た。その者達は王の命を受けて彼を追っていた。一人の臣下が

「見つけたぞ。あいつか…」

もう一人が頷いた。そして

「そうだ。あれが斉藤優人。介入者だ。」

「では早速捕まえよう。」

臣下達は進んだ。斉藤優人と会うために。しかし彼等は知らなかった。彼斉藤優人は気まぐれで動いてる事が…

彼、優人はいつも思い立ったら行動を開始している。彼はとある屋台に目をつけて動いていた。彼等は後を追ったが人にぶつかる建物物の壁に激突するわで散々だった。そしてその五分後臣下達は優人を捕まえた。臣下の一人が

「斉藤優人だな？」

優人ら振り向いて

「そうだが…貴方達は？」

「失礼、我々は聖王の命を受けてやって来ました。斉藤優人、いえ介入者と言えばよろしいでしょうか？」

優人は目を細めて

「俺にどうしろと?」

臣下は

「何、我々と共に城に来ていただいてもよろしいでしょうか?」

「分かりました。」

「では着いてきて下さい。」

「了解した。」

臣下の後を着いてつた優人はこの後王に謁見するなど思ってもいなかった…。

くく城 王の間くく

優人は呆然としていた。まさか王の間に連れてこられたのだから…そして優人の目の前には王がいる。彼が今の聖王である。臣下は立て膝をついて左腕を後ろに回して右腕を前に回した。優人も臣下と同じ体勢をとった。王は

「ほう…。君が斉藤優人か?」

優人は

「はい。斉藤優人でございます。聖王陛下。」

「そうか…君は介入者で間違いないな?」

「はい。私が介入者です。しかしよく分かりましたね。」

「それはな、優秀な情報屋がいるからな。さて君にお願いがある。」

優人は首を傾げて

「なんででしょうか?」

「実はな私には一人娘がいてなその子の護衛兼世話を頼みたい。ちやうど君と同一年だな。よければ友人にもなってもらいたい。」

「分かりました。」

「そんな早く返事しても良かったのか?」

優人は少し苦笑いをして

「実はお金がなくなってきたよ。それに仕官しようかと思っていたので。後戦闘があるときは呼んで下さい。手伝います。」

王は

「ありがとう。では娘の部屋に連れてってあげてやれ。」

臣下は

「はっ…優人殿こちらへ…。」

臣下は優人を連れて王の間から出た。王は感心して  
「あの若さであの頭脳か…。」

くくオリヴィエの部屋くく

優人と臣下はオリヴィエの部屋の前に来た。臣下はドアをノック  
して

「失礼します。オリヴィエ様。」

そう言って入った。優人もそれに続いた。優人がみたのは金髪で  
オッドアイの女の子だった。その女の子は臣下の一人に

「御苦労様です。セルゲイ。」

そして女の子は優人を見て、

「彼は？」

臣下が

「優人、ごあいさつを」

優人は一歩前に出て

「始めまして。オリヴィエ様。今日から貴方の護衛兼世話を務める事  
になりました。斉藤優人です。よろしくお願ひします。」

優人は頭を下げた。そして臣下は

「貴方のお父上の命により彼が貴方の護衛兼世話をしますので用件が  
あれば彼にお申し付け下さい。」

そう言つて臣下は下がった。この部屋はオリヴィエと優人だけ  
になった。優人は

「オリヴィエ様。何かしますか？」

オリヴィエは優人を見て

「優人。最初のお願ひです。これからは私の事はヴィヴィと呼んで下  
さい。同い年みたいなので敬語もいりません。お願ひしますね。」

オリヴィエは微笑んだ。優人も少し笑つて

「分かったヴィヴィ。これでいいか？」

「はい。」

そこからの毎日は楽しそうだった。オリヴィエがシユトウラへ人質として送られた時も優人は着いてった。そこで優人とオリヴィエはクラウス・イングヴァルトと出会った。そしてその間に聖王が死去したことによりオリヴィエと優人は城に戻された。その後オリヴィエは聖王となつて優人も遂に戦場に出ることになった。

くくある戦場くく

オリヴィエの初陣である。オリヴィエは緊張していたがそこには優人と盟友となつたクラウスがいた。優人とクラウスはオリヴィエを落ち着かせた。そして優人が

「先陣は俺に行かせてくれないか？突破口を開く。」

クラウスは

「無茶だ!!いくら君でもこの軍の数はさすがに…」

だがオリヴィエは

「お願いしていいですか？優人。」

「ヴィヴィ!!」

「大丈夫ですよ、クラウス。彼は昔介入者と呼ばれてましたから。」

「介入者ってあの…聖王連合に入ったとは聞いてたけどまさか…君とはな…」

優人は申し訳なさそうに

「隠していてすまない。いつかは教えようと思つたのだが…」

クラウスは

「いいよ。今教えてくれただけでいいさ。なら僕は君に任せるよ。」

「了解した。ヴィヴィ、先陣をきらせて貰うぞ。」

そう言つて優人はこの場から離れた。クラウスはオリヴィエに

「まさか介入者が同じ年とはね。」

オリヴィエは満足そうに

「でしょう？でも今だと心強い方ですよ。」

くく戦場くく

優人は



「CB、ダブルオークアンタだ。行くぞ。」

『了解、Set up』

優人はダブルオークアンタになって戦場を駆けた。敵の持っている武器をGNソードビットで刻んでいった。そしてGNソードVで敵を斬っていった。その時

『マスター!!上です!!』

優人はGNソードVをバスターソードにして上からの攻撃を防いだ。

「くっ…」

「さすがは介入者か…。」

優人は切り払ったが敵は回避した。その敵が

「我は…スクイードなり!!介入者決闘を申し出る!!」

スクイードは持っていた大剣持ち直した。優人は片手でバスターソードを持ち直した。そして

「ふん!!」

スクイードは大剣で優人に斬りかかったが優人はこれを回避した。そして懐に切り込んだ。が

「む…」

スクイードは優人を思いつき蹴り飛ばした。

「ぐっ…」

優人はよろめいたが直ぐに持ち直した。そしてまた切り込んだ。そして大剣がバスターソードとぶつかる瞬間優人は

(今だ!!)

バスターソードを元に戻してソードビットで大剣を受け止めた。スクイードは驚いた。

「何?!そんな武器があるのか!!」

優人はソードビットを飛ばしてスクイードに斬りかかったスクイードは回避したがスクイードの予想以上にソードビットは動いた。スクイードは大剣を振り回してなんとかしていたが、遂に大剣の持ち手部分を壊された。そして優人が蹴り飛ばしてGNソードVをスクイードの前に出した。スクイードは

「私の負けか…。さあ切れ!!」

優人は

「嫌だ。俺は貴方を殺さない。」

「甘いな。私なら殺すぞ?」

「俺は貴方の戦い方を気に入った。だから俺達と来ないか? 聖王連合へ。」

スクイードは驚いた。

「私は国を攻める事しかないぞ?」

「だからだ。その力を俺達の為に奮ってほしい。頼む。」

スクイードは少し笑って

「分かった。頼む。」

「ありがとう。」

この戦いはオリヴィエ側の圧勝となった。なぜなら優人がその軍の力將スクイード・グルーヴを仲間にしたからだ。オリヴィエはスクイードを仲間にすることを承諾した。優人が敵側から誘った敵は60に昇る。その事により優人は聖王連合の英雄として崇められた。しかし聖王連合の他の将達はその力を危うい存在として見ていたが優人のカリスマとそしてその信頼感から優人を信じていった。それから優人はオリヴィエの次に偉い存在となっていた。オリヴィエはこれに満足していた。なぜなら優人の事が…

だがこの平穩も終わりを迎えようとしていた。それはとある者達の裏切りによって…

## 特別番外編その2

くく前回の話くく

時は凄く遡って古代ベルカ時代。戦争に明け暮れる日々の中一つの噂が流れる。僅か数時間で戦闘を止める者『介入者』がいると。聖王連合はその本人である斉藤優人を発見なんとか部下にした。そして優人はオリヴィエ・ゼーゲブレヒトの護衛兼世話をする事になった。それからクラウス・イングヴァルトと出会ったりした。その後オリヴィエが聖王になっての初陣の時優人はダブルオークアンタで相手の武器を破壊して相手の戦意を喪失させていった。しかしスクイード・グルーヴが優人に勝負を挑む。優人は少し圧されたが直ぐに圧倒して武器を破壊して勝った。そしてスクイードを仲間にしたのだった。

くく数年後くく

くく聖王連合 首都 城 王の間くく

ここには今斉藤優人と盟友のクラウス、そして玉座には聖王のオリヴィエがいた。彼等は今次の戦闘の話をしている。まず優人が

「この布陣は西の方にしたほうがいいのではないか？」

「しかしその場合はここがから空きとなってしまう。」

「そうか。なら半分は？」

クラウスは

「それなら大丈夫だと思う。」

オリヴィエが

「なら半分ずつここに布陣をひきましよう。」

優人とクラウスは頷いた。そしてオリヴィエが一息をついて

「そういえばこの三人でいるのも長いですね。」

優人が頷いて

「そうだな。もう何年だろうか…。俺がヴィヴィと出会ってそれからクラウスと会って。」

クラウスが少し笑って

「そうだな。この関係がいつまでも続けられればいいのにな。」

優人が

「確かにな。」

この後も三人は話し合った。だが外の世界は戦争に明け暮れている。そしてこの聖王の城でも何かが起こりようとしている。それは優人でさえもわからない。聖王連合の死亡者もそれはもう四桁は上回っている。悲しみとその死亡者達を殺したもたちへの怒りは交差している。そしてその怒りはオリヴィエへとどんどんと向かっている。聖王連合の中にはとある考えを持つてる者達がいるそれをオリヴィエ達は知らない。その結果は1年後…

「オリヴィエほつぺたにクッキーついてるぞ?」

「え?どこですか?」

クラウドは笑って

「ほんとだな。」

優人がとった。そして食べた。オリヴィエは顔を真っ赤にしたが優人は気付かなかった。

〜1年後〜

〜聖王連合 城〜

「準備はいいな?」

「はい。完了です。」

「では始めようか…オリヴィエを殺して新しい国を創る。」

その者は笑っていた。

〜王の間〜

ここにはオリヴィエしかない。優人とクラウドは買い物をして行っている。オリヴィエはいま考え事にふけていた。その時王の間の扉の前で大きな音がした。オリヴィエは

「何事ですか?」

その瞬間扉をぶち破り大量の兵がなだれ込んで来た。オリヴィエは驚いた。なぜなら見たことがある兵ばかりだからだ。それはこの国の一部がオリヴィエに対して反抗をとったからだ。その兵の真ん中から大将らしき人が出てきた。そいつは…

「セルゲイ・ウラジミール…」

オリヴィエに優人を紹介した人間であり優人とオリヴィエとクラウスを除けばこの国の中で一番強い。セルゲイは嘲笑して

「オリヴィエ・ゼーゲブレヒト。貴様には牢屋に入ってもらおう。」

オリヴィエは玉座から立って構えをとり

「何が目的ですか？セルゲイ。」

「貴様には分からなくていい。」

オリヴィエはセルゲイに殴りかかったがセルゲイはそれを避けて一撃でオリヴィエを気絶させた、セルゲイは

「オリヴィエを一番壊れにくい最下層の牢屋に入れる。始めるぞ。」

遂に始まる。

くく街くく

優人とクラウスは買い物を終えて城に帰ろうとした瞬間何か騒がしかったのでその場所に行った。そこには何か御触書があった。そこには

『我々は聖王オリヴィエ・ゼーゲブレヒトを捕らえた。』

そして新たな王を即位させる。聖王の時代は終わった。その手始めにまず斉藤優人とクラウス・イングヴァルトを捕らえよ。捕らえた者には国一国を上げよう。』

優人とクラウスは走ってその場から離れた。そしてその路地裏で

「どうする？クラウス。ヤバイぞ。」

「ああ。まさかヴィヴィが捕まるとは…」

二人が深刻な顔をしたときとある者が来た。そいつは…

「お前は…スクイードか。」

「優人とクラウスか…着いてきてくれないか？決して騙そうとしてる

訳じゃないから。」

優人とクラウスは顔を見合わせて頷いた。そしてスクイードについていった。

　　〳〵 廃墟になった酒場〳〵

スクイードの後についていった二人はこの場所に来た。スクイードは

「あの御触書はなセルゲイ・ウラジミールが出したものだ。噂では奴等1年も前から計画していたらしいがここにいる連中はそれを納得しないで集まった奴等だ。」

そこには一万とはいかないものの大軍勢がいた。優人とクラウスは驚いた。優人が

「なら、どうする？クラウスいい話はないか？」

「なら…」

そこからオリヴィエ救出作戦の話が始まった。そしてその1ヶ月後…

　　〳〵 1ヶ月後〳〵

　　〳〵 聖王連合 城〳〵

ここには準備をしてきた優人とクラウスが率いるレジスタンスがいる。そして優人の号令により遂に始まった。まず門番を一撃で気絶させて、城の制圧に入った。恐らくオリヴィエが捕らわれているであろう牢屋の鍵はセルゲイが持っていると思われるので優人はその確保に向かった。ちなみに敵となった兵はできるだけ殺さずに気絶させている。これはクラウスにも伝えられている。クラウスはというと重要な兵糧の部屋の確保と部屋の確保だ。優人はGNソードVだけを出して道を切り開いている。そして遂に王の間に入った。

　　〳〵 王の間〳〵

「遂に来たか…斉藤優人。」

玉座の前に立っていたセルゲイが振り返った。優人は

「セルゲイ…答える。何故だ何故俺達を裏切った!？」

セルゲイは

「我々はすでに聖王ではこの世界を統べる事ができないと思った。それに聖王のゆりかごなんてものを使った所で聖王が死ぬ始末。ならば我々が民衆を導けばいいと思った。だからだ。」

優人は少し間を置いてから

「確かに。だがなそうならない様に俺とクラウドがいる。オリヴィエだつてゆりかごは使用しないと云っている。いまの状況を見ても。今だつてどんどんと平和に向かっているだろ。なのに貴様は…」

セルゲイが

「そうかも知れないだかも遅い。私は貴様を殺す。そしてオリヴィエとクラウドスもだ!!」

セルゲイは自信の両腰についてる特殊な素材で作られた片手剣を両手に持った。俗に言う二刀流である。優人はダブルオークアンタになってGNソードVを構えた。そして両者の剣がぶつかった。まづ優人がGNソードVで剣を受け止めたが奴は二刀流を駆使してわき腹を狙ったが優人は腰をねじって回避したそしてセルゲイを蹴り飛ばした。

「くっ…やるな優人。」

「貴様もなセルゲイ。」

セルゲイは剣を一回鞘にしまって胸ポケットから何か薬を出した。そして飲んだ。その瞬間セルゲイは少し苦しんだ。そしてセルゲイは笑つてこつちに来た。一瞬でだ。しかし優人は

(速すぎる!!)

そしてソードビットを展開してセルゲイが剣で斬りかかってきたので受け止めた。優人は一旦セルゲイと距離を離してセルゲイに聞いた。

「セルゲイ、オリヴィエがはいつている牢屋の鍵を出せ。」

セルゲイは一つの鍵をポケットから出した。そして歪みの笑みを浮かべながら

「これか？私に勝てばいいだろう。」





立てはないだろう?」

優人はきれたそして一気に加速してセルゲイを蹴り飛ばした。

「ぐうううううっ!!」

セルゲイはそのまま壁に激突した。優人は怒りの声で

「貴様は必ず殺す。この俺が!!」

「それでいい。来い終わらせてやる!!」

優人とセルゲイはぶつかった。ソードビットを展開してセルゲイに斬りかかったがセルゲイは全て封じた。そして優人はGNソードVでセルゲイに斬りかかったそれにより左手に持っていた剣が吹き飛ばされた。セルゲイは舌打ちした

「ちっ…」

そして力一杯にセルゲイは優人を蹴り飛ばした。優人は直ぐに体制を立て直したがセルゲイに斬りかかられた。咄嗟にソードビットを展開したがソードが4つ破壊された。優人はGNソードVを腰にマウントしてソードビットを掴んで二刀流で戦った。だがセルゲイは片手でソードビットを掴んで握り潰した。だがセルゲイの左手は使えなくなった。身体能力が限界まで上がった所でソードビットは無傷では破壊できない。セルゲイはこの事に気付かなかった。優人は右手でセルゲイを殴ろうとした。セルゲイも生きている右手で殴ろうとした。そして拳と拳がぶつかった。どちらも五分五分だ。だが

「ぐうううううっ!!」

「はああああああっ!!」

優人が勝ってセルゲイの右手を潰した。そして残ってるソードビットをセルゲイの右足に刺して

「この馬鹿野郎がああああ!!」

殴り飛ばした。セルゲイはそのまま壁まで飛ばされた。優人はダブルオークアンタを解除した。にめり込まなかったがすでに瀕死に近かった。セルゲイは血を吐いて

「お前の勝ちだな…変わらん…お前は…」

優人は悲しそうに

「お前は どうして 変わったんだ… あんなに やさしくて 誰よりも 人思い だったお前が…」

「私は な… あんなに 死んで いく 兵士は… 見たく… なかった。 それに オリヴィエを 性処理として… 使おうとするのは 一部の 者さ… 私は 別に どうでも… 良かった… 死んで 者達を 報いる 事が 出来れば…」

「それを 言ってくれれば 良かったのに… お前は いつも だ… いつも 一人で 抱え込む。」

セルゲイは 血を 吐いて

「ごはっ!! そう… だな… だから か… 俺は… いつも 気づくのが… 遅すぎる… のか…」

「セルゲイ…」

「優人… オリヴィエの… 牢… 屋の… 鍵… はわ… たしの… 右の… ポケ…」

そう 言って セルゲイは 力尽きた。 優人は 一回 合掌した。 そして 鍵を 取り出して オリヴィエを 救出した。 オリヴィエは 優人に 抱き ついた。

「優人… 怖かった です…!」

優人は オリヴィエの 頭を 撫でて

「大丈夫 だよ。 オリヴィエ。」

これにより クーデターは 終了した。 このあと 捕らえられた 兵士は もう 一度 聖王連合の 兵士として やっている。 この クーデターの後 戦闘での 聖王連合の 兵士の 死亡率は 二割まで いった。 そして 聖王の ゆりかごが 出ないまま この 古代ベルカは 聖王によつて 平定された。 だが この最後の 戦闘を 期に 優人は 行方不明 となった。 だが 民衆は 優人の 健闘を 称えて こう 呼んだ…

王』と…

『鋼鉄の

くく更に数年後くく  
くく城くく

オリヴィエが一人で散歩に出ていた。オリヴィエは今までの事について思い出していた。優人は探しても見つからなかった。オリヴィエは

「優人は、何処にいるんでしょうか…私は…とても心配でたまりません…けど出来るならば…もう一度また会いたいです。優人…」

その時オリヴィエの向かう…先では何か変なホールができた。オリヴィエがそれに気付いて

「なんでしよう…これは？」

その瞬間オリヴィエはこのホールに吸い込まれた。

「キヤアアアアアアアアアアアツ!!」

オリヴィエを吸い込んだ瞬間ホールはその場からなくなった。このあと聖王連合では大騒ぎになった。クラウスもさすがに心配になった。がオリヴィエは死んではいなかった。何故なら…

### 第39話

### 話とまた出会い

〳〳前回の纏め〳〳

部隊に所属してからの初任務をこなして報告書を書き上げて家に向かっていた斉藤優人だったがその帰り道でなのは似の女の子と会う。その子の名はシュテル・デストラクター。そしてもう一人空から降ってきたフェイト似の女の子と会う。その子の名はレヴィ・ザ・スラッシャー。優人はその二人を家に連れてって八神はやて達と夕飯を食べるのだった。

〳〳斉藤家　リビング〳〳

〳〳side　優人〳〳

カレーを食べ終わって食器を片付け終わった俺達は椅子に座ってシュテルとレヴィに聞いた。俺が

「シュテル、君達は何故なのはとフェイトに似ているんだ？」

シュテルが一息ついて

「私とレヴィそしてここにはいない王、この三人は闇の書のマテリアルとしていました。」

俺ははやての方を向いて

「そうなのか？はやて。」

「私もわからんわ。」

レヴィが

「夜天の王がわからないのは当たり前だよ。だって僕達は夜天の書に乗っ取る為のプログラムだもん。」

「どういうことや？」

はやてがレヴィに聞いたがシュテルが

「それはですね…」

そうシュテルが言おうとした瞬間外の屋根から何か鈍い音がした俺は皆に

「俺が行ってくるから待っていてくれ。」

そう言つて外に出た。

〃〃齊藤家 庭〃〃

〃〃side 優人〃〃

屋根の所で音がしたから俺は外に出て、空を飛んで屋根を見たそこには金髪の女の子と碧銀の髪をした女の子が屋根の上に居た。というか気絶していた。

「なんでこんな所にいるんだ？まあ考えても仕方ないか…。」

俺は女の子を二人持ち上げたそして下に降りて家に連れてつた。

〃〃side ???〃〃

「うう…。」

私とアインハルトさんはトレーニング中に謎の穴に巻き込まれて…私は目を開けたそこは見たことがあるような部屋だった。確かここは…

「パパの家の部屋？」

私はアインハルトさんを起こした

「アインハルトさん、起きてください。」

「ううん、ヴィヴィオさんここは？」

「恐らく地球のパパの家の部屋かと…。」

その時ドアが開いた。そこには

「ちっちゃいパパ？」

「小さいヴィヴィオさんのお父さん？」

「お父さん？悪いが俺はまだ父親と呼ばれる年ではない。それに君達は誰だ？」

「え…。」

私は少し絶望した。けどアインハルトさんが

「すみませんがここは新暦何年ですか？」

「確か新暦65年かな」

「14年も前!？」

私はびっくりした。けどアインハルトさんも驚いていた。ちっちゃいパパが

「ということはお前たちは未来から来たわけか…。それより名前を聞かせてくれないか？」

私は

「えっと…斉藤ヴィヴィオです。」

「アインハルト・ストラトスです。」

「知っていると思うが斉藤優人だ。よろしくな。」

「はい。」

「よろしくね!!ちっちゃいパパ!!」

〃〃side

優人〃〃

まさか未来から来たやつが降ってくるとはな。しかも片方は俺の事をパパと呼んだし。俺は下に降りたそしてはやてが

「どうやった？」

「なんか未来から来た子だったよ。俺の事をパパって呼んでた。」

その瞬間空気が凍りついた。はやてが

「それ、もおちよい詳しく教えてくれへん？」

そう言った。リニスもセシアも笑ってるが目が笑ってない。シュ

テルとレヴィは少し戸惑ってるが。俺は

「いや、ちよつと待て。未来の事なんて俺はわからないぞ？だってそれしか聞いてないんだからな。」

そう言ったら凍りついたのが止まった。俺は内心ひやひやしていた。はやては

「ならそれで納得しとく。」

リニスとセシアも頷いていた。なんなんだ…一体。その後は俺達は寝た。シュテルとレヴィも俺の家に止まった。後ヴィヴィオとアインハルトも。

〃〃次の日〃〃

〃〃アースラ会議室〃〃

〃〃side 優人〃〃

俺はクロノに呼ばれてアースラに来た。何でも話したい事があるとか。俺は会議室に来た。そこにはクロノとエリスが居た。

「クロノ来たぞ。」

「あら優人久しぶり。」

「久しぶりだな。優人」

「ああ。で話したい事とは何だ？」

「これを見せてくれ。」

クロノはスクリーンを出した。そこには赤い髪の子とアルフが交戦している映像だった。

「クロノこれは？」

「これは先ほどフェイトから来たやつなんだがな。なんかアルフから聞いた話によると訳のわからない人だったとか。」

「そうか。」

その時警報がなった。俺は

「クロノ行かせて貰うぞ。」

「ああ。頼む。」

俺は走って転送場所に行って海鳴の海上に向かった。

〃〃海鳴市 海上〃〃

〃〃side 優人〃〃

俺は空を飛んでいた。そしてその時俺の目線の先にははやてといつものまにか地球にいたラインフォースとピンクの髪の子と先ほど映像で見た赤い髪の子とはやて似の子とシュテルとレヴィが居た。俺は高速で彼女等に接近した。俺は両手にGNピストルⅡを出した。そしてはやてが俺に気づいて

「優人。来たんやな？」

「ああ。しかしシュテル、レヴィ達は恐らくはやて似の子と合流したかったのか。」

「おーい優人」

レヴィが呑気に言っていた。俺は

「これはどういうことだ？シュテル。」

「すみません優人。しかし私達は王と会わなければいけないので。」

「そうか。」

俺は何かを感じた……この感じはまさか……俺はシユテルとレヴィソして二人が王と呼ぶ奴を悪いと思うが蹴り飛ばした。その瞬間俺は爆発に呑まれた。

〃〃side リンフォース〃〃

私と主はやて達が恐らく闇の書のマテリアル達と対峙した時優人が来たが彼はマテリアル達を蹴り飛ばした後爆発に呑まれた。

「優人!!」

主はやてが悲痛な声をあげた。私も心配した。だが優人はガンダムになっていた。しかし私は先に何処から狙われていたのかを推測していたが敵の方が来るのが早かった。

〃〃side 優人〃〃

俺は爆発に呑まれた瞬間ケルデイムになったからダメージは受けなかった。俺はGNスナイパーライフルⅡを構えた。そこにはガンダムの中でガンダムには見えないモビルスーツがいた。これからまた新たな闘いの幕が始まる瞬間だった。



## 第40話 新たな敵と来訪者

くく前回の纏めくく

シユテル・デストラクター、レヴィ・ザ・スラッシャーと話をしようとしたが齊藤家の屋根の上に誰かが落ちてきた。齊藤優人はその人物を回収。そしてそこには金髪の女の子と碧銀の髪の女の子がいた。金髪の女の子は齊藤ヴィヴィオと名乗った。碧銀の女の子はアインハルト・ストラトスと名乗った。そして次の日優人はクロノ・ハラウン、エリス・クロードらに呼ばれてアースラに行った。が警報がなった。そして優人は海鳴の海上に向かった。そして爆発に吞まれたがケルデイルガンダムになっていた。

くく海鳴 海上くく

くくside 優人くく

「ふう、レヴィ、シユテル、はやて似の女の子と逃げろ。はやてとりインフォースはアースラに戻れ。そのピンクの髪の女と赤い髪の女はここから逃げろ。」

俺はそう言った。ピンクの髪の女は

「ふざけないでよ!!それじゃ…」

俺は

「ここで死にたいなら止めない。だが生きたいならここから逃げろ!!」

俺はGNスナイパーライフルIIを肩にマウントして背中にあるGNビームピストルII取って敵にむけて撃った。そして加速した。俺はパツと見て周りを見渡した。

「敵はガンダムもどきか…数は30か…。」

GNビームピストルIIの銃口の下の部分がビームコーティングされてるから敵と切り結ぶ事ができるので俺はGNピストルIIの銃の部分を変形させて敵のビームサーベルと斬り結んだ。そして後ろにいた奴がビームを撃ってきたが俺は距離をとってよけた。俺はあることに気付いた

「奴等はビームライフルとビームサーベルしかないのようだな。」

そして俺はCBに指示をした。

「CB、後ろについてるシールドビット以外を展開しろ。4つだけだが」

『了解しました。』

シールドビットが展開された。今回は俺ではなくCBが操作している。敵はビームサーベルで斬りかかってきた。俺はGNビームピストルIIで受け止めたが敵はスラスターを思いっきり噴かせた為勢いが強く俺は押された。

「くっ…これじゃあ、じり貧だ…」

敵はビームサーベルを二本出して俺のGNビームピストルIIを真つ二つにした。

「なっ…い…」

そして敵は俺に向かってビームサーベルを振り落としてきた。

「しま…」

俺は敵のビームサーベルを避けたがもう一本のビームサーベルによって左腕を根こそぎ斬られた。

「くっ…うわっ!!」

後ろのブースター部分を破壊された。俺は腰についてるGNミサイルを飛ばそうとしたがビームサーベルで全部斬られた。

「これじゃあ…ぐっ…」

次は右足をビームライフルで吹き飛ばされた。そして敵は俺に斬りかかってきた。

「くっ…」

だが敵は上から来たビームに呑まれた。

「なっ…CB照合できるか？」

『これはGN粒子です。識別反応は味方です。機体は自分の目で確かめてみて下さい。』

俺は上をみたそこには…

「セラヴィーか？何故ここに…？」

そして通信が来た。そこには

「リジエネか？」

リジエネがうつつていた。

『久しぶりだね。優人。』

「ああ、そうだな、肉体を作ったのか…？」

『ああ、援護を頼めるか？』

「了解。」

俺は残ってるシールドビットを展開した。シールドビットで敵を撃ち落としてつつ俺は無事な右手でGNスナイパーライフルⅡを構えた。

「片腕だが狙い撃つ!!」

俺は片腕でスナイパーライフルⅡを撃った。そしてリジエネはセラヴィーのGNキャノン撃った。俺はリジエネに近付こうとしている敵を撃ち落としていった。そしてスナイパーライフルⅡで更に撃ち落とした。そしてリジエネがGNキャノンを一斉発射して敵は殲滅された。俺はGNスナイパーライフルⅡを肩にマウントして残ってるシールドビットを後ろにマウントしてリジエネに近付いた。リジエネは

「変わったなお前は…」

俺は少し笑い

「そう言うお前は変わらないな。」

リジエネも笑った

「ふっ…よく言われる。」

「そうか…アースラに一回戻ろうと思うお前も来るだろ？」

「ああ。」

「じゃあ…行こu」

その時俺はふらついた。リジエネが支えてくれた。

「すまない。」

「構わないさ。」

俺達はアースラに戻った。

くくアースラくく

side 優人

俺とリジエネはアースラに戻ったがリジエネはリンデイに連れいかれて直ぐに何処かにいった。俺は、はやて達がいる食堂に向かった。そこにはフェイトとなのは、ユーノ、アルフもいた。俺は左腕と右足に包帯をしている。ちようど長袖だからばれないだろう。

「はやて、リインフォース無事だったか…よかった。」  
なののが

「優人君、一緒にいた人は誰なの？」

フェイトも

「うん…気になる。」

「教えるよ。あいつはリジエネ・レジエツタ。俺にとっては最高の親友だ。」

そう言った。そしたらなのは達はなんか不機嫌な顔だった。何故？俺は

「そういえばなんでお前らはここに？」

「うん…実はねさつきとある人達を保護してねアースラに連れてきたの。でその人達は未来から来たつばいからリンデイさんのところに連れていったの。」

なのはが答えてくれた。俺ははやてに

「はやて、あの二人は？」

「うん、アースラに連れてきたからいるとおもうで。」

「そうか。」

そう言い終わった時食堂の入り口からリジエネ、ヴィヴィオ、アインハルト、それに茶髪の男と何色だ？あれとにかく何の色かは分からないがロングヘアーの女が来た。ちなみにこの二人は俺を見て

「斉藤元帥!？」

「元帥ちっちゃいよ、なんかかわいい。」

と言ったが俺はあえて無視した。そしてリジエネに

「リジエネ、何を話してたんだ？」

「ああ、管理局に入らないか？とか色々話してた。」

「そうか。入るのか？管理局には」

「まあね、君のサポートもしたいし。」

「そうか。」

その後リンディの紹介によりあの男と女の名前が分かった。男の名前はトーマ・アヴェニール、女はリリイ・シュトロゼックと言うらしい。これで未来から来た奴が四名とはね、驚きだ。そして俺は今回出てきた敵について説明したが俺が分かっているのは奴等の武装のみだ。名前も分からないからな。そして未来組は俺達の家に来る事になった。何故？リンディからの話によると未来組は俺達の家に来ることに慣れてるからだとか。まあいいか。ちなみにシグナム達も帰ってきていた。だから夜ご飯は豪華な鍋にした。皆楽しくたべた。未来組は空いてる部屋を使ってもらった。明日もシュテル、レヴィはやて似の女の子、そしてあの二人を探しに行く事なってる。もし敵ならば俺は倒すさ。

## 第41話 思いと破壊

〃〃前回の纏め〃〃

謎の敵と交戦した斉藤優人だが追い詰められる。しかしリジエネ・レジェッタの介入により助かる。そしてアースラに戻ってなのは達と話をする。そして新たな未来から来た奴等と会ったのだった。その新しい者達の名はトーマ・アヴェニールとリリイ・シュトロゼック。

〃〃次の日〃〃

〃〃アースラ〃〃

〃〃side 優人〃〃

俺は警報がなるまでアースラで休息をとることになっている。今回からはリニス、プレシアも参戦するとか。アリシアをどうするんだ？って聞いたたら俺に預かれと言ってきた。しばらく居なくなるからって。だから俺は今アリシアという。アリシアは技術部門に行くらしい。だから今勉強を教えている。

「……………って事だ。分かったか？アリシア。」

「うん。デバイスの直結回路の結びかたはEの回路に2の回路をつければいいんでしょ？」

「そうだ。さて、少し休むか。」

「うん。」

俺は机に置いてあったコーヒーを掴んで飲んだ。アリシアはココアを飲んでいた。俺は

「アリシア、お前はフェイトみたいに執務官を目指さなくていいのかわ？」

「まあね。妹が表で頑張るなら私は裏で頑張ろうと思ってね。」

「そうか…。頑張ってくれ。俺も出来る限りの事は手伝う。」

アリシアは笑った。なんかかひまわりみたいだな…こうふにやりとしてるから。その時警報が鳴った。

『海鳴で次元反応を確認!!』

それを聞いた、俺はコーヒーを飲み干してアリシアに

「じゃあ行ってくる。」

「うん。気を付けてね。優人。」

「ああ。」

俺は走って転送ポートに向かった。

くく side アリシアくく

「ふう…」

斉藤優人は私を生き返らせてくれた人…。最初はフェイトが恋してたからそれを応援しようとしてたけど…次第に彼の事が気になってきて…今じゃ…

くく海鳴 海上くく

くく side 優人くく

俺は今海鳴の海上を飛んでる。次元反応を確認した場所に向かっている。だが転送したおかげで30秒で到着した。そこにはシュテル、レヴィ、はやて似の女の子とピンク髪の女がいた。はやてとリインフォースもいたので俺ははやて達に向かった。はやても俺に気づいて

「優人、来たんやな。」

「ああ。今どんな状況だ？」

俺が聞いたらリインフォースが

「今、マテリアルともう一人が砕けえぬ闇というものを復活させようとしている。」

その時光が俺の視界に走った。のは光が発した場所には小さい恐らく俺らと同じ年の女の子がいた。リインフォースが

「あれが砕けえぬ闇…。」

金髪の髪の女の子か…。そしてシュテル達が砕けえぬ闇に接近した時、砕けえぬ闇が触手みたいなのを出そうとしたが、

「いけない!!シールドビット!!」

俺は修復されたケルデイムになってシールドビットでシュテル達を触手みたいなのから守った。俺はGNビームピストルIIを砕けえ

ぬ闇に撃った。砕けえぬ闇は触手でビームを防いだ。

「ちっ…」

「君は…世界を変える者…」

「そういう貴様は砕けえぬ闇で間違いないな？」

「だから何？君は私を倒す事は出来ない。」

「ならやってみようか…CB、アリオス。」

『了解。』

俺はアリオスになった。そしてカンを撃った。砕けえぬ闇は回避した。俺はGNバルカンを撃ち続けた。その時砕けえぬ闇が触手を飛ばしてきたが俺は変形して回避した。

「嘘!？」

ピンク髪の女が驚いていたが、今はそんな事に構ってられない。俺は砕けえぬ闇の目の前で変形を解いてビームサーベルを出して砕けえぬ闇を斬った瞬間そのまま過ぎずにGNバルカンを撃った。そして両手にビームサーベルを持って砕けえぬ闇を斬ろうとしたが砕けえぬ闇は既に逃げていた。そしてビームが飛んできた。俺は回避した。そこには仮面を着けているのかどうか分からないけどガンダムもどきがいた。

「貴様は…一体…」

『やっと思つた。斉藤優人。』

その時ビームが後ろから飛んできた。俺は回避した。

「ちっ…なっあれはモビルスーツ？」

『驚いたか？これは私の装備さ。』

「貴様は何者だ!？そして何故俺を狙う!？答えろ!!」

『私の名はコード・アメリカス!そして貴様は私の目的の為に邪魔なんだ!』

「何?」

『私の目的は世界に平和をもたらす事だ。ならば私も問おう貴様は何の為に戦っているのだ?目的や思いの為に戦っているのではないのなら私の前から消え去れ!!』

俺は…目的なんて決めてはなかった…いつもその場で決めて動い



ていたからこそコード・アメリカスの問いに答えられなかった…その時俺はファンネルに背中を撃たれた

「くっ…い」

そしてファンネルが俺を囲んだ。それでも…俺は!!

「俺は!!」

『TRANS-AM』

その時CBがランザムを起動した。俺はファンネル全てを回避した。そしてビームサーベルを出してアメリカスと斬り結んだ。そしてアメリカスから距離を離して

「俺は目的なんてない…だけど俺は皆を守りたい。今はそれが俺の思いだ!!だから俺はその為に戦う!!」

『そうか…』

その時アメリカスがビームの直撃を喰らった。

「何処から…」

『マスター、アメリカスの後ろです!!』

そこには蒼いガンダムがいた。あれは…

「フェニックスガンダムに似ている…?」

『これはハルファスガンダムです。』

『貴様は?その機体はアプロディアしか使えない筈…。まさか…!!』

何かに気付いたアメリカスは撤退した。そしてここには俺とハルファスガンダムがいた。俺はハルファスガンダムに  
「とにかくアースラに来てもらっても構わないか?」

と聞いた。相手は

『はい。』

そう言った。俺はハルファスガンダムを連れてアースラに向かった。

くくアースラくく

くくside 優人くく

俺とハルファスガンダムはアースラに着いた瞬間にモビルスーツを解いた。ハルファスガンダムの中にいた者?は鳥だった。そして

アースラにいる面々、マテリアルも含めて話し合った。鳥の名はアービー。そしてコード・アメリカスの目的も話してくれた。コード・アメリカスは世界を救うというのが目的ではないらしい。本当の目的は世界を自分の物にすることらしい。

「そして、世界を手に入れた次は恐らく月にある旧ジェネレーションシステムを復活させるでしょう。」

「旧ジェネレーションシステム?」

フェイトが首を傾げた。アービーが

「ジェネレーションシステムとは元々は地球そして月の平穏を守る為に作られたシステムです。しかし世界が平和に向かっていく中月にあるシステムは破棄されました。しかし未裔はいたのです。それが」

「コード・アメリカスって訳ね。」

プレシアが言った。

「はい。コード・アメリカスには特殊な能力があります。」

「能力?なんですか?それ。」

リニスがアービーに聞いた。

「その能力は裏切りのコード。」

「裏切りのコード?」

エリスが首を傾げた。

「裏切りのコードというのは味方の者達が敵とかすのです。」

全員が驚いた。それはそうだろう。信じている仲間が裏切りのコードとやらで敵になるのだから。リンデイが

「それでも対策はあるのよね?」

「はい。裏切りのコードに感染したものは一度倒せば元に戻ります。」

「そうか。ではコード・アメリカスが出てきたら相手は俺がする。」

「私も手伝います。」

「頼む、アービー。」

そして俺達は少し話をして今日は解散した。これからは砕けえぬ闇とコード・アメリカス、この二人を追うことになりそうだ。

### 特別番外編その3

### クリスマス

〜 アースラ 食堂〜

〜 side 優人〜

リンディやクロノ達に呼ばれて俺はアースラに来た。アースラの食堂に来ると色々飾り付けがされていた。

「そういえば、今日はクリスマスか…。」

だからレヴィはあんなに飯を食ってるのか。よく見れば皆サンタクロースの格好をしている。なのはが俺に気づいてやって来た。

「優人君、来たんだ!!」

「ああ。誘われたら断る訳にもいかなくてな。」

「じゃあこつち!!」

俺はなのはに手を捕まれて皆の所に向かった。そしてフェイトが

「優人、来たんだ。」

「ああ。」

その時誰かに抱き付かれた。それはアリシアだった。

「アリシアか。」

「優人〜メリークリスマス!!」

「ああ、メリークリスマス。」

「優人君〜。」

「すずかとアリサが来た。」

「優人、メリークリスマス。」

「優人君メリークリスマス。」

「二人とも、メリークリスマス。サンタクロースの格好をしているのか。かわいいよ。」

「ありがとう。」

「すずかは微笑んだ。アリサも顔を少し赤らめて、

「あ、ありがとう。そうだ。優人の為に作った衣装があるから着替えなさいよね!!」

「ああ、分かった。」

「すずかとアリサがなのはの所に向かった。その時リニスに来て、

「優人、来たんですね。優人の衣装もありますよ。」

「俺の？」

「はい、はやて達が作ったんですよ。」

「分かった。」

俺はリニスに着いていきその衣装に着替えた。そしてその衣装でまた食堂に戻った。そしたらなんかはやて達は顔を少し赤らめていた。その衣装とはタキシードだな。リインフォースが来て

「優人、その服似合ってるな。かっこいいよ。」

「ありがとう。リインフォース。リインフォースもその服かわいいよ。」

「あ、ありがとう。」

リインフォースはもじもじして言った。はやて達も来た。

「優人君、私達にも何か言わへんの？」

「ああ。似合ってるよ。かわいいよ。」

「えと…あ、ありがとう。」

はやては顔を赤らめて何処かに行った。さてと、

「俺もチキンを食べるか。」

俺はチキンがあるところに向かった。そこにはチキンに無性に食らいつくレヴィとゆつくり食べてるシユテルとユーリの口を拭いているデイアーチエがいた。俺はデイアーチエ達の所に向かった。

「デイアーチエ、メリークリスマス。」

「おお、優人か。メリークリスマス。」

「デイアーチエ、お母さんみたいだな。」

「我は王だ!!お母さんでは決してない！」

「王様、お母さん♪」

「王がお母さんですか違和感はありません。」

「では、デイアーチエを今度からはお母さんって呼びますね。」

「や、やめんか!!」

デイアーチエが少し涙目になっているか。

「はい、そこまでよく。」

そこにはキリエがいた。そしてアミタも来た。キリエが

「あら、優人、メリークリスマス♪」

「優人、メリークリスマスです。」

「ああ、メリークリスマス、キリエ、アマタ。」

俺はチキンを右手に持ちながら言った。俺はアマタに、

「グランツさんは？」

「博士なら今リンディさんと話してますよ。」

「そうか。」

「優人のその服似合ってますね。」

「ありがとう、アマタ。」

「むむっ確かに似合ってるよ、優人。」

「似合ってますね、優人かつこいいです。」

「うむ。そうだな。」

「かつこいいですよ。」

「ありがとうな、レヴィ、シュテル、ディアーチェ、ユーリ。」

俺はチキンを食べた。そして一回周りを見渡したらプレシアがフェイトとアリシアの写真を撮っていた。リニスとアルフが止めようとしていたが無理そうだ。アルフが俺に気づいてやって来た。

「優人、プレシアを止めてくれよう。」

「何故だ？楽しそうじゃないか。」

「それでも。」

俺は少し溜め息をついてプレシアの所に向かった。そこにはもじもじしているフェイトと笑顔でピースサインをしているアリシアとそれを一生懸命撮っているプレシアとそれをいい加減やめたらどうですかと言っているリニスがいた。

「プレシアさん、何をしているんですか。」

「あら、優人。見てわからないの？私の娘たちを撮っているのよ。」

「まあ、そうだが…まあいつか。」

俺はもう匙を投げた。これは終わらないと思うから。おれはそそくさとその場から離れた。そして八神一家にあった。こちらでも楽しんでる。ヴィータが俺に気づいて

「優人、メリークリスマス!!」

「ああ、メリークリスマス。ヴィータ。」

「ほう、似合ってるじゃないか。優人。」

「ありがとうな、シグナム。というかシグナムのその服なんか新鮮だな。似合ってるよ。」

「ありがとう。」

シヤマルとザファイラも来た。俺はそこでしばらく楽しんだ。こういうのも悪くないな。そして一回別れて俺はクロノ達の所に向かった。クロノに

「クロノ、メリークリスマス。」

「優人か。メリークリスマス。」

「優人、メリークリスマス。」

エリスもいた。俺は

「今日は誘ってくれてありがとうな。というかなんでクリスマス会なんて始めたんだ？」

「それはな地球で祝う日ならここで祝わなきゃどうする!?!って母さんがね。」

「そつからは準備よ。ほんとに疲れたわ。七面鳥とやらを買いに行ったり、寿司なるものを握ったり。」

「大変だな。だが御苦労様。お陰で楽しめてるよ。」

「そう言ってくれるとありがたいな。」

俺はしばらくエリスとクロノとはなしあった。

〳〳10分後〳〳

〳〳side 優人〳〳

その時食堂が一回暗くなった。そして食堂の前の所に光がきた。そこにはリンデイがいた。リンデイは

「皆、今日はありがとう。さてもうすぐで終わりなんだけど最後にはビンゴ大会をするわ。皆お手持ちにあるビンゴカードを見て頂戴。そこには数字が書いてあるでしょ?これからひいてく紙には数字が書いてあるわ。でその数字が出たときに数字の部分を指で押して穴を開けて。それで縦、横、斜めにその穴が揃ったときに手を上げてね。

そしたら景品を渡すわ。一等には豪華なプレゼントがあるわ。それでは始めるわよ。」

ビンゴ大会が始まった。そして最初の数字は「25よ。」

25な。あつた。俺は25の所に穴を開けた。

くく3分後くく

数字がでるがあんまり揃わない。れはままいったな。そしてリンデイが

「次の数字は49よ。」

そう言った時、リインフォースが手をあげた。リンデイが

「あら、ではリインフォースさん前に来て頂戴。」

リインフォースはリンデイの所に向かった。

「さすがだな。というかあんまりビンゴにならないな。」

クロノが

「確かに、そうだな。これは辛い。」

リインフォースはなにかを抱えてはやて達の所に向かった。

「何だ？あれ。」

「さあ？」

「次、行くわよ。次は36よ。」

「ビンゴ…。」

俺は手をあげた。そしてリンデイが

「優人おめでとう。前に来て頂戴。」

俺は前に向かった。そしてリンデイが

「おめでとう、はいこれ景品。」

そう渡してきたのはご当地詰め合わせセットだ。これはいい。

「ありがとう。」

俺はクロノ達の所に向かった。クロノが

「おめでとう、優人。」

「ありがとう、クロノ」

そして一時間ビンゴ大会が続いた。ちなみに俺は二回ビンゴした。

そしてクリスマス会が終わった。この後は大掃除とかが待っているが頑張るか。そして俺とリニス、シュテル、ディアーチエ、レヴィ、ユーリ、アミタ、キリエ、グランツさんと帰った。皆ちやつかり食い物を持ち帰っていた。しかもローストチキンを沢山な。だがこういうのも悪くない。やっぱり、平和がいいな。

「そうだ。ビンゴ大会で手にはいったご当地詰め合わせセットがあるから正月食うか？」

「はい♪」

「うむ。楽しみだ。」

「楽しみにしています。」

「楽しみです♪」

正月楽しみだ。

〈 F i n 〉



## 第42話 絆と仲間

〓〓前回の纏め〓〓

アリシア・テスタロッサにデバイスの勉強を教えていた斉藤優人だったが、海鳴の海域にて魔力反応が発生して海鳴に向かった。そしてアリオスになって砕けえぬ闇と交戦するがコード・アメリカスが乱入してアメリカスの言葉におどらされてピンチに陥るがCBの判断によりトランザムが発動して回避する。更にハルファスガンダムが乱入してアメリカスは撤退。ハルファスに乗っていたのはアービイという者だった。そしてアービイからもたらされた情報ではアメリカスは裏切りのコードを使うとか。

〓〓三日後〓〓

〓〓第28管理外世界 ラゴスタ〓〓

この管理世界は原生林や砂漠がある。何故なら人があまり出入りしていないから。そしてこの世界には四人の騎士と砕けえぬ闇と未来から来たもの達がいた。

〓〓side シグナム〓〓

我等守護騎士は未来から来たものとマテリアルの者達から聞いた砕けえぬ闇という者を追うことになった。優人や主はコード・アメリカスという者の対策に忙しいとか。シャマルが

「この先から魔力反応を確認したわ。行きましょう。」

私達は魔力反応が確認された場所に向かった。

※ここからはしばらく三人称になります。

ピンクの髪の彼女は進む。己の故郷を救うために。もう一人の赤い髪の彼女も進む。彼女と同じで故郷を救うために。そして赤い髪の女は遂に砕けえぬ闇に会う。赤い髪の女は武器を砕けえぬ闇に突きつけて

「見つけましたよ、システムU-D！私に協力してください。貴方の

もつ『エグザミア』を私の妹に渡さないように…!!」

砕けえぬ闇は

『永遠結晶 エグザミア』。これは私の大切なものだ。これがなくなれば…私はこのからだを保てなくなってしまう。」

赤い髪の女は

「そうなんですか？それなら余計に好都合！私が護りますから、貴方はどうか安全な場所に！」

砕けえぬ闇が静かに

「君は時の旅人…。この時代の人間じゃない。」

赤い髪の女は驚いた。まさか見破られているとは思わなかったからだ。更に砕けえぬ闇は

「いや…人間でもない。エルトリアの『ギアーズ』それは…」

赤い髪の女は少し暗いかおで

「そうですよ…私は…」

その時

「そこまでよっ！」

赤い髪の女の左肩に魔力弾が直撃した。

「あうっ！」

赤い髪の女は右手で左肩を押さえた。

「王様も頼りにならない、治癒術士は思うようにならない…」

ピンクの髪の女は剣を構えて

「でも私は大丈夫！最悪、エグザミアさえあればなんとかなる！私達の未来で博士に希望をあげられる!!」

「キリエッツ!!博士が決めたギアーズの定め、忘れた訳じゃないでしょう!『時を、運命を操ろうなど』と思ってはいけない、厳然たる守護者であれ。』だから私は守りたい…!博士の教えを!定められた運命を!」

赤い髪の女は叫んだ。その時

「守ればいいでしょ、お姉ちゃんはっ!私は出来の悪い妹だから、博士の言いつけなんか守らない!!それで博士が悲しいまま死んじゃうよりずつとずつといいんだからっ!!」

そして戦闘が始まった。がキリエの姉は

「キリエツツツ!!やめなさいツツ!!」

「黙って、お姉ちゃん!!一度決めたら、諦めずにやりとおすツツ!!博士にもお姉ちゃんにも、私はそう教わった!!」

砕けえぬ闇は

「白兵戦システム起動…出力、35%。」

キリエの姉は叫んだ。この止めようもない戦いに挑む妹に向かって

「キリエエツ!!」

くく この勝負はゲームをプレイして下さい。くく

この勝負にキリエはまけた。そして砕けえぬ闇は

「君は、時の藻手たりえない。この魄翼の前に、鉄屑として砕けて消える…それが定め。悲しい定めで、動かざる運命。」

その時キリエに向かって触手みたいのが伸びた。その時

「アクセラレイター…ツツ!!」

キリエの姉が瞬間移動してキリエの前に立って庇った。その時キリエの姉は左腕でガードした。表面装甲が砕けていく。キリエは

「お姉…」

キリエの姉は苦しそうに

「キリエ…ツ…逃げ…なさい…。」

だが砕けてえぬ闇は

「姉妹もろとも逃がさない。ここで消えてしまうほうが…痛みも苦しみもきつと少ない。」

だがキリエの姉は反論した。今出せる声を振り絞って

「痛くても、苦しくてもっ!!前を向いて生きていけるようにツ!!人の心は出来ているんです!!」

そして遂に左腕が壊れた。そして右手に構えている銃を砕けえぬ闇に向けて

「私の体は鋼でも優しい心は育ててもらえたツ!!家族の命と心を守って生きる…一家の長女の役目です!!」

そして大出力の魔力が貯まり、  
「ヴァリアントザツパー!!オーバードラストオオオツツ!!」

大爆発が発生した。その時キリエ達を探していた守護騎士が気付いてヴィータが

「爆発ッ!？」

シヤマルは驚き

「なんて威力…あれじゃトリプルブレイカー並…ううん、それ以上…。」

ザフィーラは冷静に見ていた。

「熱と物量破壊を伴っている。付近の者は、生きてはいまいが…。」

シグナムは

「並の人間なら…な。」

そしてその爆心地では砕けえぬ闇はほぼ無傷でヴァリアントザツパーを放ったキリエの姉は捕まっていた。

「武器を破損させてまで撃つ銃撃…なるほど、少し痛かった。だけど、それでも私を消し去るのには至らない。悲しいことだ。とても、とても。」

砕けえぬ闇を見たヴィータは

「あれが…砕けえぬ闇か？」

シグナムは

「そのようだが…。」

ザフィーラは砕けえぬ闇を見て

「魔力量の桁が違う…我々が束になったところで、勝てる相手ではないな。」

シヤマルは

「だけどそれでも、放っておけないでしょう?」

シグナムは

「ああ…止めなければな。」

ヴィータは気合いを入れ直して

「おうよ!!」

その時砕けえぬ闇が頭を押さえて

「ッ…ただ…また頭が…。うう…うああーッ!!」

そして逃げた。シグナムは

「消えた？」

シヤマルは焦って

「いけない、追わないと!!」

その時クロノとエリスがやって来た。

「現場一同！遅くなってすまないクロノだ！」

「後は私、エリスよ。」

シグナムがクロノとエリスを見て

「執務官！教導官！」

クロノは

「状況は把握している！U-Dの追跡は僕とエリスがやる！君達は一度、アースラに戻ってくれ。」

「ですが…！」

シグナムは反論しようとしたがエリスが

「心配しないで、伊達に遅れた訳ではないわ。ある程度の対策は用意したわ。とにかく一度、戻ってちょうだい。」

シグナムは

「了解しました。」

シヤマルは

「アミタちゃんとキリエちゃんも回収してあげなきゃ…」

ザフィーラは

「ああ。無事だといいが。」

ヴィータが何かに気づいた。

「あれ、ピンクの方がいねーぞ？あの深手で一体どこへ？」

そしてアミタは守護騎士達に回収された。アミタは碎けえぬ闇を追っていたがもう限界だろう。そしてアースラでは遂に対アメリカス戦が決まった。行くのは斉藤優人とアービィだ。

〳〳第26管理世界ドルトムント〳〳

ここは街があるがそれは小さな集落ばかりである。しかしその一

一つが地球の技術を上回っている。そしてここに二人の魔導師がいた。

ここには今クロノとエリスがいる。クロノがアースラにいる皆に「皆、逃走した対象A・対象Bの追跡はこちらで続けている。追跡班は僕達の他にもいるから場所は割と早めにわかるはずだ。ところで緊急編成のチームだが状況の対策をしたいと思う。」

『はい。』

通信先からはなのは、フェイト、はやての声が聞こえた。エリスが「皆には申し訳ないけど、優人、アービィ、そしてマテリアル以外でチームを編成するわ。」

『はい。』『大丈夫。』『むしろ、協力させてくれなかったらどないしよーって思ってたくらいや。』

「闇の欠片の被害は騎士達のおかげでいまのところ落ち着いているわ。新たな欠片の発生もほぼないわ。異世界からの来訪者アミティエ・フローリアンは現在は保護して優人のヴェーダやCBのおかげで治療が早くなるわ。そして彼女の妹、キリエ・フローリアンの居場所もかなり絞り込めてるわ。こちらは私達が捕獲に当たるわ。」

くくアースラ 会議室くく

ここに四つの画像が出てきた。それは金髪の女の子とガンダム似のモビルスーツだ。エリスが通信で

『こっちの金髪の女の子はマテリアル達の呼び方によると『砕け得ぬ闇』識別名『U-D』2体いるのか、それとも色彩が変化するのか：詳しいことはわからないけどいずれの観測状況でも凶悪なまでの戦闘能力を有してるわ。その戦力は恐らく『闇の書』の『ナハトヴァール』に匹敵するわ。対策を考えないと…。そしてもう片方はこれはアービィの呼び方によると『コードアメリアス』機体の識別名は『クインアメリアス』。これは遭遇したらとにかく撤退していいわね。そしてこの『クインアメリアス』に当たるのは優人とアービィよ。いいわね。』

「なんとかするよ。」

はやてが答えた。

「うん…私達がきつとなんとかする！」

なのはが答えた。

「ゴードアメリアスは問題ない。先ほど対策というのかな？それが終わった。」

優人がアーベィを肩に乗せて答えた。クロノが通信で

『その気持ちは嬉しいが、『砕け得ぬ闇』については具体的な策が欲しいのも事実だ。観測を続けながら対策についてはこちらで考える。』

「その具体的な策ですが、一応私と王で決めましたので後で伝えます。」

シユテルがディアーチェに代わり答えた。クロノが

『わかった。君達は昨夜から連戦で疲れているだろう？一旦休んでくれ。行動方針は追って指示する。』

「うん…。」

「了解。」

なのは、フエイトの順に答えた。

くく第26管理世界 ドルトムントくく

「では行こう。」

「ええ、行きましょう。確か聖王教会の予想によれば『未来からの来訪者、運命を変革するもの達。そして古代より生ける者』だったけ？」

「騎士カリムからか？」

「まあね。」

「じゃあ行こう。」

そう言つて二人は空に飛んだ。キリエ・フローリアンを確保するために

くく二時間後くく

クロノとエリスは何度も回りながら探したそして遂に見つけたのだ。しかしキリエは見て分かるように完全に疲弊していた。そしてエリスは

「やつと見つけた。手間をかけさせないでよね。」

「ボロボロだな。よく動けるものだ。その状態で。」

エリス、クロノの順に話した。キリエは疲れた顔で

「…ほつといて…。」

エリスは溜め息をついて

「こつちだつて、できればほつときたいけど、貴方は危険人物だからね。拘留させてもらうわ。」

そう言つてフェニックスガンダムになった。キリエは武器を構えて

「捕まるわけにもいかないの。私はエグザミアとGNドライヴを持つてエルトリアに帰るんだから…。」

「GNドライヴを？まあ、詳しい話は後で聞こう。だがこんな遠くの世界まで来て、姉妹喧嘩しながら好き勝手されてるから、いろんな事が上手くいくわけないし怪我だつてする。それに姉妹なら仲良くするべきだ。」

クロノが言つたが、キリエは少し睨みながら

「人の家庭の事情に踏み込まないで。ともかく私は捕まらない…！私  
が全部、上手くやつて見せるんだからッ！」

「2対1で申し訳ないけど、少し手荒に捕まえさせてもらうわ!!」

そう言つてエリスはキリエに向かった。そしてファンネルを展開してキリエに撃つた。キリエは回避したが避けきれず、何発かは被弾した。そしてクロノがステインガレーを撃つた。キリエはラピッドトリガーで封殺したがフェニックスのバーニングファイアをまともに受けてしまった。そしてよろめいた瞬間にクロノのバインドに捕まった。エリスはフェニックスガンダムを解除して

「見る影もないつてのはこの事なのね。ボロボロなりの戦力つて事か…。」

キリエは悔しそうに

「く…。」

そしてクロノが

「まあ、ともあれ話は聞かせてもらおう。君は未来から来たのだろう？君らが抱えてる何らかの運命を変えるために、ここに…過去のこの



世界にやってきた。違うか？」

キリエは遂に観念したのか答えた。

「そうよ……。」

エリスが

「時間移動なんて私達の世界の法則を超越してる。にわかには信じたくない出来事だけど、オカルトでも超常現象でも起きた事をできる範囲で対応するのが管理局だね。でも、もう少し詳しく事情を教えてください。悪いようにはしないわ。本部では丁度、貴方のお姉ちゃんにも話を聞いている事だから……隠し立てしても無駄だと思うわ。」

「では、最初の質問だ。君が変えたい運命ってのは、一体なんだ？」

クロノが聞いた。そしてキリエは遂に答えた。

「私達の故郷は……今ゆっくり死んでいってるの。」

「故郷？」

エリスが首をかしげた。キリエは

「私達のいた星、エルトリア。エルトリアはもう何百年も前から世界そのものがゆっくり死んでいってるの。『死蝕』って呼ばれる、水と大地の腐敗。飛び石みたいに自然発生して、草木も動物も生きられない場所になっていく。人は皆、死蝕から逃げながら生きて、80年前からは、他の惑星への移住を始めてる。」

「だが、そんな危ないところから引越せるならまだマシでは？」

クロノがいった。キリエは少し苦笑いして

「そうね。それは幸運。皆、エルトリアを離れて行って……あと2世代以内には、エルトリアから人が一人も居なくなる試算になってる。今残ってるのは、エルトリアで生まれ、エルトリアの大地が本当に好きだった人達。私達のお父さん……フロリアン博士は死蝕の対策をずっと続けてた。この星の不調を直して、綺麗な世界にもどすんだって。私達はその実験過程で生まれた『死蝕地帯の復旧機材』自動作業機械『ギアーズ』。」

くくアースラ 病室くく

「ただ、博士はよく失敗をする人で……普及型ギアーズの試作型として

生み出した私と妹は、人格形成システムを作り込みすぎてしまったそう  
うで。」

ここには今起きたアミティエ・フロリアンとシャマル、マリエル・  
アテンザそして斉藤優人が居た。アミタは、

「機械として扱うべきではない、と判断されて…普通の人間と同じよ  
うに、育ててもらってました。」

「素敵な博士なのね。」

マリエルがいった。アミタは嬉しそうに

「はい。とつても。エルトリアでは今も私達の後に博士が作った妹や  
弟たち、私達みたいな心や体を持たないけど任務の為に一生懸命働い  
てくれてるギアーズたちが死蝕を止める作業を続けてくれます。  
私とキリエの計算ではあと数年で成果が、出始めるんです。博士が人  
生を賭けた夢の成果が、私達の生まれた意味が…実を結ぶかもしれな  
いんです。」

しかしアミタは少し悲しそうな顔をした。

「だけど、博士はそれを見ることができない。妹はそれが辛くて、悲し  
かったんだと思います…」

〜第26管理世界 ドルトムント〜

「時間遡航や異世界渡航のシステムは博士が偶然見つけた『オーパー  
ツ』。博士が解析して、使えるようになる直前まではこぎつけた、こん  
なものを使ってはいけない、って封印しちゃったけど。」

「僕らで言うところの、ロストログリアか…」

クロノがいった。エリスも頷いて

「乱用しないのは正解ね。だけど、そのタイムマシンが、あれば運命な  
んか変え放題なんじゃないの？それこそ数年先の未来に博士を連れ  
てってあげるなり、未来で治療法を捜すとかさ。」

キリエは

「聞いてなかった？時間移動な反対してた。過去に戻って運命を変え  
るのも今を生きることが放棄して未来に逃げるのも人がするべきこ  
とではないって。それに一度に移動できるのは一人か、二人。体に物

凄い負担がかかるから、普通の人間じゃ時間移動そのものに耐えられない。人間の何十倍も頑健な私達だって機体に物凄い負担がかかったわ。博士を移動させるのはどっちにしても無理だった。」

くくアースラ 病室くく

「世界が死んでいくなんて大規模な出来事も、不治の病な博士の病気も、どうすれば防げるのか、治せるのかなんてわからなかったんです。私は博士の言い付け通り、時間移動になんか頼らないで済む方法を捜していました。妹は時間移動に賭けていました。可能性はそれしかないはずって、シミュレーションを繰り返して、ただ、鍵になるような過去、例えば博士の病気になるきっかけになりそうな出来事や、死蝕の大拡散とか…そういったものを変えようとするはずシミュレーションエラーが出てしまうんです。『何が起こるかわからない』状態で『取り合えず過去に戻って何かしてみる』といつのはあまりにリスクでした。生まれ育った世界の未来と、世界で一番大切な人の夢と命。そんな不確定な天秤には載せられない。妹は諦め賭けていました。ただ…」

くく第26管理世界 ドルトムントくく

「見つけたの。たった二つしかない可能性。死蝕で死にゆく世界を救える方法。それが無限連環システムの核 エグザミア。そして斉藤優人が所持する半永久機関のエンジンで使用方法次第では観測される数値以上をいき無限の可能性をもつと言われているGNドライブ。過去のどの時代でもなく、この時代でのみ、私が持ち帰る可能性があるって。」

エリスが

「それがシミュレーションの結果ってこと？」

キリエが頷いて

「そう…ロード・デИАーチエが完全な状態で稼働していてなおかつ、砕け得ぬ闇をその制御下に置くタイミングが。それが昨夜訪れるはずだった…だけど…」

「失敗したって事ね。」

エリスは言った。だがキリエは決意のある眼で

「まだ失敗じゃないわ…私達はまだ活動できる。」

くくアースラ 病室くく

「しかし、私達はこの世界では活動制限があります。持てるだけのエネルギーは持つてきましたが、それにも限りがあります。こちらでの補給は難しいです。」

アミタが言った。シャマルがマリエルに

「そうなんですか？」

「分析すれば生成できるかもしれないけど、かなり時間がかかるわ…急には無理よ。」

「俺の所でも時間は二日を要する。」

優人も言った。そしてアミタは

「時間移動もそんなに使えるものではないんです。転移機がどれだけ保つかもわからない…既に私と妹が一度ずつ使っていますから、あと一回使えるかどうか…。」

「後はもう帰るだけってこと？」

「そうなります。」

マリエルがアミタに聞いてアミタは答えた。そしてシャマルが

「それと、もう一ついいかしら？」

「はい。」

「貴方たち姉妹以外にもちよつと変わった子達がいるんだけど…」

シャマルがアミタに聞いてシャマルはアミタの前にヴィヴィオ、アインハルト、トーマの画像を出した。

「この子達はお仲間だったりしない？」

「いえ、見覚えは。少なくとも私は、この三人とも接触していません。」

アミタが答えた。シャマルが

「この子達は今この船にいるんだけど優人君からの話で未来から来たそうなのよ。」

アミタが、

「もしかしたら、私や妹の時間移動の際、何かを巻き添えにしてしまった可能性はあります。そんな方がいらつしやるのであれば戻れるよ

うに努力します。」

くく第26管理世界 ドルトムントくく

「では最後の質問よ。『砕け得ぬ闇』システムU—Dを手に入れてどうするの?」

エリスがキリエに聞いた。キリエは

「システムU—Dを…エグザミアを手に入れて帰れば、きっとエルトリアを蘇らす事ができる。世界が戻るにはきつと何百年もかかる。博士の命には間に合わないけれど…ほんの小さな一歩でも前に進んだ事を博士に見せてあげたい。博士のやってきた事は無駄なんかじゃないんだって…」

エリスは少し溜め息をついて

「前向きな協力が、できればいいんだけど。それでも私達が『砕け得ぬ闇』を確保するのは変わりないわ。その上で、協力できることがあるならなるべくするわ。どのみちその体じゃ、戦闘なんかまず無理よ。こんな異境の果てで、スクラップになりたくないでしょう?」

「それは…」

キリエは答えにくそうにしたがクロノが

「要するに君達は、親孝行なやんちゃな娘なんだろう。それならそう簡単に見捨てはしないさ。怪我也治さなければいけないから大人しく確保されてくれ。」

「分かったわ。」

キリエはクロノとエリスと共にアースラに戻った。

くくアースラ 会議室くく

「これで編成は終わりだ。まず第1チームはエリス、僕、シグナム、シヤマル、ヴィータ、ザフィーラ、キリエ、アインハルトでいく。そして第2チームは、なのは、フェイト、はやて、リインフォース、ヴィオ、アミタ、トーマ、そしてマテリアル達だ。そしてコードアメリアスは優人、リジエネ、アービイだ。」

クロノが言った。そしてエリスが

「ちなみにカートリッジユニットの対砕け得ぬ闇のカートリッジを持つことになるのは、なのは、フェイト、シグナム、ヴィータの四人よ。これで編成は終わりよ。質問は…なさそうね。」

その時部屋から出ていく一人の影があった。優人はそれに気づいて追いかけた。

くくアースラ 食堂くく

「まで。」

その声が聞こえて転移ポートへと向かう影が止まった。

「何処へ向かう気だ？キリエ・フロリアン。」

「あら、気づいていたのね。」

「俺の考えだが恐らく一人でシステムU―Dを止めようとしているだろう。言わせてもらうが、無駄死になるぞ。」

「いいでしょッ！行かせてよッ！1分でも早くシステムU―Dを確保しないと…博士が…！」

「また、迷惑をかけて…少しは落ち着きなさいッ！」

声が聞こえた。そこにはアミタがいた。

「お姉ちゃん…!?!」

「イエス！アイアムお姉ちゃんッ！まったく、ただでさえ私達姉妹で皆さんに迷惑かけているのに更に迷惑の上塗りをしてどうしますか。」

「だからほつといてつてば！私には私の考えが…」

「アミタ、お前まだ修復が終わってないはずじゃ…」

「問題ありません、優人さん！気合い全快、熱い魂のおかげでもうすでに全快しましたッ!!」

「はっ？CB、解析してくれ。」

『分かりました。機体修復率92%本当に治ってます。』

「凄いな魂って」

優人は苦笑いしていた。アミタは少しどや顔で

「えっへん！ですッ！」

しかしキリエは悲しそうな顔をして

「アミタ、馬鹿ツツ!!」

「どういうことだ?」

「馬鹿アミタ…! そんな無茶したら機体寿命が縮むの知ってるでしょッ!」

キリエは悲しそうな顔をして言ったがアミタは

「ちよつとくらいに負荷がなんです。無茶な妹を放っておくのがよっぽど心の寿命が縮まります。」

「馬鹿…! お姉ちゃん…じゃないアミタツ! 私、アミタの事が嫌いッ! ずつとずつと大嫌いだつたツ!」

キリエは言ったアミタに。アミタは少し驚き

「キリエ…。」

「私の邪魔をしないでツ! どいてツツ!! ほつといてツツ!!」

そうして勝負が始まった…

~~~~ここは実際にゲームをプレイして下さい。~~~~

そうしてアミタが勝った。アミタは

「はい、どーですか? お姉ちゃんの強さ、理解しましたか?」

キリエは

「うう…」

苦しそうだった。アミタはぼつの悪そうな顔をして

「あ、いけない。ちよつとやりすぎましたか。」

そう言つてキリエに抱きついた。これが姉の思いと言わんばかりに。だがキリエは

「離して…。」

「嫌ですよ。離しません。」

「そういう所が嫌いな…大っ嫌い…」

「貴方が私を嫌いでも私は貴方が大好きですよ。本当は優しい子だつて知ってます。なにより、世界中で一番可愛い、私の大切な妹です。私は、キリエを大好きですよ。」

アミタは優しい声で言った。キリエは少し涙目になりながら

「そんなこと言って…泣いて抱きつくとも思った？私は、そんなじゃないんだから。」

だがアミタは

「別に思っていないですよ。私は私の思っている事を言っ、私がすべき事をしただけです。倒れそうな妹を助けるのは、姉にとって息をするのと同じくらい、ごく自然な事ですからね。」

「だから…私は、お姉ちゃんの事が嫌い…」

「だけど私は貴方が大好きです。」

遠いところから優人と途中から来たリジエネが

「姉妹は複雑でもそれは結して切れない絆があるんだな。」

優人がアミタとキリエを見て言った。リジエネが

「ああ、ごく小さくてもそれはきつと何処よりも何よりも大切なものなんだな。」

優人はリジエネに顔を向けて

「そろそろ、対アメリカス戦の準備をしようか。此処はあの二人だけにしよう。今はそれが良さそうだしな。」

優人がアミタとキリエを見て優しい顔になった。リジエネは少し笑って

「そうだな。それが良いだろう。」

そう言った。そして二人はキリエとアミタがいる食堂を離れた。

第43話

希望へと繋がる決戦

昔、人類がまだ完全に発達していなかった時、アトランティスやムー帝国など一部が発達していたようにとある国も発達していた。その国は天候操作や現代に存在するような戦車などを開発していた。そしてある時その国はそれらだけでは飽きたらず遂には地球を管理するシステムまで作り上げた。それが『ジエネレーションシステム』である。『ジエネレーションシステム』とはどうすればこの世界はいい方向にすすむかを自己で考えあげてその方向に進ませるシステムで、そのシステムは自己学習、自己進化、自己再生を持ち合わせている。しかし、それを作り上げたのは良かったが、彼らは自分達では管理できないと知り、自分達に従順な管理人を作り上げる為にその時その国で一番に美しく優しさを備えた女を使い、人体実験を行った。女は最初は何がどうなのかは知らなかったが国の為ならばと思いい身を差し出した。しかしそれは想像を絶するような事が行われた。まず、不死身でいられるように肉体にいくつかの薬を打たれて、ある時鬱憤がたまった男らに犯されたりして女は悲鳴を上げた。だが研究員達はそんなものを構いせず女を使い、実験を続けた。女はいつしかある思いを胸に秘めつづけた。それは

『復讐してやる……!』

であった。自分の女としての威厳を失いさらにはこの世の物とは思えないような痛みに襲われたのだから。

ある時その国では完全な戦闘マシンが完成した。それらは纏めて『モビルスーツ』と呼ばれた。そのモビルスーツはAI搭載型であり、それらは『ジエネレーションシステム』の統治下に置かれる事になった。そしてある日遂に管理人が完成した。管理人の名は『アプロディア』。『アプロディア』は完成時は従順だった。しかし、その胸に秘めた復讐はなくなっていなかった。そして何十年かたった時、遂に『ジエネレーションシステム』は『ジエネレーションシステム』を作り上げた国を危険分子としてこの世界から消す事にした。『アプロディア』はこの時を待ったと言わんばかりに笑った。従順だとしても

その思いは消えなかったのだ。そして自己学習の結果に1番戦闘に適したモビルスーツ『レギナ』三千体と『アプロディア』専用のモビルスーツ『ハルファスガンダム』によってその国は三日で消えた。そして『アプロディア』は自分の復讐を果たし、自分の本来の役目であるこの世界の監視に戻った。そしてある日、『ジェネレーションシステム』は一つの生命体を作った。その名は『コードアメリアス』。『コードアメリアス』は『ジェネレーションシステム』が何らかの不備を起こしたときに、鎮圧が出来るように作られた生命体である。しかし『コードアメリアス』は本来想定されてなかった自我を持ち、反乱を起こした。それにより『アプロディア』は肉体を奪われ急ピッチで仕上げた鳥型生命体『アービィ』に自分の意識体を写し、『コードアメリアス』を倒せる者を探した。そして見つけたのだ。彼女はその人物を見て驚いた。何故ならそれはかつて自分が恋をした人の容姿と瓜二つの姿をした人だった。その名は『斉藤優人』と言った。

くく海鳴 海の上 くく

今ここには二人の少年がガンダムになりレギナと交戦している。一人は斉藤優人。もう一人はリジエネ・レジェッタ。そしてもうひとつのガンダムも戦っていた。その名は『ハルファスガンダム』使っているのは『アービィ』。優人はダブルオーライザー最終決戦仕様+GNソードIIを使い、リジエネはセラヴィーガンダムGNHW/Bを使っている。優人がGNソードIIIをソードモードにしてレギナを切り裂き、リジエネが、GNバズーカIIでレギナを2体同時に撃ち抜く。そしてハルファスガンダムがファンネルでレギナを撃ち落としていく。がレギナの数は減らない。レギナの数は三千体だ。対して優人達は三人である。だが優人達は諦めずに攻撃する、そしてリジエネはアービィと優人に

「二人とも、トランザムを起動させてレギナを風ぎ払う!!」

「分かりました。」

「了解。」

アービィ、優人の順に答えて二人はセラヴィーの射程距離から離れた。そしてセラヴィーが赤く染まり、

「トランザム!!」

8門の砲口からビームがでてそれは巨大化してレギナを大量に呑み込んだ。そしてレギナの残骸が全て海に落ちていった。そしてリジエネは一旦離脱して優人はGNビームサーベルをレギナに投合した。レギナの頭に当たり、優人はGNソードⅢをそのレギナに撃って破壊した。そしてハルファスガンダムは変形して回りに炎を纏いレギナの大军に突っ込んだ。レギナはその炎に燃やされて行き、どんどんと落ちていった。優人も左手で左腰についでるGNソードⅡを一本持ち、それを右腰についでいるGNソードⅡとくっつけてツインランスマードにした。そしてビームサーベルモードにしてそれをブーメランの様に投げてレギナの首をはねていった。そしてセラヴィーはGNバズーカⅡをそのGNソードⅡに向けて撃った。GNソードⅡはビームサーベルが出ているため、GNバズーカのビームを跳ねてレギナを撃破していった。ダブルオーライザーは、GNソードⅢをソードモードにしてレギナのコア部分を刺してそのレギナを蹴り飛ばして他のレギナにあててライフルモードに戻し、2体同時に葬った。

(これ以上きりが無い!!)

そう考えた優人はリジエネとアービィに

「二人とも!!今からトランザムライザーで一気に風ぎ払う!!」

「了解。」

「分かりました。」

リジエネ、アービィの順に答えて二人は離脱して優人の射程距離から離れた。そしてダブルオーライザーがGNソードⅢを上に向けて、赤く染まり

「トランザムライザーアアアア!!」

そう言ってGNソードⅢを振り落とす。レギナは防御体勢に移ったが高濃度で圧縮されたGN粒子に勝つことはできず風ぎ払われた。そしてトランザムライザーのビームが小さくなり

「つ…トランザムの限界時間か…。」

ダブルオーライザーは元の色に戻った。そしてレギナは3分の2は消えていた。その時ダブルオーライザーの周りにファンネルが飛んできてビームを撃ってきた。優人は全て回避して2、3個のファンネルを撃ち落とした。そしてそのファンネルは1ヶ所に集まるそこにはマントみたいものをつけているモビルスーツだ。名は『クイーンアメリカス』。クイーンアメリカスが今装備しているのは『ガーディダンサー』と呼ばれるAI搭載型の小型モビルスーツだ。『コードアメリカス』は

「ここまで、レギナを破壊しつくすとはさすがと言うべきか…。」

「遂に真打ち登場か…。」

「気を引き締めて行くよ。」

「これが最後の戦い…。」

優人、リジエネ、アービィの順に喋った。そしてコードアメリカスはガーディダンサーを分離して、リジエネに向かわせた。マントみたいなものは小型のモビルスーツであったのだ。そして残ったレギナはコードアメリカスの指示によりアービィに襲いかかった。クイーンアメリカスは優人と一対一の勝負に入った。クイーンアメリカスはビームウィップでダブルオーライザーはGNソードⅢをソードモードにして切り結んだ。そしてクイーンアメリカスはダブルオーライザーを蹴り飛ばしてファンネルを展開してダブルオーライザーを狙った。優人はGNビームサーベルを掴み投合した。ファンネルを一つ破壊して、GNソードⅢでファンネルを斬っていった。

一方ガーディダンサーとセラヴィーではセラヴィーがGNバズーカⅡを撃っていたがガーディダンサーのIフィールドによって無効化され、ガーディダンサーの爪によってGNバズーカを二つ破壊された。そして片方のガーディダンサーがセラヴィーの右肩についているGNフィールド発生装置を破壊し、もう片方のガーディダンサーは左腰についてるGNキャノンを切り裂き破壊した。がセラヴィーはやられるだけでは終わらず膝についているGNキャノンから手を出して、ビームサーベルを出して、ガーディダンサーの片腕を斬った。

そして右側に居た、ガーディダンサーを右のキャノンから出した手で掴み、右手でビームサーベルを掴みガーディダンサーのコア部分に突き刺した。ガーディダンサーは爆発した。そして残ったガーディダンサーがビームを撃ち、セラヴィーの右足に直撃して右足にもついているGNキャノンが爆発した。が、リジエネは諦めずに左手を伸ばしてガーディダンサーを掴まえて残ったGNキャノンから手を出して、ガーディダンサーを掴まえて両腕からビームサーベルを出して、切り裂いた。ガーディダンサーは爆発した。

そしてハルファスガンダムとレギナ達はレギナはビームライフルを撃ち、ハルファスガンダムを狙ってたがハルファスガンダムは回避してクロスメガビームキャノンを、撃ってレギナを破壊していった。しかしレギナはビームファンを出して、ハルファスガンダムと切り結ぼうとしたがハルファスガンダムはレギナを蹴り、避けた。が他のレギナがビームライフルを撃ってきたことによりハルファスは回避できず直撃をくらった。ハルファスガンダムは直撃をくらいながらもファンネルを出して、レギナを撃ち落としていく。そしてレギナがまたビームファンを出して、斬りかかって来たので、ハルファスガンダムはビームサーベルを出して、切り結んだがハルファスガンダムはその後ろからファンネルを上から撃ち込み落とした。レギナは残り二十三機。ハルファスは諦めずにクロスメガビームキャノンを、撃ってレギナを撃墜していった。そして避けたレギナをファンネルで撃ち落としていった。レギナは一機また一機と爆発していった。そして最後の一体はビームサーベルで刻まれて爆発した。これにより三千体は全滅した。そして合流したセラヴィーと共に優人の援護に向かった。

くく海鳴　海上　上空くく

優人達がクイーンアメリカスと交戦しているとき、別の所でも戦いは起きていた。それは『砕けえぬ闇』こと、『システムU—D』とアースラ組達の戦闘が始まった。第一陣は、まず遠距離から攻撃を行える者は攻撃を行い、近接の者は近接で攻撃した。そしてその隙に対砕け

えぬ闇のカートリッジを持っているシグナムとヴィータが叩く。が
砕けえぬ闇は回避した。しかしシグナムの一撃を喰らい、更に後ろか
らアインハルトの打撃もくらった。そして

「うわああああああ!!」

色彩が変化した。そしてその時第二陣が到着した。紫天の書の主
であるロードデИАーチェはシュテルとレヴィと融合し、トリニティ
モードになっている。そして夜天の書の主である八神はやてもリイ
ンフォースとユニゾンインをした。そしてアミティエフローリアン
は妹のキリエからヴァリアントザッパーを借りて挑んだ。

くく海鳴 海上 上空くく

第二陣が砕けえぬ闇と交戦している中優人とコードアメリアスも
戦っていた。アメリアスはファンネルを無尽蔵に撃っていたが優人
は回避していたがファンネルの一撃を避けきる事はできなかった。

「くっ……」

ダブルオーライザーが被弾したその時

「貫った!!」

クイーンアメリアスがビームウィップで、ダブルオーライザーの両
腕を切り落とした。

「しまっ……」

「これで終わりだ……斉藤優人!!」

そしてビームウィップで腹部を貫かれて海に叩き落とされた。

「優人!!」

「優人さん!!」

リジエネ、アービーが来たのだ。しかしクイーンアメリアスはファ
ンネルを回収したあと砕けえぬ闇とアースラ組が戦っている所に向
かった。

くく海鳴 海上 上空くく

その時デИАーチェがジャガーノートで砕けえぬ闇を倒した。そ
してデИАーチェは砕けえぬ闇をお姫さま抱っこで助けて

「王……?」

「我が戦術が上手く嵌ったようだ。飽和攻撃によって貴様のエグザミ

アの誤作動を止めその隙に、我が貴様のシステムを上書きする。どこぞの子鴉が、かつて闇の書の融合騎にやったのと同じ作戦だ…癩には障るがな。」

「?本当に、エグザミアが止まってる…。」

「我が闇の力と、シユテルの発案、レヴィの出力があつてはじめて成し遂げられた…まあ、必然の結果よ。他の連中の助けもまあ…なりよりはマシな程度にはあつたかも知れん。ともあれ、貴様はもう、無闇な破壊を繰り返す事もない。しばらくは不安定な状態もあろうが、我がしつかり縛り付けておいてくれる。」

「何故…そんなことを…?」

「シユテルが思い出したのだ…貴様の事。我等はもともと一つだった。エグザミアとそれを支えるエターナルリングのマテリアル。すなわち、4基が揃つてはじめて一つの存在。闇から暁へと変わりゆく、紫色の天を織り成すもの。紫天の盟主とその守護者。我が王とシユテルとレヴィの二人が臣下。そしてお前は、我等の主であり、我等の盟主。」

「それは…」

「無理に思い出さずともよい。いや、思い出す必要もない。我等はずつとお前を捜していたのだ…我等が我等であるために。お前が一人で泣いたりせぬように。」

「王…あなたは…」

「捜すのに手間取り、随分と待たせた。たった今より、もうお前を一人にはせぬ。望まぬ破壊の力を振るわせたりもせぬ。シユテルレヴィもすぐに戻る。安心して、我が元に来い。」

「王…」

砕けえぬ闇は少し嬉しそうに言った。そしてダイアーチエは少しそっぽを向いて、

「お前はちびだが、我等が盟主ぞ。王などと呼ぶな。単に名で呼べ。」

「ダイアーチエ。」

「そうだ。それからな…シユテルがお前の名も思い出した。システムU—Dなどと無粋な名ではないぞ。お前が生まれた時の名だ。」

「名前？」

「ユーリ・エーベルヴァイン。それが、人として生まれた時のお前の名。」

「ユーリ・エーベルヴァイン。」

「これよりお前をユーリと呼ぶ。他の連中にもそう呼ばせる。良いな？」

砕けえぬ闇…いやユーリは嬉しそうに

「うん。」

「さて、戻るぞ。外からはここの状況がわからん。阿呆と塵芥どもが、馬鹿面下げて気を揉んでおるだろうからな。」

そう言っただけで脱出した。そしてなのはが

「王様、それにU—D！大丈夫？」

「U—D、気を失ってるの？すぐにシヤマル先生を…」

「うん！シヤマル、大変や、王様は無事やけど、U—Dが！」

フェイト、はやてが急いで言おうとしたがディアーチエは鬱陶しそうに

「うぬら、やかましいわー！ユーリは今眠っておるだけよ。いちいち騒ぐな。我の為す事に、不備や不手際があろうはずがなからうが。」
(いや、けっこうあったやん…ってツツコミたいけど、まあやめとこ。)

はやてが思った。なのはが不思議そうに

「ユーリって？」

「こやつの名よ。そう呼べ。」

ディアーチエは一回ユーリを見た。

「ユーリ、王様が名付けたの？」

「はやてちゃんがリインフォースさんに名前をあげたのと一緒だね。」
フェイト、なのはが言った。がディアーチエは不服そうな顔をして

「阿呆が違うわ。ユーリは元々こやつの名前で…。いや、いい。説明が面倒だ。」

「えー？聞きたい。」

はやてがそう言う

「黙れ、子鴉。それより、我もこやつもだいたい消耗した。どこか休める

場所に案内せい。」

ディアーチェがそういつた瞬間ビームが飛んできた。これはファ
ンネルだ。皆が一斉に離れた。そしてコードアメリカスが

「それが、砕けえぬ闇。頂きましょう。」

そう言つてディアーチェを襲おうとしたが後ろから二つのビーム
が飛んできた。クイーンアメリカスは回避して

「ちっ…邪魔するなら…ファンネル!!」

そう言つてファンネルでハルファスガンダムとセラヴィーガンダ
ムを襲つた。セラヴィーもハルファスも消耗していたことにより満
足な動きができず直撃を何度もくらつた。そしてなのはが優人が居
ないことに気付いて

「優人君は？優人君はどこ?!」

そう叫んだ。その時コードアメリカスが仮面の中で微笑み

「彼なら今、海の藻屑と化しているだろうね。なにせ私がとどめを刺
したのでから。」

そう言つたとき、皆の顔が絶望と化した。そしてハルファスとセラ
ヴィーが遂に戦えなくなり、クイーンアメリカスはセラヴィーとハル
ファスを蹴り飛ばしてディアーチェを襲おうとした。がディアー
チェはなんとか残つてる力を振り絞つて逃げた。がクイーンメリ
アスはまだ残つてる力で追い掛けた。そして遂に捕まつた。ディ
アーチェは左手で首を絞められ、ユーリは、右手で掴まれた。コード
アメリカスは

「これで砕けえぬ闇は私のものだ。では死ね。」

そう言つてディアーチェを殺そうとしたその時、アメリカスの前に
ビームが飛んできた。アメリカスは驚いたがディアーチェとユーリ
を掴んでる手を離そうとしなかつたがその時海から何かが飛び出し
てアメリカスを吹き飛ばしてディアーチェとユーリを救出した。な
のは達は驚いた。それは死んだと思つていた人物だったのだから…

『優人（君）!!』

「お主…」

「ディアーチェ、砕けえぬ闇…いやユーリだっけ？頼むよ。」

「そんなもの分かつとるわ!!だが感謝する。あのままでは我もこやつもやられていた。」

「構わない。さあ、早くなのは達の所へ行くんだ。」

「デイアーチエはユーリをお姫さま抱っこしてなのは達の所へ向かった。そして今の優人はダブルオーライザーだが両腕をアメリカスに切り落とされた為、両腕がリボーンズガンダムの腕に変わっている。そして両腕にはリボーンズガンダムのGNシールドとGNバスターライフルが、合体したものを使っていた。両腰にはGNソードⅡがついている。GNドライブは4個。ダブルオーライザーの時より多いGN粒子を出していた。アメリカスは優人に

「貴様は死んだはずでは!」

「俺はあのあと急いで腕を変えて、傷を応急処置したのさ。だがこれでお前を倒せる!!」

「そう言つてアメリカスにバスターライフルを撃った。そしてアメリカスはビームウイップでバスターライフルを一つ破壊したがシールドからパージされてシールドは破壊できなかった。そしてダブルオーライザーはGNビームサーベルを出して、切り結んだ。そしてアメリカスは

「何故だ!!貴様は何故ここまでやれる!?貴様は我等監視するもの達に逆らうのか!?!私より弱いお前が!?!」

「俺はジェネレーションシステムの事は分からないし、その意思も監視するもの達の事も分からない。それに弱くてもいい…だがな…相手がお前なら…相手がジェネレーションシステムを悪用しようとするお前なら…思う存分やれる!!」

「そう言つてビームサーベルでビームウイップを破壊した。アメリカスはファンネルを展開して

「おのれおのれおのれおのれおのれおのれおのれおのれおのれおのれおのれ!!」

「ビームを一斉に撃った。優人は回避せずに受けた。皆は不安そうに見たが煙が晴れた瞬間ビームサーベルを持ち、一気に加速してくる優人が出てきた。そしてアメリカスの右腕を切り裂いた。そして

う片方のバスターライフルとシールドを捨てて、ビームサーベルを持った。その時アメリカスは

(馬鹿な……こんな筈では……私の計画は……!)

そう思っていた。その為少しアメリカスの動きは一瞬止まった。その隙を優人は見逃さなかった。

「逃がすかああああ!!」

そう言つてビームサーベルでアメリカスを真つ二つに斬つた

「がっ……!」

(た……だ……では……やられ……)

アメリカスは残つてるファンネルを優人に向けて一齐に発射した。そしてダブルオーライザー、クイーンアメリカス両方に大爆発が起きて、煙がなのは達すら包んだ。なのは、フェイト、はやては不安そうに

「「優人(君)!!」」

叫んだ。そして煙が晴れた時、一つの影が見えた。それは、左手首がなくなり、右バインダーがなくなり、更には左足も膝から先がなくなり、後ろのオーライザーも半壊しており、右腕も一部が破損している、顔もアンテナが片方なくなっていたが、GNドライブは無事なダブルオーライザーが居た。そう、優人がコードアメリカスに勝つたのだ。

『わあああああああ!!』

皆が喜んだ。優人が生きているそして勝つた事が嬉しかったのだ。

そして優人は仮面の中で少し微笑んだ。

第44話

戦いの後とそれから

クイーンアメリカスとの決戦が終わり優人は気絶したが、リジエネが背負いアースラまで連れてった。そしてシステムU—D改めユーリ・エーベルヴァインもディアーチエによつてアースラに運ばれた。

くくアースラ 食堂くく

ここにはシステムU—Dとの戦いを終えたもの達が休んでいる所だ。未来から来たトーマ、リリイ、ヴィヴィオ、アインハルトは疲労により机に突っ伏して休んでいる。

「疲れた…」

「はあ、さすがにきつい。」

「もう、動けない…」

「これはさすがにつらすぎます…」

ヴィヴィオ、トーマ、リリイ、アインハルトの順で言った。その時なのは、フェイト、はやて、ヴィータ、アミタ、キリエ達が通りかかった。なのはが

「さすがにきつかったのかな？」

「こんなで疲れるなんてだらしねえな。」

「もおちよい、鍛えた方がええんちゃう？」

ヴィータが叱咤した後はやてがそう言った。その時何故かトーマ、リリイが震え上がった。はやては首をかしげて

「なんか、未来であつたんやろうか？」

「さあ？」

フェイトも首をかしげた。キリエが

「未来の事なんて気にしなくてもいいのよ。先に知ってしまったらつまらないでしょう？」

「だからあんまり未来から来た人達とは仲良くなならないようにしてください。」

アミタが言った。ヴィヴィオがなのはに気付き

「あつ、ちっちゃいママだ〜♪」

「はあい♪」

「仲良くなつてんじやねーか!!」

なのはがヴィヴィオの声に反応していたからヴィータがツッコんだ。

「では行きますよ〜。」

『はーい。』

未来組が席を立ててなのは達に着いていった。

〜アースラ 転送ポート〜

「やつほ〜オリジナル♪」

レヴィがフェイトに言った。フェイトが

「レヴィ!!それにシユテルも!!」

「王様とユーリのお陰でなんとか肉体を再び手に入れる事ができました。まあ、後は優人のお陰でもありますが。」

「優人君の?」

「ええ。彼が王様に渡したプログラムが私達が一度肉体を失った時に発動するプログラムでしてそれによつて再び肉体を取り戻す事ができたのです。」

「へえ〜さすがはGNドライブの保持者つて所ね。」

キリエがそう言った。

「それは、誉め言葉と受け取った方がいいか?」

声がしたので皆は後ろを見た。そこには優人が立っていた。優人の隣にはリジエネと実体を取り戻したアプロディアも居た。なのはが

「もう、大丈夫なの?」

「多少はね。しばらくは戦えないけどサポートはやれるからな。」

「無茶しないでよ?優人」

「しないよ、フェイト。無茶したら今度こそぶつ倒れる。」

「安全第一です!」

アミタはそう頷いていたが、優人が呆れた顔をして

「それはお前にも言えるぞ。アミタ。」

「うっ…!」

「妹を守る為とはいえ、無理にk」

「うわあああああつ!! 止めてください!! 恥ずかしいです!!」

アミタは必死に優人の口を手で塞いだ。皆は首をかしげていたが気にしなかった。その時アプロディアが

「早く外に行きましよう? もう帰るのでしよう?」

アミタはハツとなって皆に

「そ、それでは私に着いてきて下さい!!」

皆はアミタに着いていき外に転送した。

くく海鳴 公園くく

未来組とアミタ達と共に優人達はやって来た、少しの間マテリアルの皆や、未来組、フロリアン姉妹、今の時間組み達は少しの間話していたりした。だがついに、別れる時が来た。アミタが

「未来から来た人達は此処に集まって下さい! この装置で未来にかえます!」

「後帰る瞬間に未来組と今の時間の人達の記憶は消させて貰うわ。」

そうキリエが言った。その時マテリアル組が優人の所へ向かった。

優人がマテリアル組に

「どうしたんだ?」

シユテルが

「短い間でしたが、この恩は忘れません。」

「カレーおいしかったよ!」

レヴィが元気よく言った。ディアーチエが

「あ、あのときの事は感謝するぞ。」

「助けてもらった恩は絶対に忘れません。エルトリアでの事が終わったら必ず会いに行きます。」

ユーリがそう言った後、優人はキリエとアミタの所へ向かった。

「忘れ物だぞ、フロリアン姉妹。」

そう言って優人はGNドライブを三つ渡した。アミタが

「ありがとうございます! 必ずお礼はしますから待って下さい!」

キリエもアミタに続くように

「迷惑かけたりしたけどありがとうね、また会いましょう！」

そう言つてフローリアン姉妹とマテリアル組は転送装置の所へ向かった。そして、未来組、マテリアル組、フローリアン姉妹はそれぞれの時間軸へと帰った。

くく一週間後くく

マテリアル達が去つていつて一週間がたった。優人達はアリサ、すずかやなのはの家族達に魔法の事や、今までのことを話した。なのはは心配させた分家族に怒られりしたがそれ以外なんにもなかった。そして優人はゼスト隊での任務で成績をのばしつつあった。

くく地球の真ん中くく

「私の役目はしばらくくないでしょう。後は貴方方下さいです。私は此処で見守りましょう。来るときまで…。」

そう言つてアプロディアは目を閉じた。

くく???
くく

それは誰もわからない場所で脈をうった。それは動いた。目的を果たす為に…。

この場所はとてもぼろぼろな場所であった。

くく
???
くく

「ふふ、遂に、遂に完成したぞ!!あいつの遺伝子から生まれた最強の兵器が!これで計画は加速する……。」

その者はそこからはなれていった。試験管の中には全裸の女性が眠っていた。

フアントムグリード編

第45話 新たな始まり

くく?????
????くく

少しライトが薄暗いこの場所には9く10人の人がいて、1人がこう言った。

「皆に集まってももらったのは他でもない、遂にあの部隊の編成が完了したようです。」

「ならば手始めに反乱の疑いがある星を襲撃させましょう。」

「フアントムグリード出撃だ。」

「目標は第84管理世界、ブリゲートだ。」

くく第84管理世界 ブリゲートくく

この星は常に活気が溢れていて人々も楽しそうに暮らしていると有名な星だった。しかし今この場所は悲鳴と子供の泣き声や爆音や建物が崩れていく音のなどが聞こえていた。この星はいま襲撃されている。青かった空は今では黒い煙と火によって赤黒くなっていた。

「早くにげ…！」

避難誘導していた男が背中に魔力弾をうけて倒れた。

「た、たすけっ…！」

女が心臓を剣で刺されて死んだ。

「やだ、やめて…！」

女が泣いているのにも関わらず兵士達はその女の夫撃ち殺した。

「お前らなんt…！」

男はなにかを言おうとしたが首をはねられた。女子供が必死に逃げようとするが撃ち殺されていった。倒れている親のそばでこども

が泣いているが兵士は気にせずとその子供を撃った。そしてそこから兵士達が撤退するとその場所に小さい光が落ちてきて着弾した瞬間にその星にある建物や人々は消えていった……。

〓 時空管理局 首都防衛隊隊長室 〓

『昨夜、一夜にして滅んだ第84管理世界 ブリゲートでは調査が行われていますが依然原因は不明です。管理局は生存者を捜索しておりますが、生存者がいる確立は絶b』

テレビの電源が切られた。この場所にはゼスト、クイント、優人がいる。ゼストは隊長達が座るデスクに座っている。優人とクイントは立っている。ゼストは

「お前達はこのニュースをどう思う？」

「今回は少しきな臭い雰囲気があります。」

「すでに局内では管理局の一部の者達がやったと思われるが。」

クイントと優人が答えた。

「この件は優人、探れるか？」

「ヴェーダを使えば調べればいけますが。」

「ならば、探ってくれ。」

「了解しました。」

「後この事は誰にも伝えないように。話は以上だ。優人さがつてくれ。」

「はっ。失礼します。」

そう言って優人は隊長室からでた。クイントが

「隊長、なんで私だけ残したんですか？」

「ああ、優人も残そうと思ったが優人にも用事があるだろうからな。」

「で、内容はなんですか？」

「ああ、四日後にな、メガーヌが帰ってくるぞ。」

「本当ですか!？」

「ああ、荷物はもう片付けおわったらしいが、退院は明日だそうだ。迎えにいつてやれよ?。」

「はい!。」

そう言つてクイントは部屋からでた。ゼストは椅子の背もたれに
よりかかり

「これから大変になりそうだな…」

そう呟いて窓を見た。

　　〳〳ソレスタルビーイング号　ヴェーダがある部屋〳〳

量子型演算処理システムヴェーダは常に新しい情報をあらゆる所から手に入れている為色々な情報を手に入れる事ができる。優人はヴェーダを使ってブリゲートが滅んだ原因を調べていた。セシアやCBも共に調べていた。そして一段落ついたときにリジエネが入ってきた

「いたいた、優人」

「どうした?。」

「ラクス・クラインだっけ?その人が呼んでるよ」

「ラクスが?。」

「行ってみるといいよ」

「分かった。セシア、CB続けて調べといてくれ」

「分かりました」

『了解です』

　　優人は部屋から出た。セシアが

「マスターはモテモテですね」

「まあ、それが彼だからね。」

『マスターは基本誰にでも優しいですからそこに惹かれる人も多いという事でしよう。』

「それもそうですね。」

セシアが背伸びびしながら言った。リジエネがディスプレイを見ながら

「今回の事件はどうやら管理局も一枚噛んでる噂があるようだね」
『確かにその様な情報がありますね。』

とCBが答えた。

「どの組織も一枚岩ではないって事だね。」

セシアは憂鬱そうな顔をしながら言った。

〃〃ソレスタルビーイング号 メインルーム〃〃

『……では失礼いたしますわ、優人。』

「ああ、またな。」

『はい！』

通信が終わった。優人は少し息をついてメインルームにある椅子に座った。

「事件が一つ終わったと思ったたらまた新たな事件か……。なんか、最近、呪われてると思うてしまうよ。さて、明日は、学校か。」

そう言つて優人はモニターを使ってCBを呼び出した。呼び出した数秒後にCBは反応した。

『マスター、どうかしましたか？』

「ああ、明日学校だからさ、共に来て貰いたいと思つてな。」

『了解です。ではセシアとリジエネに伝えてきます。』

「ついでに彼らにも適度に休むように伝えといてくれ。」

『了解です、マスター。』

そうして通信がきれた。その数分後、CBが優人のもとに来た。

『お待たせしました、マスター。』

「では、向かうか。」

優人達は転送装置を使って家に向かった。

〃〃次の日 優人の自宅 玄関前〃〃

「よし、これで鍵は閉まったな。」

そう言つて優人はドアに鍵が閉まつてるか確認して学校に向かつ

た。

〓〓私立聖祥大付属小学校 とある教室〓〓

優人は自分の教室に入った。その時、既になのは、フェイト、すずか、アリサがいた。すずかが一番最初に気付いて

「優人君、おはよう。」

と挨拶した。そしてなのは達も

「優人君、おはよー！」

「優人、おはよう。」

「おはよう、優人」

と挨拶した。

「ああ、おはよう、すずか、なのは、フェイト、アリサ。」

と優人は挨拶した。フェイトが優人に近寄り

「今日は少し遅かったね、何かあったの？」

「いや、少し調べ物をしてね、それで遅くなってしまったんだ。」

「そっか。無理はしないでね？」

「分かってる。」

そう言つて優人は一番後ろの自分の席に座った。

〓〓数時間後〓〓

今日の授業が全て終了し、帰るか準備をした優人のもとになのはが来て

「優人君、今日ね、すずかちゃん達と遊ぶんだけど優人君も一緒に遊ばない？」

「今日はなんの予定もないから大丈夫だよ」

「ほんとー！じゃあすずかちゃん達に言つてくるね！」

そう言つてなのははすずか達の所へ向かった。

（元気だね、なのはは。）

《マスターも少しは小学生らしく遊んでみたらどうです？》

（ま、悪くはないか）

優人はなのはと会話してるすずか達の方を見たらすずかが手招き

してたので優人は席をたちすずか達の所へ向かった。

くく時空管理局 首都防衛隊隊長室くく

この部屋ではゼストが一人で書類を整理していた。ゼストが一息ついたその時、通信が入ったら。

「お前から通信とは珍しいな、レジアス。」

『今回はそれ程重要な案件ということだ。』

「任務の件か？」

『それもあるが、忠告も兼ねてだ。』

「忠告？何のことだ。」

『お前どうやら、ブリゲートの件を部下達に調べさせてるそうじゃないか。』

「何のことか、さっぱりだな」

『とぼけるか、まあいい。その件については気をつけろよ。私にも分からない所で事態は進んでるらしいからな。』

「ご忠告感謝するが任務についてはなんだ？」

『ああ、ある場所の調査だ。日程などについては後日しらせる。』

そうして、通信はきれた。ゼストは椅子に深く座り

「まさか、もう気付かれてるとはな。気をつけねばな。」

ため息をつきながら言った。その時ドアが叩かれた。

『隊長。いいですか？』

「いいぞ、入ってきて。」

『失礼します。』

ドアが開いた。

「隊長、次の会議の資料ですが、どうかしましたか？」

「いや、何でもない。資料か、ありがとう。」

そうやってゼストは資料を受け取った。ゼストは資料を見ながら、

「今回の会議についてだが、優人も呼ぶか。」

「優人君をですか？何故？」

「彼の所持しているヴェーダについては知っているかな？」

「はい、なんでも優秀なシステムだと。」

「そういうことだ。彼には手伝ってもらいたいのだ。」

「なるほど、了解しました。では失礼します。」

「ああ、優人には私が伝えとく。」

ゼストはドアが閉まるのを確認したあと書類整理に戻った。

~~~~~  
?????  
????  
~~~~~

「さて今回諸君に集まって貰ったのは他でもない、どうやらゼスト隊が我々を探っている件についてだ」

「暗殺してはどうですか?」

「それは無理だな」

「何故です?」

「斉藤優人がいるからですか?」

「その通りだ。」

「ならばどうする?」

「彼等には次の任務が出ている。そこを急襲し潰すのはどうかな?」

「しかし潰した後の処理はどうするのですかな?」

「そんなもの不慮の事故やらゲリラに襲われたとかにすればどうとでもなる。」

「なるほど、いい案だな。では彼等の任務先でファントムグリードに襲わせるで決定だな。」

「異議はなし。」

「ならば斉藤優人やゼスト隊が持つてるデバイスやらはどうします?」

「データは抹消した状態で遺品として返せばいい。斉藤優人のデバイスは優秀だからな我々がいたくとしよう。」

「それに噂程度ですが彼は裏死海文書を所持してるとか」

「ほう?ならばそれもいたかどうか。それがあれば世界は我らの物同然」

「令状などでつち上げればいいのだからな。」

「そうだな。」

「それに罪状などいくらでもつくればいいですからな。」

「それはいいですな。」

「フツ、なら決定だ、では解散」

くく時空管理局 会議室くく

この場には2日後に帰ってくる予定のメガーヌを除いたゼスト隊がいる。ゼストが口を開き

「よし、全員揃ったな。では、次の任務の概要について説明する。渡した資料を見てくれ。」

全員が資料を見る。

「次の任務はレイズ地方で発見された謎の研究所の調査だ。本来受ける予定だった部隊が他の任務と重なった為我々が出ることとなった。任務は1週間後だ。だから今の内にメンテとかを終わらせとけよ。質問はあるか？」

「はい、隊長。1つあります。」

優人が手を挙げた。

「なんだ？」

「何で1週間後なんですか？」

「ああ、それはな2日後にメガーヌが帰ってくるんだ。」

ゼストがそう発言した瞬間ざわついた。

「静かに。既にクイントが迎えにいったって荷物整理も手伝っている。あと少しで荷物整理が終わるらしいからな。そういうのも含めて1週間後ってわけだ。」

「なるほど、了解です。」

優人は納得した。

「他にいるか？いないなら今日から準備に取りかかれよ。では解散。」
ゼストがそう言った後全員が席を立った。そして部屋を出て行った。優人もそれに続いた。

くくソレスタルビーイング号 メインルームくく

「くくってわけだ。だから1週間いないが大丈夫か？」

「分かったよ」

「後、調査は変わらずに続けてくれ。新情報とかはあったか？」

「いや、新情報は出てないが噂でだが君達を疎ましく思っている所があるらしいよ」

リジエネが言った。優人は首を少しかしげて

「もしかして上層部とかか？ 奴らの誘いを蹴って地上本部に行ったからか？」

「それもあるだろうけどもう一つあるだろう？」

優人はハツと気付き

「まさか……！」

「恐らく可能性はある。その件は僕が秘密裏に調べておこう、君は次の任務に集中してくれ。」

「ああ、頼む。もしそうならば調査先で襲撃してくる可能性も捨てきれないか……」

「気をつけるんだよ？」

「忠告ありがとうな、リジエネ」

くく2日後くく

くく首都防衛隊 オフィスくく

今首都防衛隊のメンバー全員がメガーヌが帰ってくるのを待っていた。優人が隣にいた隊員に

「メガーヌさんってどんな人なんですか？」

「あ、そっかお前が入った頃にはメガーヌさん産休になってたな。メガーヌさんは面倒見がいい人だよ、俺が新人だった頃にお世話になったからな。」

「後カワイイものには目がない人だけどな、意外とお前さん気に入られるかもな。」

「はは、かもな。」

隊員達は笑いながらそう言った。優人は心の中で

（そっか、鬼教官とかそういう類の人ではないのか、少し安心したとい

うかなんというか)

『しかしどんな方なのか楽しみですね、マスター』
(そうだな)

優人とCBが念話で話しているその時オフィスのドアが開きクイント、ゼストが入ってきた。そしてその後ろに紫色のロングヘアの女性が入ってきた。恐らくその女性がメガーヌだろう。

『メガーヌさん！おかえりなさい！』

隊員達は声を揃えて言った。メガーヌは微笑み

「ありがとう、ただいま皆！」

「今日はメガーヌが帰ってきた記念だ仕事を17時に切り上げその後は飲み会だ」

ゼストがそういうと

『おおおおおおお!!』

隊員達は大声で叫び喜んだ、ゼストはそれを見て少し笑いつつ

「よし、各員は持ち場に戻れ、優人こっちへこい。」

隊員達は持ち場に戻っていき、優人はゼスト達の所へ行った。

「隊長なんでしょうか？」

「ああ、お前さんはメガーヌに会うのはこれが初めてだろうか？だから挨拶をしてもらおうと思っただけな」

「了解です。斉藤優人二等陸佐ですよろしくお願いします」

「初めまして、私はメガーヌ・アルピーノよろしくね」

「はい」

優人が敬礼して言った。メガーヌはじいーつと優人を見た。

「何か？」

「少し頬を触ってもいいかしら？」

「は？頬を…でありますか？」

「ええ、駄目かしら？」

「いや、平気ですが男の頬を触っていいことでもあるんですか？」

「ありがとう♪」

そう言っただけメガーヌは優人を頬を人差し指で軽く突っついた

「これが若さなのね…ほっぺたがモチモチしてるわ」

「あ、あのメガーヌさん？」

「ほんとうやったらこんなにもチモチするのかしら」

「はいはい、メガーヌそこまで」

クイントがメガーヌの肩を掴み止めた

「むう、クイントなんで止めるのよ？」

「優人君が困ってるよ？」

「あ、ごめんなさい、優人君のほっぺたが柔らかくてつい…」

「い、いえ、楽しそうでしたです」

「ふふ、いいこね」

ゼストが少し言いづらそうに言った。

「んん、メガーヌ、優人、クイントいいか？」

『た、隊長、すいません』

「いや、早速仲良くなってくれたのらばうれしいぞ、メガーヌ5日には新たな任務が始まる。その間に色々とやることをやるといい」

「ハッ！じゃあ早速デスク整理しますね、じゃあ優人君またね」

「はい、また」

メガーヌはクイントとともにデスクへ向かった。ゼストが優人の肩に手を起き

「中々インパクトが凄いだろう？」

「え、ええ、まさか頬を触られるとは思いませんでした」

「まあそうだろうな、メガーヌはカワイイものとかに目がないからな」

「それは隊員の方々から聞きました」

「それもそうか、メガーヌのそれは部隊内では有名だったな。よし、優人も戻っていいぞ」

「はっ」

優人はデスクに戻った。ゼストは優人が戻るのを見ながら

(今回の任務何も起きなければいいのだがな…)

と、思った。

〓〓5日後〓〓

〓〓研究所〓〓

研究所の前には首都防衛隊の隊員と隊長がいた。ゼストが全員いるのを確認して

「よし、全員揃ったな。これより研究所の調査を開始する！研究所内には何があるかわからない、各員は油断せず進むように！」

『ハッ！』

首都防衛隊は研究所へと入っていった。